弥生時代～古墳時代　調査区の中央には、谷状地形が存在し、調査区北東端でその最上部確認した。ここから尾根は分岐するが、住居跡等の遺構が確認されたのは西側の尾根上である。

西半部で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が８棟検出されたが、全体のプランが残存していたのは４棟である。

竪穴住居ＳＢ01　4.0m×4.6mの方形の竪穴住居で、４本柱である。床面直上まで削平されており、尾根側の西壁部で約10cm、谷側の東壁部では、２～５cm程度、壁面の立ち上がりが残存していた。一部に焼土と炭が検出された。出土遺物は細片が多く、時期を明確にしがたいが、古墳時代初頭頃の住居であると考えられる。

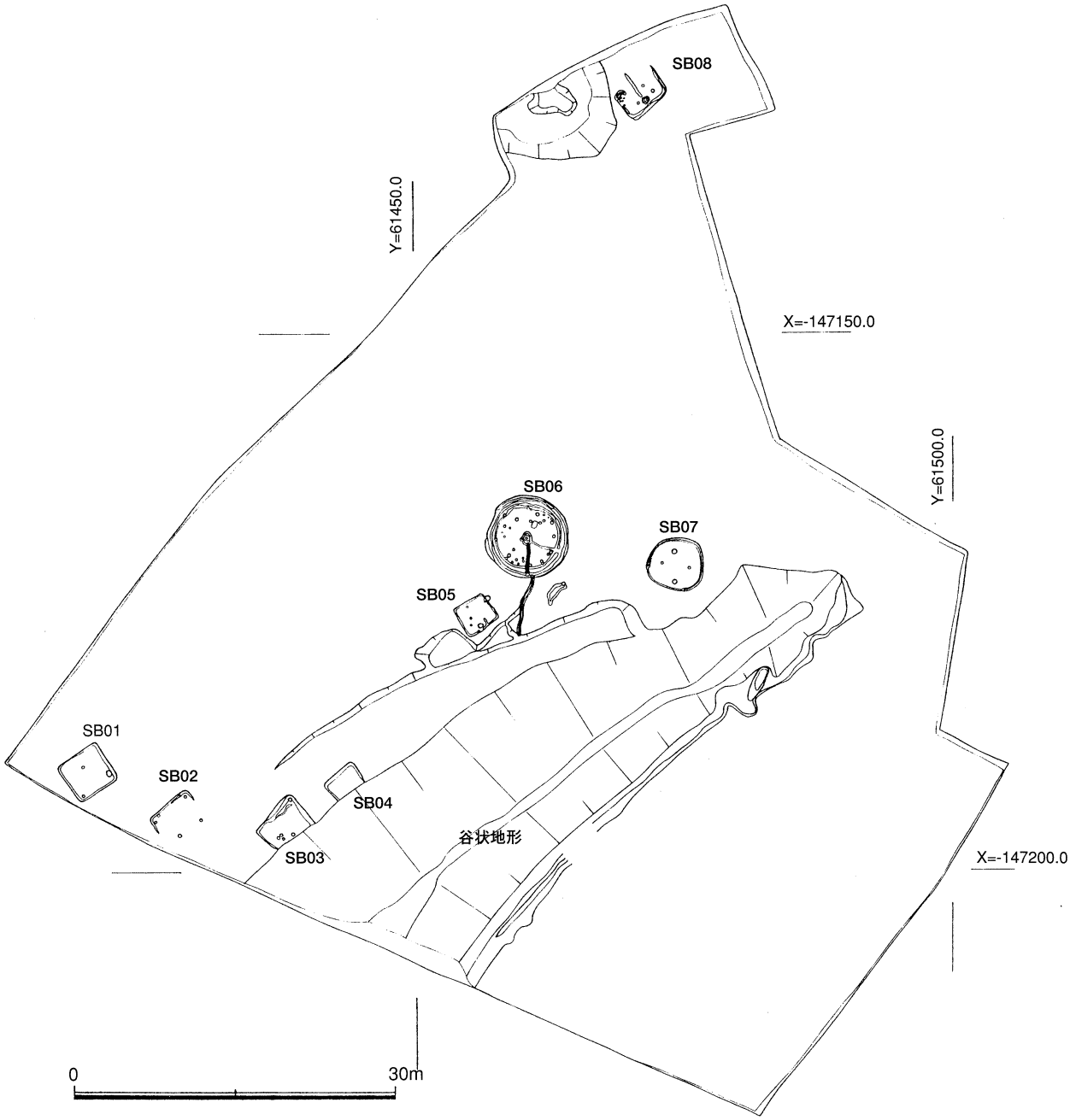


fig. 510　調査区平面図

fig. 511　調査区全景

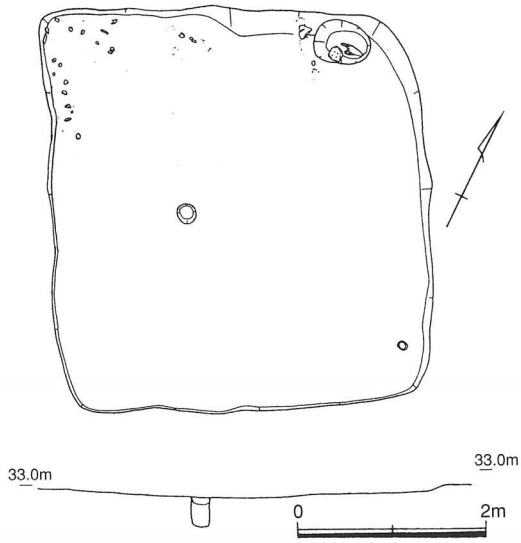


fig. 512　SB01　平面図・断面図

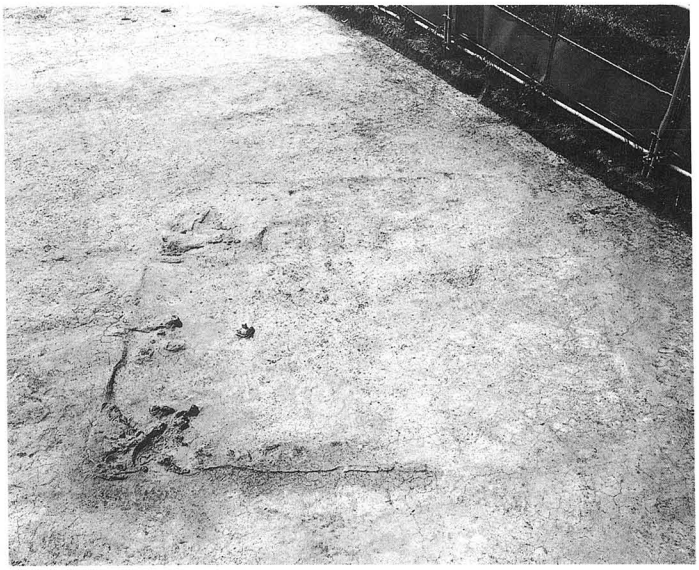


fig. 513　SB01

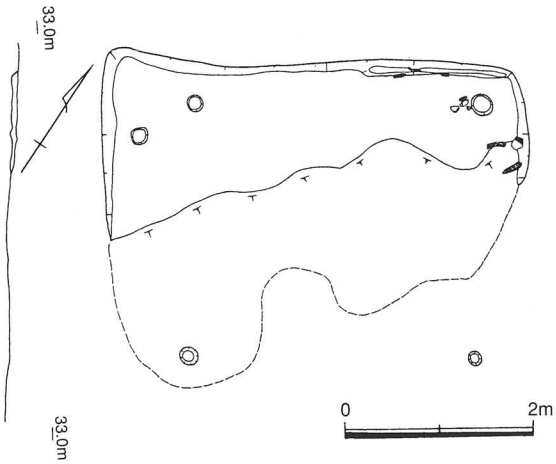


fig. 514　SB02　平面図・断面図

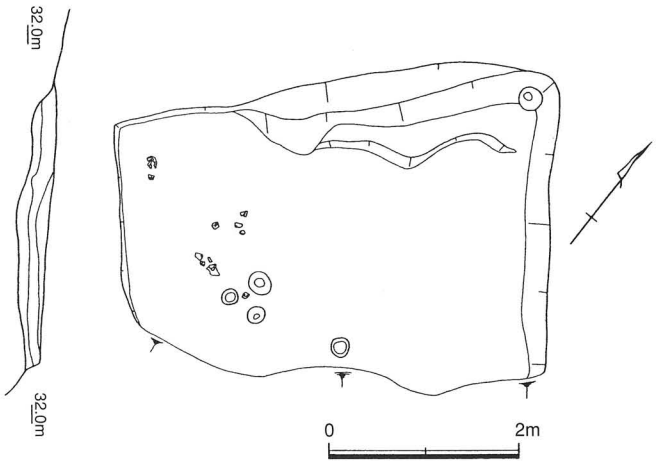


fig. 515　SB03　平面図・断面図

ＳＢ02　4.4m×3.5m以上の方形の竪穴住居で、4本柱である。床面直上まで削平されており、尾根側の西壁部で約10㎝、谷側の東壁は完全に失われている。柱穴の検出状況から、東西方向約4.0mのプランであると考えられる。一部に焼土と炭が検出された。出土遺物は細片が多く、時期を明確にしがたいが、古墳時代初頭頃の住居であると考えられる。

ＳＢ03　4.6m×3.0m以上の方形の竪穴住居である。尾根側の西壁部で約10㎝、壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側は削平されて残っていない。柱穴、中央土坑等の存在は確認されなかった。時期を特定できる遺物の出土がなく、時期は不明である。

ＳＢ04　3.2m×2.0m以上の方形の竪穴住居である。尾根側の西壁部で約10㎝、壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側は削平されて残っていない。柱穴、中央土坑等の存在は確認されなかった。時期を特定できる遺物の出土がなく、時期は不明である。

ＳＢ05　3.1m×2.9mの方形の竪穴住居である。柱穴は確認できなかった。炭化材及び焼土が良好に残存しており、屋根に葺かれていた植物遺体も一部残存していた。古墳時代初頭の住居である。

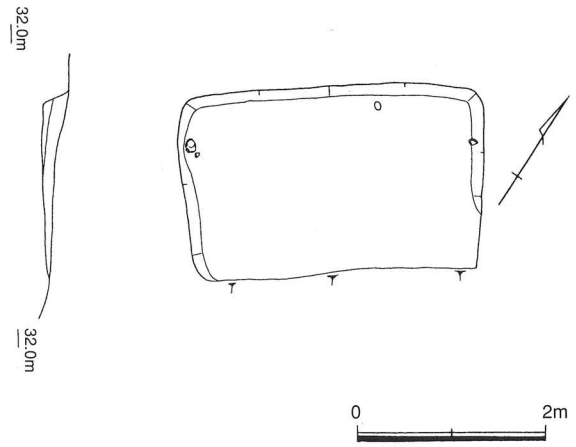


fig. 516　SB04　平面図・断面図

fig. 517　SB04

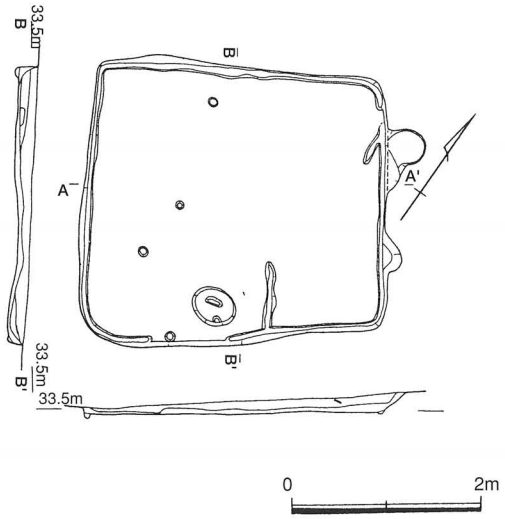


fig. 518　SB05　平面図・断面図

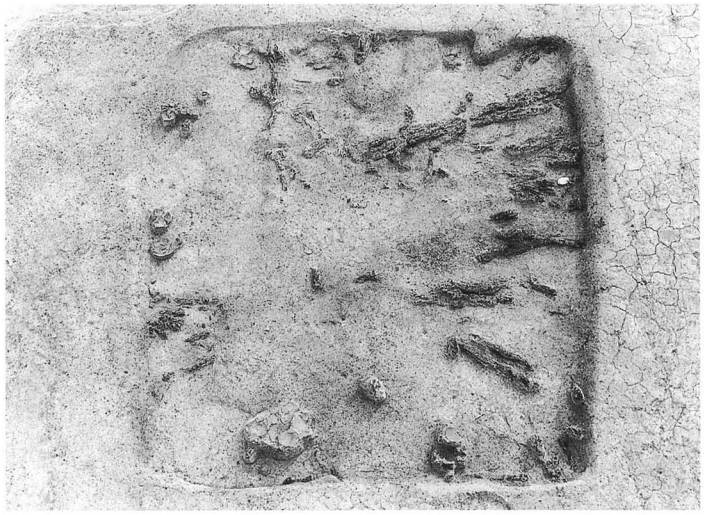


fig. 519　SB05　炭化材検出状況

ＳＢ06　古墳時代初頭の竪穴住居で、拡張している様子が窺える。拡張前の住居は直径6.0mの円形で、７本柱と考えられる。周壁溝が全周する。時期を特定できる遺物の出土はない。

拡張前

拡張後　直径7.4mの円形に拡張されており、拡張前の周壁溝は埋められている。８本ある柱のうち3本は、拡張前の埋められた周壁溝の上に立てられている。周壁溝の西側部分は一部２重になっている。東側には屋外に排水するための溝が設けられている。

中央土坑　長径1.2m、短径1.05m、深さ0.77mの規模で、土坑内には焼土、炭などが検出されたが、壁面は火を受けた痕跡はない。中央土坑に繋がる溝の壁面に火を受けた痕跡が残る。

中心から放射状に掘られた幅10cm、深さ18cmの溝である。遺物は出土していない。屋内を区画するために設けられた可能性がある。

ＳＢ07　直径4.7mの古墳時代初頭の円形竪穴住居で、４本柱である。周壁溝が全周する。

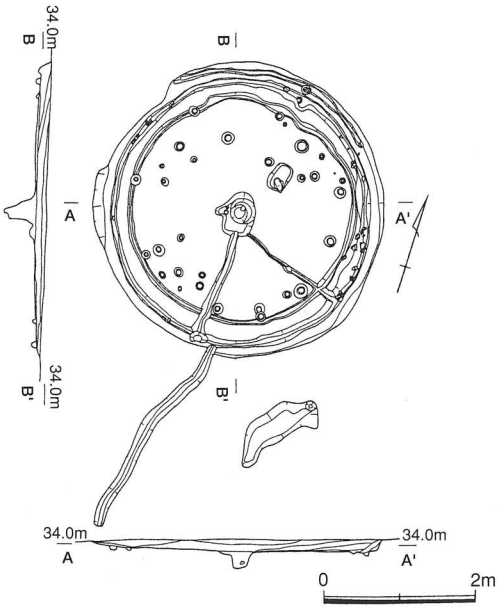


fig. 520　SB06　平面図・断面図

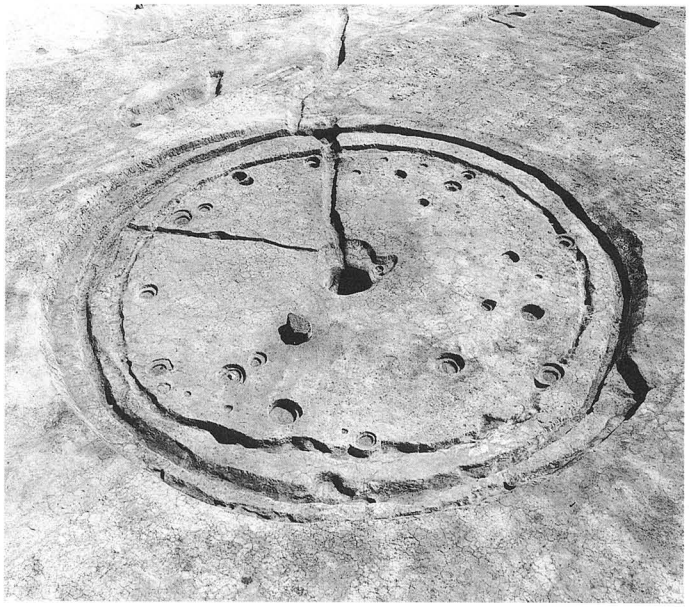


fig. 521　SB06

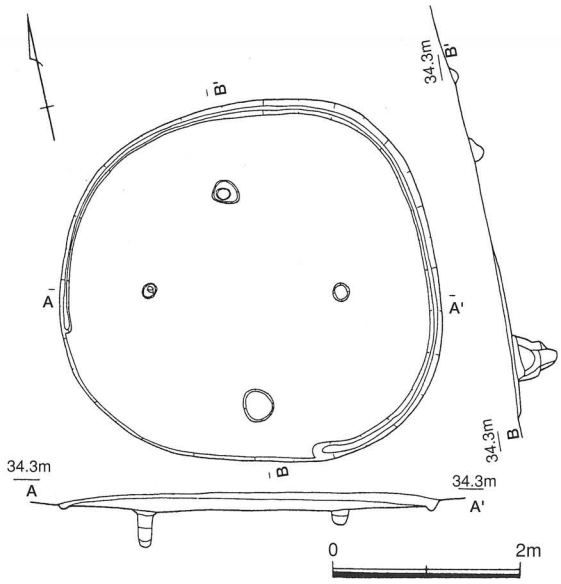


fig. 522　SB07　平面図・断面図

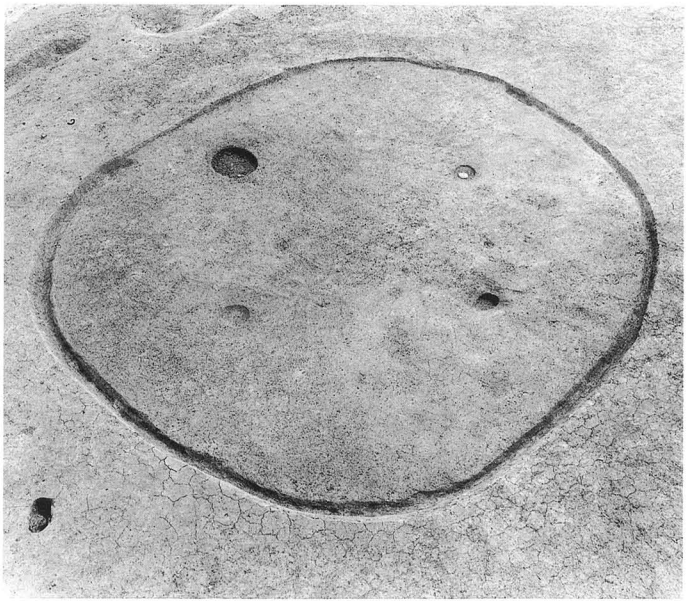


fig. 523　SB07

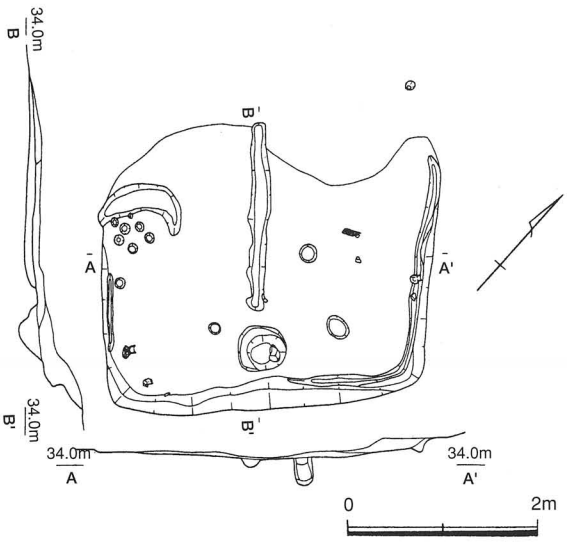


fig. 524　SB08　平面図・断面図

fig. 525　SB08

SB08　　4.4m×3.9mの方形の竪穴住居である。尾根側の東壁部で約20㎝、壁面の立ち上がりが残存していたが、谷側の壁は失われている。残る3辺には周壁溝が存在する。土坑は尾根側の壁際にあり、焼土・炭が出土している。柱穴と特定できる遺構はなく、構造は不明である。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物が少量出土している。

3．まとめ

今回の調査は、谷状地形と、その西側の尾根部に設営された8棟の住居が検出された。そのうち2棟は住居と断定しがたいが、規模等から住居である可能性が高い。東側の尾根部では遺構が全く確認できなかったが、谷部の遺物の出土状況から、本来は存在したと考えられる。遺物が未整理であるため、それぞれの住居の共存、前後関係等の検討は今後に残されたが、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落の立地を示す1例となった。

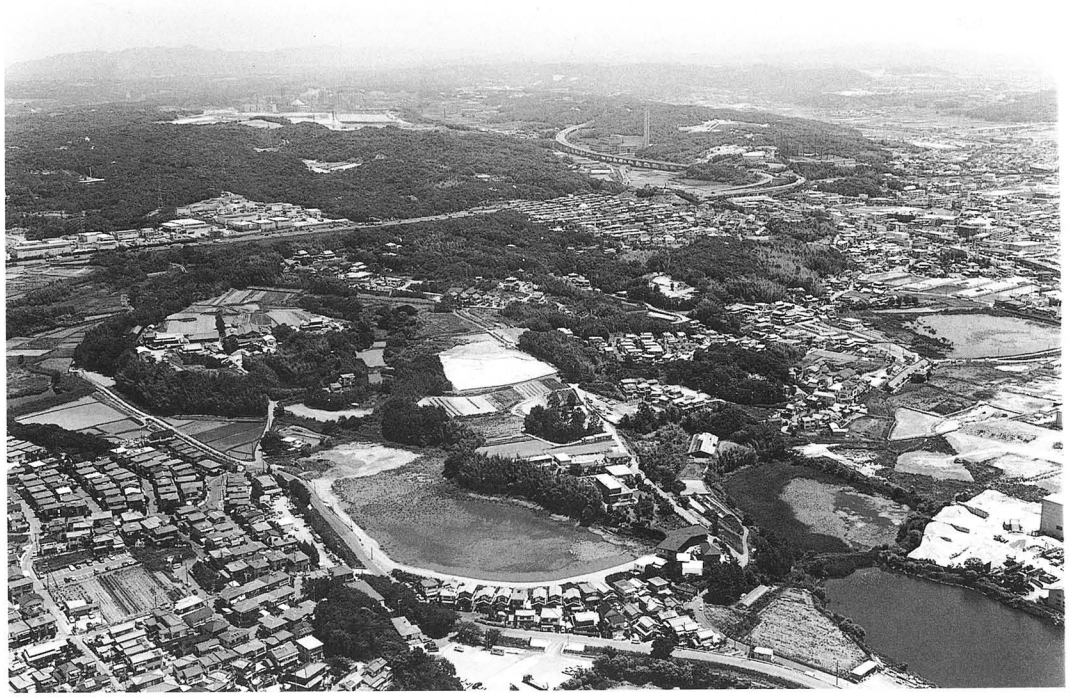


fig. 526　調査地全景（南上空から）

62. 丸塚（まるづか）遺跡

1．はじめに

当該地は、区画整理事業の計画が進められており、事業地内の埋蔵文化財の有無について平成５年度に試掘調査を実施した。その結果、北側については弥生時代の遺構及び遺物包含層が確認され、南側については弥生時代の遺物包含層は確認できなかったが、条里遺構が存在する可能性が指摘された。

平成７年１月17日未明に発生した阪神・淡路大震災の復旧・復興に伴い、住宅地の確保がさらに急がれることとなった。平成８年２月に行われた確認調査では、今回の調査区の北側に微高地が確認され、中世の遺構面と弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡や土坑などの遺構が検出されている。また、平成８年５月には道路建設部分の1500㎡について全面調査をおこない、中世後半（室町時代）の掘立柱建物跡数棟・柵・溝などと弥生時代の竪穴住居跡７棟・柱穴・土坑・溝などが検出されている。

平成８年12月には、条里遺構が存在する可能性が指摘されていた南側について確認調査を実施した。その結果、中世以前の洪水堆積に覆われた水田跡が検出された。

今回は遺跡範囲確認調査の結果を受けて、遺構面に影響を及ぼす道路予定地部分の3600㎡について全面発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとした。

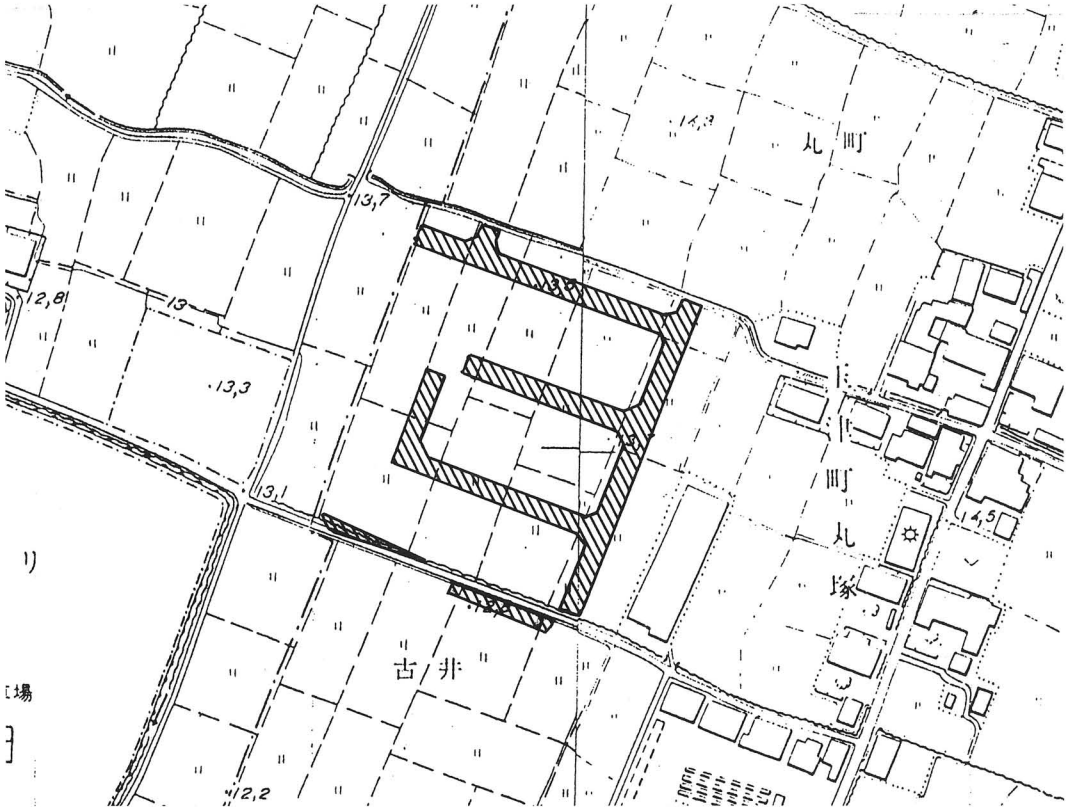


fig. 527
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

丸塚遺跡は櫨谷川と明石川との合流点の北側に広がる、標高12～15mの平野部に位置する。これまでの発掘調査により、中世後半（室町時代）・古墳時代・弥生時代の遺構や遺物が検出されている。隣接地には、居住遺跡や玉津田中遺跡が広がり、明石川を挟んで出合遺跡が、櫨谷川を挟んで今津遺跡が所在し、一帯が遺跡集中地域となっている。

調査の方法　今回の発掘調査は、道路予定地部分を①～⑨地点に区分し、①～④地点・⑤地点の一部分・⑥地点について実施した。なお、検出遺構の位置を表示するのに磁北に合わせた10m×10mの区画を設定し、北から南へA・B・Cとし、西から東へ1・2・3・・とした。

基本層序　調査地の基本層序は以下のとおりである。(fig.528)

第1層、暗黒灰色粘質土の近現代の耕作土である。第2層、近世の陶磁器片を少量包含する。淡灰褐色粘質土で、おそらく近世の耕作土と考えられる（第1遺構面)。

第3層、灰色～灰褐色粘質土で、ごく少量の東播系と思われる須恵器が出土している。鉄分沈着層を確認でき、耕作土の可能性が高い。第4層、灰色粘質土（微砂）で、全域で安定して確認することはできない(第2遺構面)。このため一部では第2と第3遺構面は明確に分離できない部分がある。

第5層、黄褐色洪水砂礫層である。調査区の全域を覆っている（第3遺構面)。第6層は、灰色の洪水砂礫層で、この下層から水田畦畔（上層水田・下層水田）を検出した。

第7層、水田（第4遺構面，上層水田）である。灰色～淡灰色粘質土、あるいは粘土であるが、その大半は洪水砂（5・6層）によって削平されており、確認できたのは6地点の北部と南部の一部に限られる。

第8層、上層水田と下層水田の間の灰色洪水砂層である。SX24ではこの8層が埋土となっていた。第9層、水田（下層）で、灰褐色～灰色粘質土ないし粘土である。

第10層、水田（下層）以前の褐色粗砂の洪水層である。6地点北半では確認できたおらず、調査区全域を覆う洪水ではなかったものと判断できる。

第11層、淡灰色～青灰色粘質土である。直上が9層となる部分が多く、畦畔を検出することはできなかったが、この層が水田として使用された可能性は否定できない。第12層、淡灰白色粘質土。第13層、灰色～淡灰色粘土。第14層、青灰～暗灰色粘土。

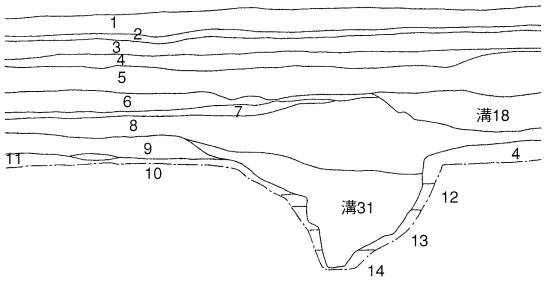


fig. 528　調査地土層断面図

各時代の状況

近　　世　第2層内に河原石を用いて築いた暗渠排水遺構を検出した。幅20cm、深さ25～30cmの溝を掘削した後、15cm大の細長い礫を平行に並べ、その上に30cmの間隔をおいて同様の礫を横に渡している。その上を8cm大の円礫で覆い、さらに3cm大の小礫を被せてある。平面プランを完掘したわけではないが、現在の水田に沿って「T」の字もしくは「Ⅱ」の字がたにつくられている。余分な水を主排水施設に流し込むものではなく、地面にしみ込ませる為の施設であると考えられる。

暗渠排水施設から江戸時代後期の陶磁器が出土したことと、現在の耕作土が全く入り込んでいないことから、江戸時代後期につくられたものであると考えられる。暗渠排水施設は、今回の発掘区域内だけでなく広範囲にみられることから、個人で作業したのではなく共同体主導のもとで敷設されたと考えられる。

江戸時代には享保の改革以降全国的に新田開発が盛んにおこなわれるが、丸塚集落の成立を含め関連性があるは、文献資料と併せて追求してゆくことが今後の課題である。

中　　世　この時代の遺構は4層上面あるいは5層（洪水層）上面で検出できる。実際には中世の遺構面は2面あるのもと考えられる。しかし、4層は全域で検出することができないため、中世と考えられる遺構の大半は明確に分離することができない。

掘立柱建物　中世の遺構は、調査区北半では溝を数条、南半では掘立柱建物2棟以上と土坑を検出した。C10区の溝5は幅5m、深さ0.9mの規模で、断面は浅い「U」字形である。D12区で検出した溝6の断面形及び、埋土は溝5と酷似しているが、溝6は袋状に収束する。これと同様な溝（正確には土坑とするべきか）は調査区内の数カ所で確認できる。いずれも埋土は灰色系の粘土、もしくは粘質土で、流力は弱いか流れていない可能性が高い。

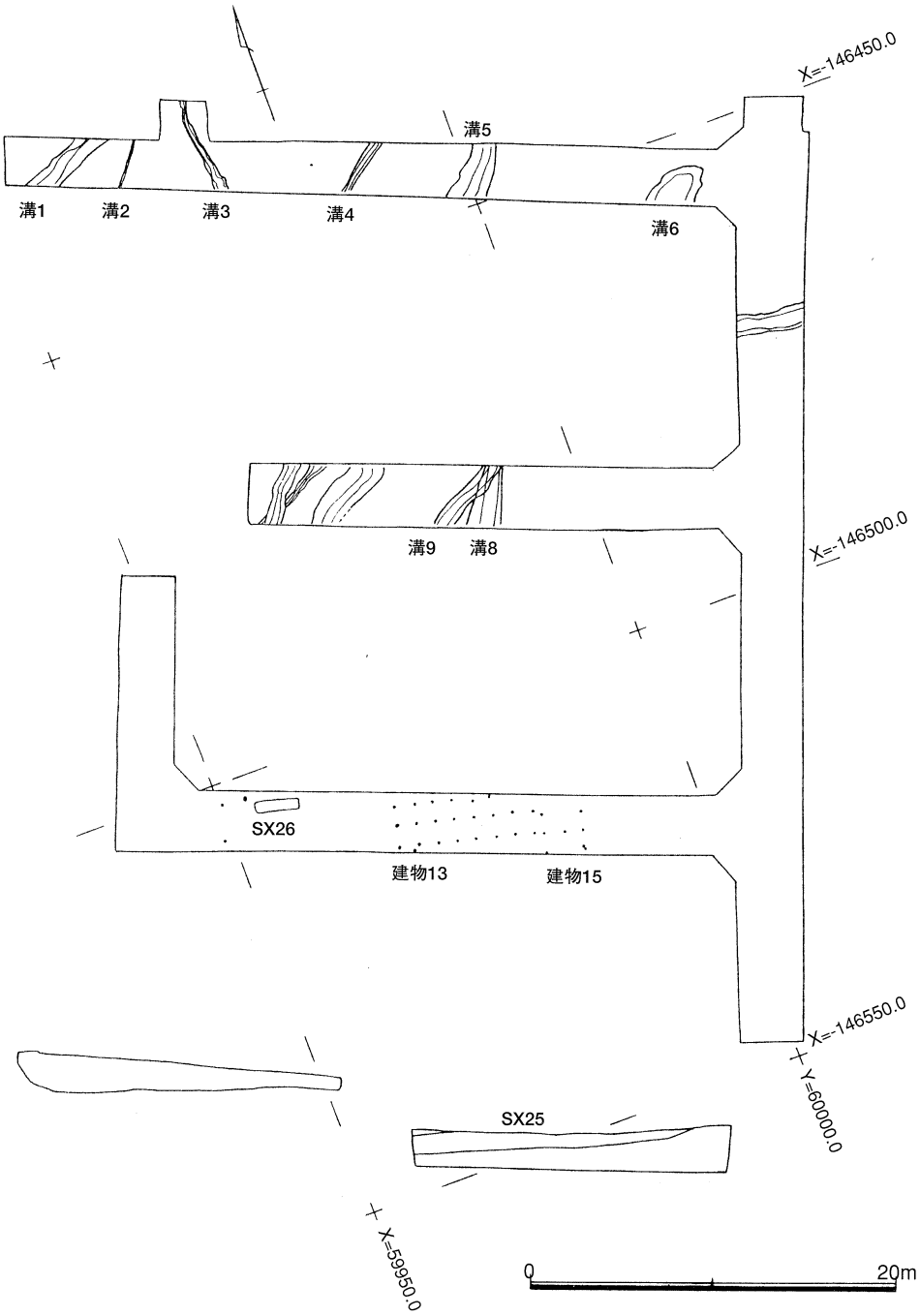


fig. 529　中世遺構面　遺構平面図

掘立柱建物13　Ｊ７区では掘立柱建物を２棟以上検出した。建物13は４間×７間の総柱建物である。建物は部材を抜き取ったらしく、ピット内に明確に柱痕跡を確認できるものはなかった。ピット埋土からは土師器皿、須恵器椀、珪化木、柱部材、木片、木皮などが出土した。これらはほぼ同様な位置から出土することから、建物廃絶時に何らかの祭祀が執り行われたものと考えられる。遺物の時期は12世紀後半に属する。

ＳＸ26　建物13の西側に主軸をそろえてＳＸ26がある。ＳＸ26は長さ５ｍ、幅約１ｍの長楕円形の土坑で、木製品や獣骨とともに多くの土器が出土した。遺物は土坑の東側の最下層からまとまって検出された。

出土した土器は完形率が高く、いずれも正位置で、一部は積み重ねられた状態で出土している。木製品は薄い板状の羽子板に似た形状をしていること。獣骨も下顎骨が入っていること。土坑は人為的に、かつ短期間に埋め戻されていることなどから、この土坑が祭祀土坑であった可能性が高いと考えられる。この土坑から出土した遺物は、12世紀中頃のものであり、建物13が機能していた時期に併行する。

fig. 530　掘立柱建物 SB13　検出状況

fig. 531　掘立柱建物の柱材検出状況

fig. 532-1　土坑 SX26

fig. 532-2　土坑 SX26　遺物出土状況

古墳時代初頭　5．6層以下に洪水砂礫層に覆われた状態で検出された。D12区周辺とK10区の一部については上層と下層の二面の遺構面がある。検出された遺構には、畦畔で区画された水田、断面「V」字形の溝、道状遺構などがあり、遺物には埋設された土器がある。

水田　上面と下面を併せて少なくとも76面の水田が検出された。水田は調査区南側でとぎれており、現段階では水田域の南東端と考えているが、大畦畔になる可能性もある。この場所から体部のほぼ半分を欠く長頸の壺形土器が出土している。時期は庄内期に属する。

水田は幅15～20cm、高さ10～15cmの畦畔で区画されたものであり、9㎡～29㎡までの広さがみられる。水口をはっきり持つものはなく、自然にオーバーフローさせていたものと考えられる。畦畔は断面が半円形のものとレール形をしたものがみられる。畦畔の接続部分は上層面が「T」字形であるのに対し、下層面では「Y」の字形に接するという違いが見られた。無数の足跡が検出したが、稲作に係わる行動を復元できるものはなかった。

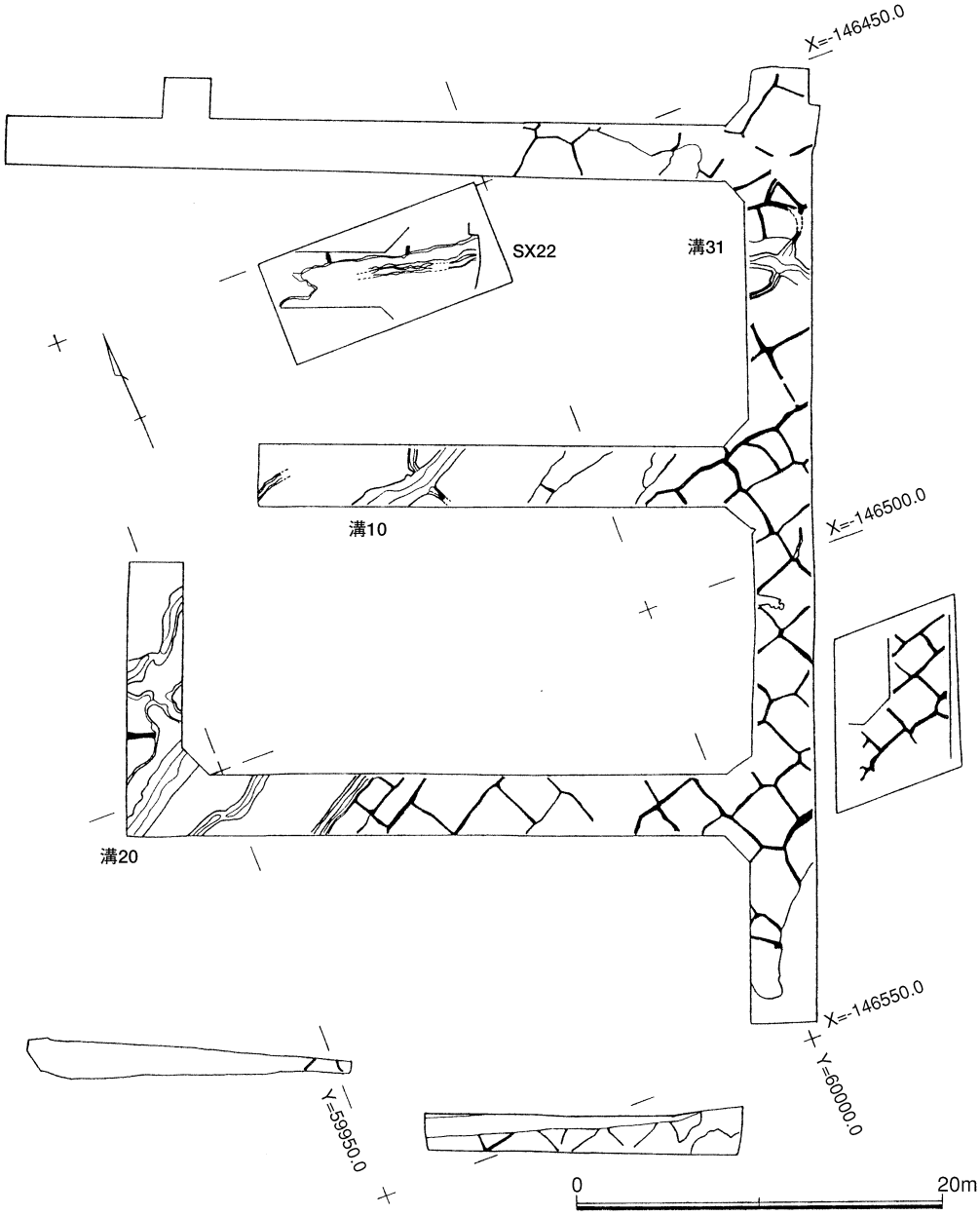


fig. 533　古墳時代初頭遺構面　遺構平面図

fig. 534　古墳時代初頭遺構面　全景

fig. 535　古墳時代初頭遺構面　水田

溝　Ｅ８区（溝10）・Ｇ４区（溝20）・Ｅ12区（溝31）で検出された。断面の形状および埋土の堆積状況から同一の溝であると考えられる。上面の幅２ｍ下面の幅0.2ｍ、深さ1.5ｍの断面「Ｖ」字形をなし、下流の溝20では幅、深さとも規模が大きくなっている。溝両側には、明瞭な形状ではないが大畦畔状の盛り上がりが認められ、その外側に不定形の湿地状の空間をおいて水田が造られている。溝10と溝31には両側から流れ込む小溝が直交して取り付いていた。また、溝31の北側の大畦畔内には、庄内期に属する複合口縁壺の一個体分の一部分が埋設されており、水辺での祭祀が行われていたことが窺える。

道状遺構（ＳＸ22）　Ｄ13区から東西にのびる幅1.5ｍの道状遺構が検出された。両側の路肩はわずかに盛り上がっており、水田面からの比高は12㎝を測る。南側には幅約１ｍ、深さ約10㎝の溝が道状遺構に沿って掘られている。その下層、側溝の真下にあたる部分から工具痕（ＳＸ24）が検出された。幅は８～15㎝で先端は「Ｕ」の字形をしている。地面に対して47°～65°の角度で掘り込まれており、土に接する面は平らである。おそらく金属製の刃先を持つ鋤を用いて掘られたものであると考えられる。

３．まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭・古代末～中世・江戸時代後期の３面が検出された。

古墳時代初頭（庄内式期）の文化層は、小畦畔で区画された水田が確認され、水田の取排水に関わる大溝も検出や、それに取り付く不定形な湿地状の空間が存在することもわかった。大溝沿いの大畦畔内には複合口縁壺が埋納された祭祀の場も検出された。特筆すべきことは、道状遺構（ＳＸ22）に沿う溝（溝23）を掘ったときの工具痕（ＳＸ24）が検出され、「Ｕ」字形をした金属製の刃先をもつ鋤であることが復元できた。今回調査した範囲の地域は、古墳時代初頭には生産域であったことがわかり、これまでの調査によって集落は北側に形成されていることが確認されているので、道状遺構が集落へ続いているかどうかが当時の景観を復元する上で興味深い問題である。

中世の遺構面は、周辺よりも標高の高い位置に形成されている。検出された掘立柱建物は、その廃絶に際して柱を抜きとり、掘形内に土器や柱部材の一部などを入れており、当時の建物建て替えに対する意識を知る上でも重要である。

事業地内には、約1,100㎡の未調査地があり、今後、当地域の変遷を把握するために発掘調査による正確な記録をおこなっていく必要がある。

63. 新方遺跡（しんぽう）　丁の坪（ちょう つぼ）地点　第６次調査

１．はじめに

新方遺跡は、明石川流域の弥生時代中期の拠点集落の遺跡として著名であり、1982年に調査された丁の坪第Ⅱ地点では弥生中期、大日地点では古墳時代後期の玉造工房址が発見され注目された。奈良時代から中世にかけても集落の存続が認められ、中世では神出古窯址群から搬入された瓦が出土する事で知られている。

今回の調査地は丁の坪第Ⅱ地点の北方約100mに位置し、1994年に集合住宅の建設が計画され建物基礎部分の調査（第5次調査）が行われたが、阪神・淡路大震災にともない設計変更が行われ全面調査となった。調査地は標高10m前後の沖積地上に位置する。

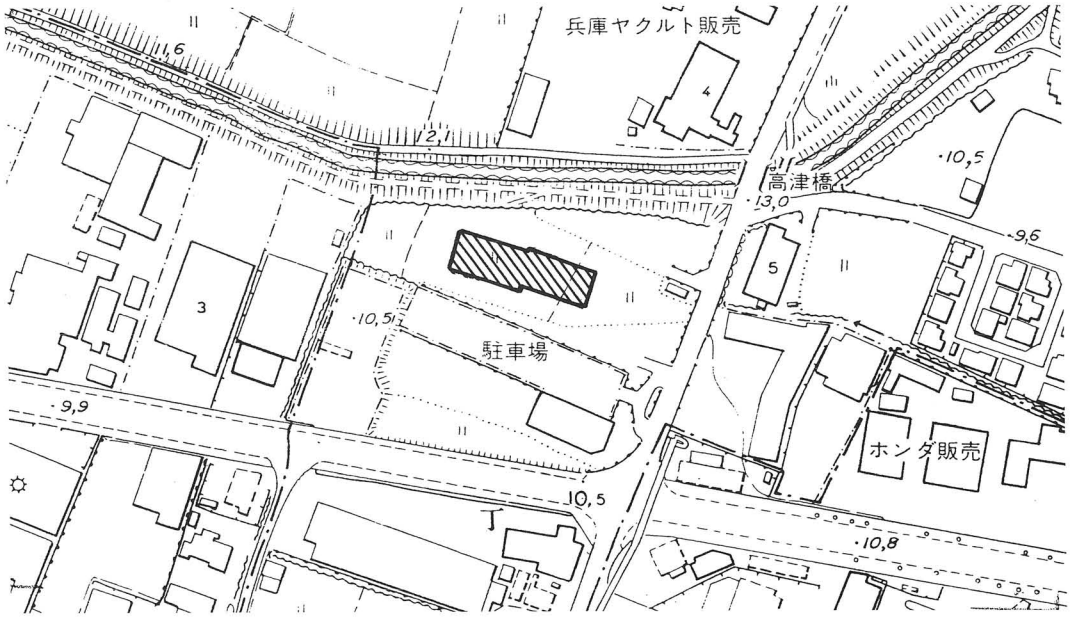


fig. 536
調査地位置図
1:2,500

２．調査の概要

第１遺構面

調査の結果５面の遺構面が確認でき、西側には天井川と思われる旧河道が検出できた。溝状遺構を２条ずつ検出した。その他、ピットを数基が検出できた。この遺構面の直上から12世紀から13世紀の土器が出土しており、その直後の時期と予想される。

ＳＤ101

調査区の北側を南北に走る溝条遺構である。幅は60cmから１ｍほどで、調査区の東の端に枡状の膨らみがある。埋土にシルト質層やラミナ状に堆積も確認できるので、往時は水が流れていた事が予想される。水田等に関係する灌漑施設であろう。

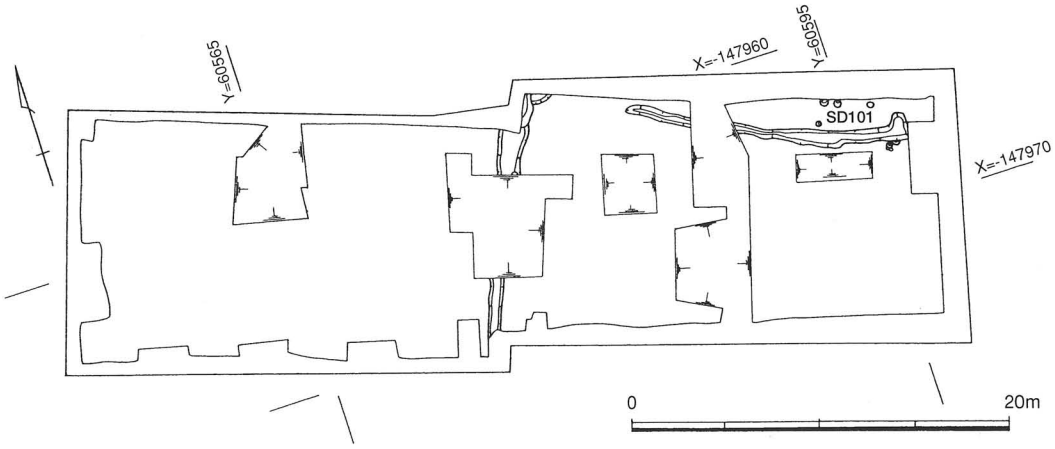


fig. 537
第１遺構面
平面図

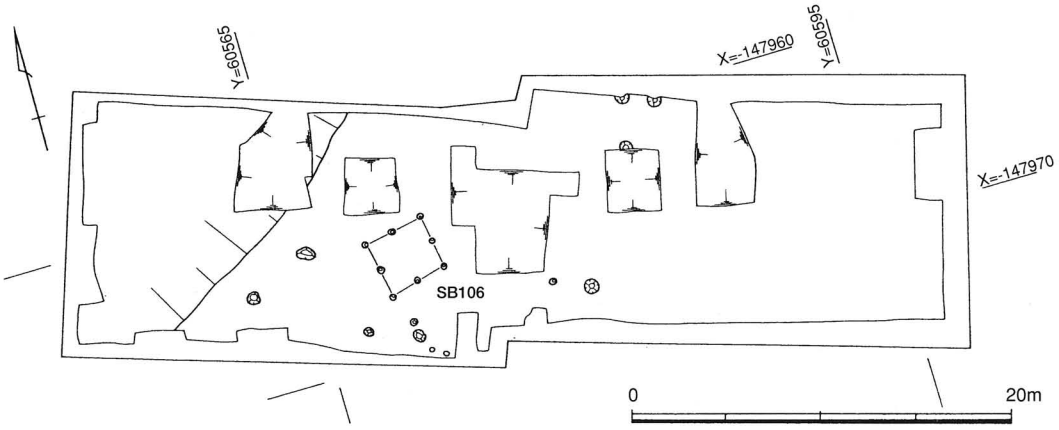


fig. 538
第３遺構面
平面図

第２遺構面　第１遺構面の10cmほど下層に確認できた遺構面である。調査区の北側を南北に走る溝状遺構と中央を南北に走る浅い落ち込み及び土坑が確認できた。

ＳＤ105　ＳＤ101の直下で検出できた溝状遺構である。土層断面で掘り直しの痕跡が認められ、一度埋没した後に掘り直されて、ＳＤ101となったようである。遺構に伴うような遺物はみられなかったが、ＳＤ101との時期差はそれほど大きくないと考えられる。

ＳＫ103　東西80cm、南北55cmの歪な長方形の土坑である。時期を決定づけるような遺物は出土しなかったが、銅製の円盤形の遺物が出土している。

第３遺構面　第２遺構面から約30cm下のシルト質細砂層で確認できた遺構面である。２間×２間の掘立柱建物1棟の他、ピット、土坑が数基確認できた。

ＳＢ106　２間×２間の総柱の掘立柱建物である。磁北にほぼ並行に建てられており、柱間は１間約1.5mから1.7mで桁行は東西約3.2m、南北約３mである。柱穴からは弥生土器が数点出土しているが、遺構が弥生時代の包含層にまで達しており、時期を決定するものではない。

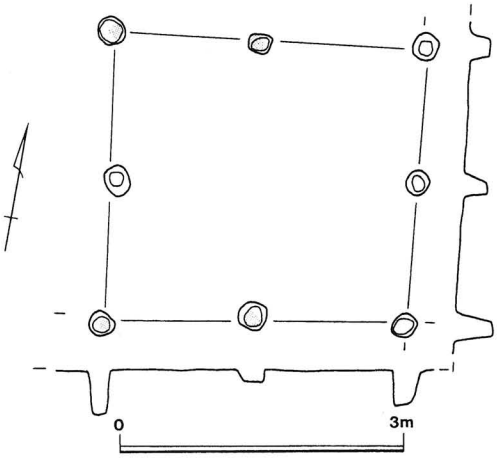


fig. 539　掘立柱建物 SB106　平面・断面図

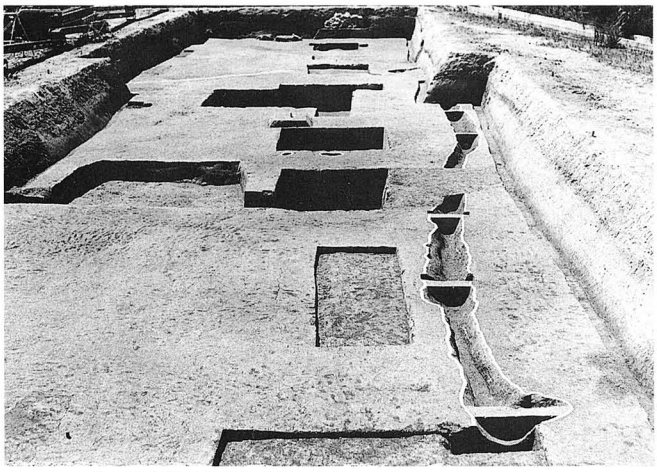


fig. 540　第１遺構面（中世）全景

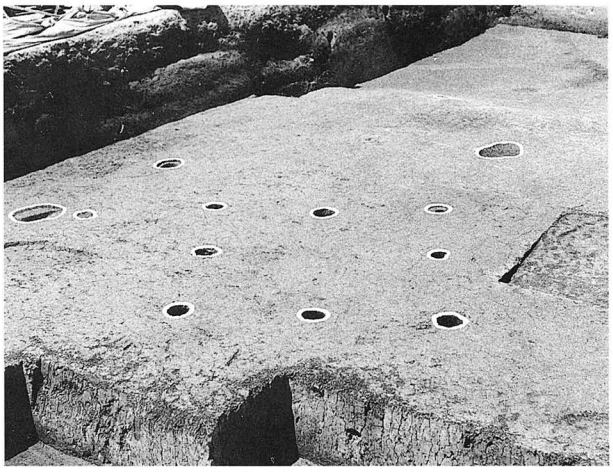


fig. 541　第３遺構面　掘立柱建物 SB106

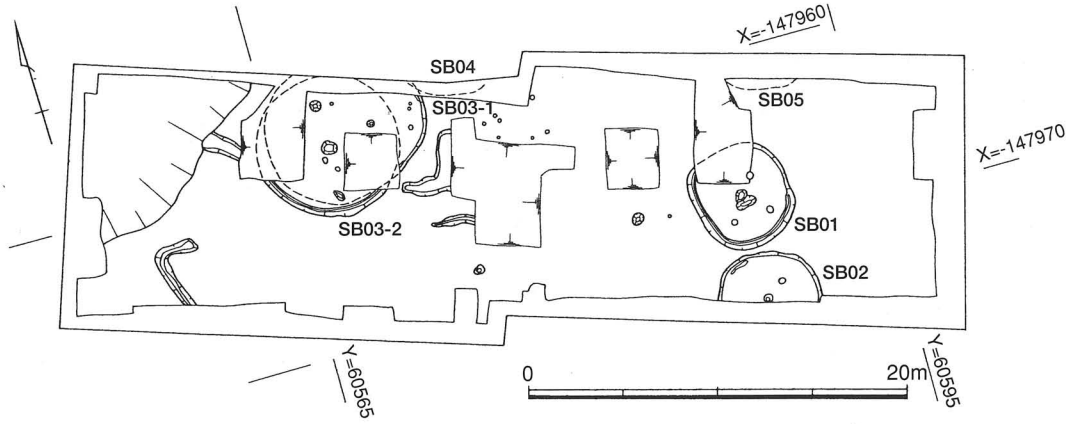


fig. 542
第４遺構面　平面図

第４遺構面　弥生時代中期の竪穴住居３棟及び、ピット数十基、土坑数基が確認できた。また、調査区北側壁面には住居址と思われる落ち込みが２基が確認できた。

ＳＢ01　東西約5.2m、南北約5.6mのやや歪な円形の竪穴住居である。中央土坑1基が検出されているが、柱穴は平成６年度調査の第５次調査において検出された東北側の１基しか確認できなかった。周壁溝は東側には存在しない。遺物は第Ⅲから Ⅳ様式の高杯等の弥生土器が出土している。また、炭化材が床面及び床面全面に張り付いた状態で検出できており、焼失住居と考えられる。

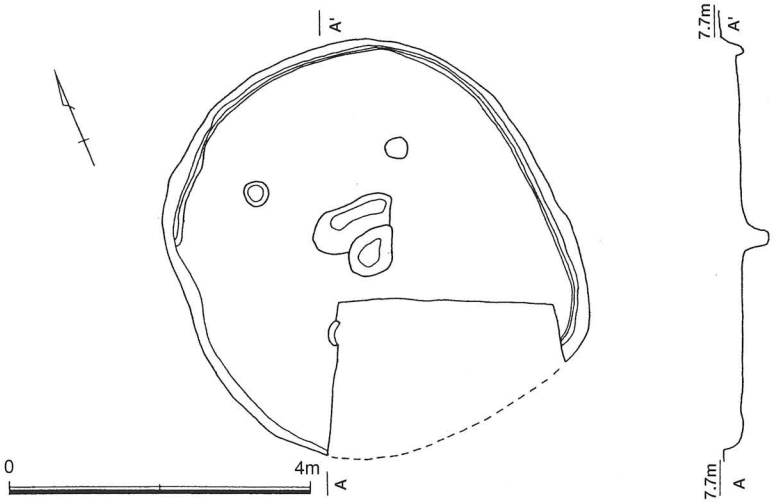


fig. 543
第４遺構面 SB01　平面・断面図

fig. 544
第４遺構面 SB01

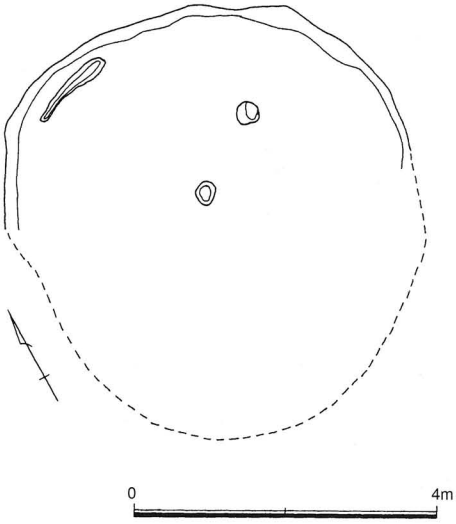


fig. 545　SB02　平面図

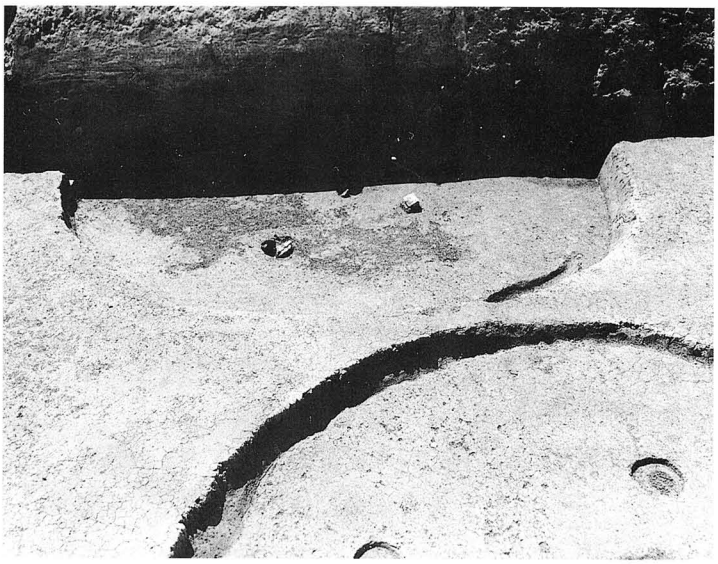


fig. 546　SB02

ＳＢ02　　今回の調査では、この住居址のおよそ1／2ほどを調査したものと思われるが、第5次調査で南側を部分的に調査しており、それと併せて考えると、東西約5.4m、南北約5.8mの楕円形になるようである。中央土坑は今回、第５次調査地においても検出できていない。周壁溝は、今回の調査では北側の一部分にのみしか検出できなかったが、第５次調査部分では全て確認できているので、東側で途切れると考えられる。

柱穴は第５次調査時も、今回の調査においても検出できなかったが、北東側に土器片が多量に出土したピットがあり柱穴の一つとなるかもしれない。遺物は第Ⅲから Ⅳ様式の弥生土器の他、石器類が数点出土している。

なお、この住居址でも床面及び壁面の全体に炭化材が検出されたおり、ＳＢ01と同様に焼失住居であると思われる。

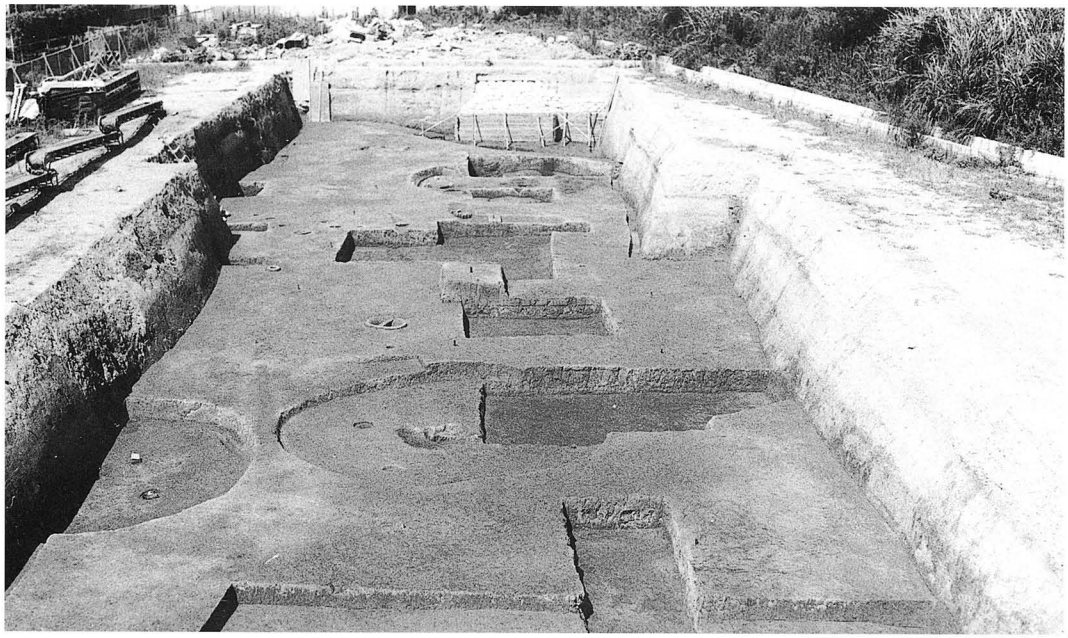


fig. 547
第４遺構面全景

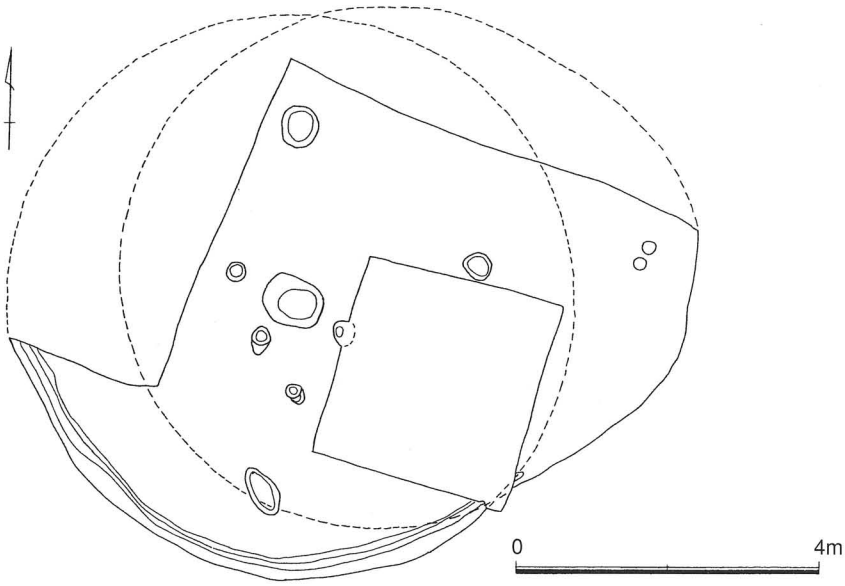


fig. 548　SB03　平面図

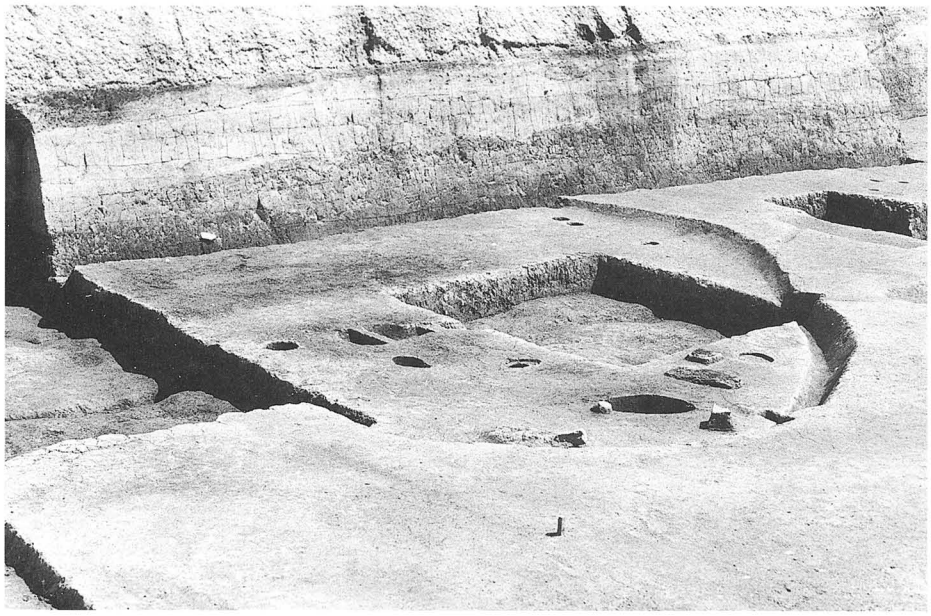


fig. 549　SB03

ＳＢ03－１　東西約7.8m、南北約7mの倒卵形をなし、中央土坑は検出できなかったが、５次調査時のトレンチ内にあった可能性もある。いくつかピットが検出できたが、どれも住居址に伴うものではないようである。周壁溝は北側の一部分のみ確認できたが、今回の調査では壁面の1/4ほどしか確認できていないので、東側で途切れること以外はわからない。

ＳＢ03－２　直径約7.6mのほぼ正円の竪穴住居址と思われ、中央土坑１基と柱穴と思われるピット２本が検出できた。周壁溝は壁面が検出できた範囲で全て見られたが、東側では壁面があったと予想される部分でも全く検出できていない。床面には炭化材が全面に検出でき、ＳＢ01、02と同様に焼失住居と考えられる。

なお、ＳＢ03の土層断面から見てＳＢ03－１よりＳＢ03－２の方が新しいと判断でき、ＳＢ03出土の扁平両刃石斧は、出土位置、層序からＳＢ03－２出土と考えられる。

ＳＢ04・05　調査区北側壁面で確認できた住居址状の落ち込みである。調査区内にはごく一部しか入っておらず、平面による検出はできなかった。ＳＢ04、ＳＢ05ともに弥生土器を出土しており弥生時代の竪穴住居と思われるが、詳細は不明である。

第５遺構面　掘立柱建物１棟と溝状の遺構が数状及びピット、土坑が数基確認できた。

ＳＰ113～116　調査区の東側で検出できた１間×１間の掘立柱建物である。当初、個別のピットとして調査を行ったが、検討の結果、掘立柱建物であると判断した。弥生土器以外の遺物は確認できなかったが、弥生時代の包含層に掘り込んでおり時期決定はできない。

ＳＫ124　調査区の南西側、旧河道の縁で確認できた土器廃棄土坑である。南北約1.5m、東西約1.1mで倒卵形をなす。遺構内からは弥生土器片が多量に出土しているが、遺物の検討は行っていないので、現段階では時期ははっきりしない。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代以後の時期に関しては目立った成果は得られなかったが、生時代に関しては限られた面積の中で４棟以上の住居址が確認でき、丁の坪周辺における弥生時代の集落のあり方について、一資料を提示できると思われる。

fig. 550　第５遺構面

fig. 551　第５遺構面 SK124

fig. 552　出土石器

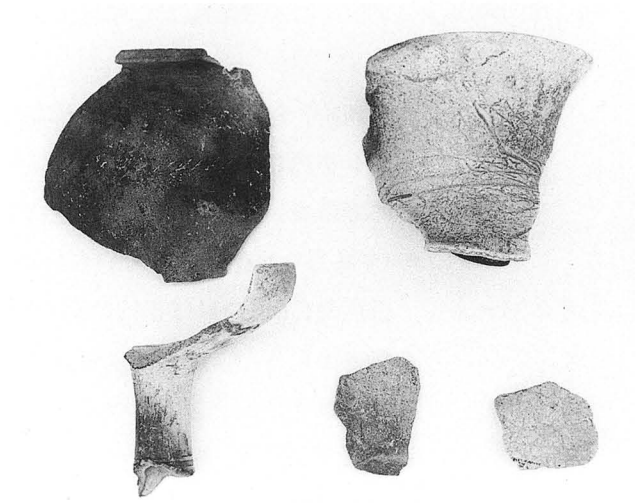


fig. 553　出土弥生土器

64. 新方遺跡（しんぽう）　東方地点（とうほう）　第５次調査

１．はじめに

新方遺跡東方地点は、明石川と伊川の合流する地点の北東に位置し、新方遺跡の中にあってはその南端にあたる。これまでの調査は、昭和59年度に都市計画道路玉津鳥羽線築造に関連する３次の調査が今回の調査地のすぐ北側で実施されている。また、この玉津鳥羽線の北側の民間の事業所新築の際に第４次調査が平成２年度に実施されている。

これまでの玉津鳥羽線関連の調査では、南に流れる最大幅15m、深さ1.2mの弥生時代前期～中期を主体とする遺物を多量に含む河道が調査されている。しかし、集落に関連するような遺構は確認されておらず、遺跡の南端にあたることからも、集落の周辺にあたる地点ではないかと推定されていた。

今回の調査地は、この第3次調査地の南に接する地点であり、調査された弥生時代の河道の南側部分が出土することが予測されていた。調査は、民間の賃貸住宅の建設に伴うもので、工事により遺構が影響を受ける範囲に限定して発掘調査を実施することになった。

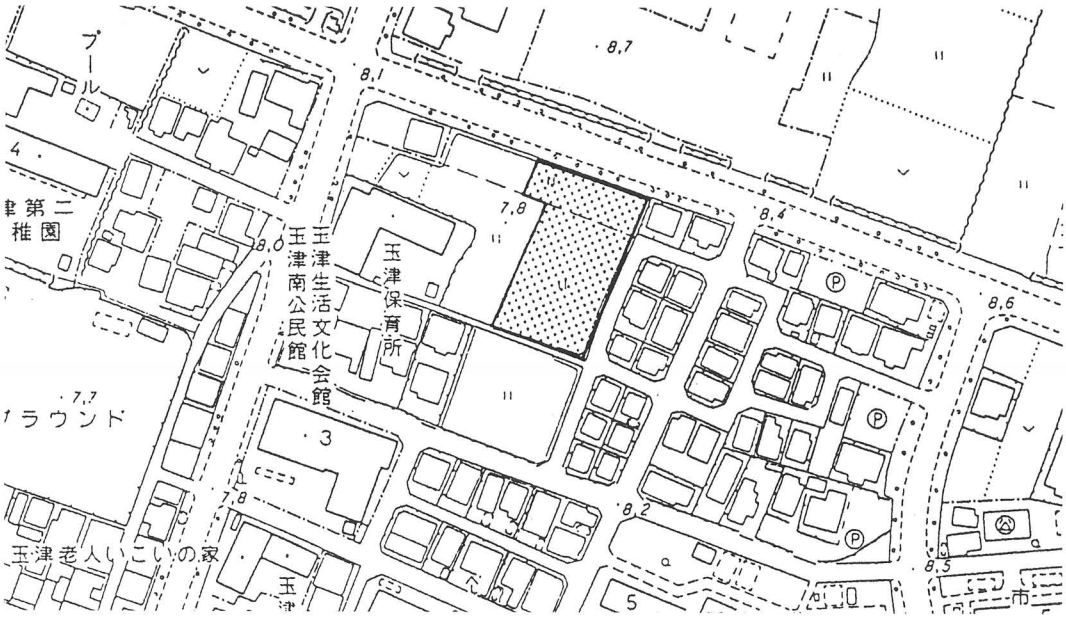


fig. 554
調査地位置図
1:2,500

２．調査の概要

基本層序

調査地はこれまで水田として利用されていたため、市街地の中での調査のような攪乱もなく、層序に大きな乱れも認められなかった。層序としては、第１層（T. P=7.3m）が水田耕作土、第２層（T. P=7.0m）が水田床土、第３層（T. P=7.3～6.8m）が遺物包含層（弥生時代の遺物包含層･黒色砂質土）となり、遺構面（T. P=6.6～6.8m）へいたる。ただし、この第３層は地形が南へ緩やかに傾斜していることや、部分的な削平を受けており確認出来ない部分（主に調査地北側）もあった。

検出遺構

今回の調査では、これまでに確認されていた河道の他に、竪穴住居２棟（弥生時代中期･終末期）土坑35基（弥生時代中期・終末期）、溝状遺構８条（弥生時代後期～終末段階）、性格不明遺構（弥生時代終末段階）３基、ピット85個などが検出された。

竪穴住居

ＳＢ01　東側の半分近くが調査されたのみであるため規模については明確ではないが、直径約８ｍ程度の円形の竪穴住居になるものと推定される。深さは15cmで相当の削平を受けている。内部には周壁溝はなく、ピットは15個確認されたが壁際の３個が比較的しっかりしており柱穴と考えられる。これから復元すれば、７～８個の主柱穴で構成されていたものと推定される。遺物の出土が少なく、時期を決めうる資料も少ないが、出土した遺物の外面にはタタキ目を残す甕片が含まれることから、弥生時代終末ころのものと考えられる。また、この住居内からも碧玉の剥片が１点出土している。

ＳＢ02　東半分が調査区外にあるが、直径約４ｍの不整円形の住居と推定される。深さ10cmで、ＳＢ01同様に削平が著しいことを物語っている。周壁溝はなく、ピットは２個が確認されているが、後に掘り込まれた土坑ＳＫ29があるため内部構造については不明確である。

土器の出土は少なく時期を決めがたいが、埋土からは多量のサヌカイトのチップが出土していることから、弥生時代中期の住居の可能性が高いと考えられる。

fig. 555　調査区全景

fig. 556　竪穴住居 SB01

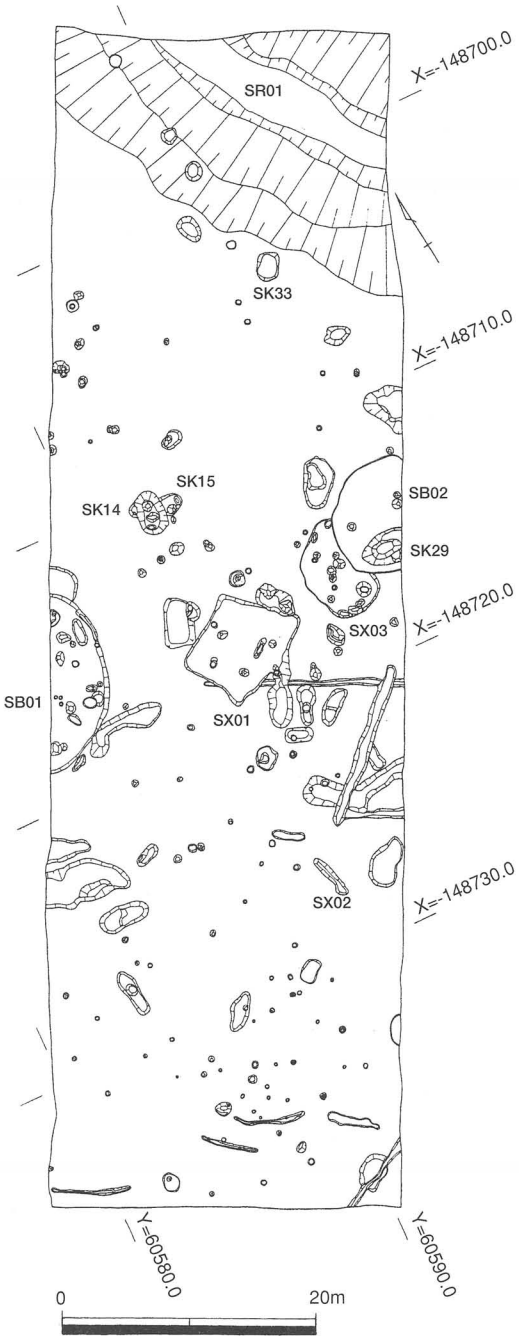


fig. 557　調査区遺構平面図

性格不明遺構　長さ1.9m、幅35cm、深さ15cmの溝状の土坑で、弥生時代後期終末の土器が多量に据え

ＳＸ01　（捨て？）られていたものである。遺構の最下部と周辺部に若干の土が認められた他は、遺構の中はほとんど土器で埋められていた。祭祀的な意味合いも考慮する必要があろう。

ＳＸ02　一辺３～４ｍの不方形部に最大幅1.0m、2.5mの舌状の突出部を持つものである。深さは10cm前後である。方形部にははピットが4個確認されたことから、竪穴住居の可能性も考えられる。舌状の突出部からは弥生時代後期終末の土器がまとまって出土している。

ＳＸ03　竪穴住居ＳＢ02に一部が切り込まれているが、長径4.0m、短径2.5m、深さ10cm前後の浅い楕円形の落ち込みである。この床面からは14個のピットが検出されている。

土坑　土坑は総計35基ある。時期を決めうる資料の出土しているものは少なくが、少量出土する遺物から判断するかぎりでは弥生時代後期終末段階のものである。

弥生時代中期段階の確実な土坑はＳＫ14・ＳＫ15とＳＫ33である。ＳＫ14は、長径1.7m、短径1.1m、深さ30cmの楕円形土坑である。ＳＫ15は長径1.0m、短径80cm、深さ30cmのやや小型の楕円形土坑になる。この２基の土坑からは土器は小片が出土しているのみであるが、埋土から多量のサヌカイトチップや剥片が出土しており、このことから弥生時代中期の遺構と判断したものである。ＳＫ33は、長径1.1m、短径80cm、深さ10cmの楕円形土坑である。埋土から弥生時代中期前半（第Ⅲ様式前半）の壺が出土している。

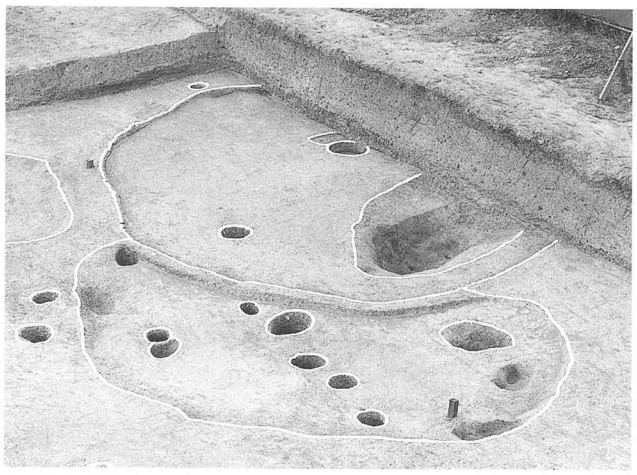


fig. 558　竪穴住居 SB02・SX03

fig. 559　SX02

fig. 560　SX01 上層遺物出土状況

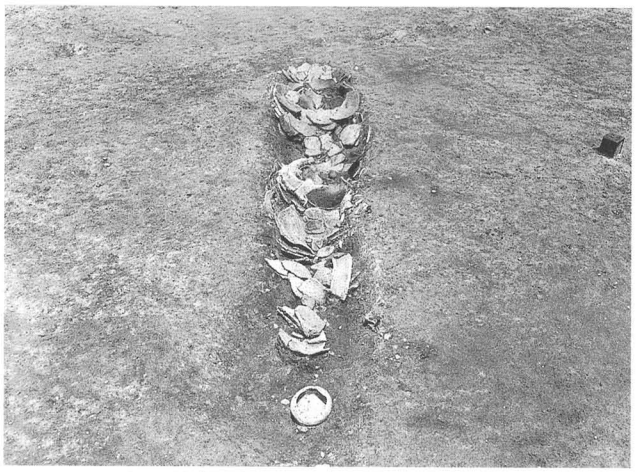


fig. 561　SX01 下層遺物出土状況

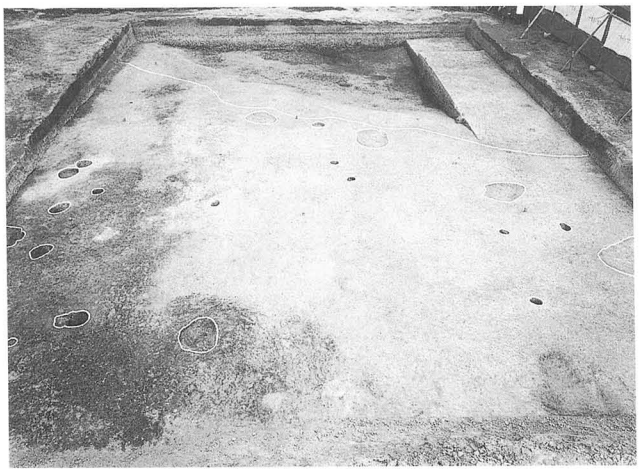


fig. 562　調査区北半部　河道 SR01

fig. 563　河道 SR01　木製品（広鍬）出土状況

河道ＳＲ01　北側の肩部が未確認である。幅10m以上で深さは1.8mを測る。第３次調査の河道１に続くものである。ほぼ北から南へ流れているが、この付近で東へややカーブするような形をとる可能性がある。 埋土は上層・中層・下層に区分することができる。上層には奈良時代の須恵器片が出土することから、この河道の最終堆積は奈良時代であったものと考えられる。この堆積土には、シルト質の強い土層の堆積が認められることから、水が溜まるような状況があったのではないかと推定される。中層には弥生時代終末段階（庄内式）～古墳時代前期の遺物がまとまって出土している。中層段階も堆積状況から比較的滞水に近い状況にあったのではないかと推定される。下層にはこれまで確認されてきた弥生時代中期を主体とする遺物が出土している。弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）の完形に近い土器などが出土することはほぼ同様の成果であった。この中には紀伊型甕と呼称される甕なども含まれている。また、砂層の中からは、木製品が少量出土している。臼片や広鍬（エブリ？）、加工痕のある木片などがある。注目されるものでは玉類の材料に使用されたと考えられる碧玉の剥片が数点出土している。石器類では石包丁なども出土している。

そして、この弥生時代中期の河道の最下層付近では、弥生時代前期後半の遺物が所々出土する部分がある。中期段階の流水に伴い前期段階の堆積物が削られ、削り残された部分に前期の遺物が遺存していたものと考えられる。

３．まとめ

これまで実施された新方遺跡東方地点の調査では、集落に関係するような遺構は顕著に確認されてはおらず、比較的遺構の希薄な地点ではないかと考えられてきた。しかし、今回、竪穴住居をはじめとして多くの遺構が確認されたことにより、この地域にも集落域が拡がっていることが確認された。新方遺跡は現在この付近が遺跡の南端とされているが、この南側や東側へも遺跡の拡がりがあるものと考えられ、新方遺跡の遺跡範囲が更に拡がることを明らかにする結果となった。また、今回確認された弥生時代後期後半の遺構や遺物は、新方遺跡の中にあっては、比較的調査例が少なく、重要な調査成果である。

また、これまでの調査で確認されていた河道からは、これまで同様に弥生時代中期前半を主体とする遺物が出土しているが、今回の調査ではそれ以上に弥生時代終末から古墳時代前期の遺物が出土しており、この河道の南側で検出された竪穴住居などとともに、弥生時代後期終末の集落の様子の一部をうかがう手がかりとなるものである。

65. 新方遺跡（しんぼう）　七反田地点（しちたんだ）　第２次調査

１．はじめに

七反田地区ではこれまでに昭和52年度の調査で弥生時代中期の土器、奈良・平安時代の木器類が出土している。今回は集合住宅建設に伴う擁壁工事によるもので、工事により文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。調査地は明石川左岸の氾濫原に位置し、標高は約９ｍである。

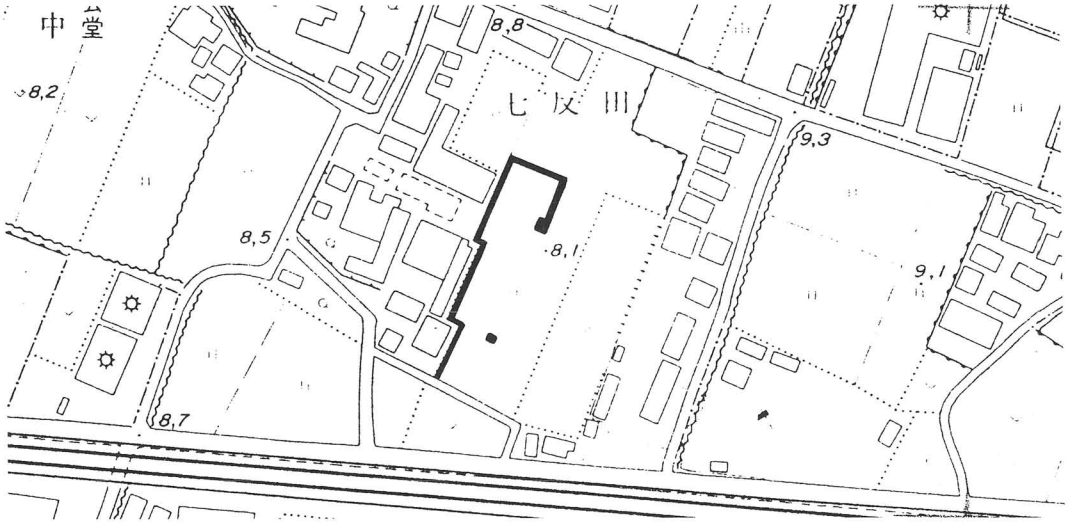


fig. 564
調査地位置図
1:2,500

２．調査の概要

調査地の層序（fig.566）は１層～６層が旧耕土及び床土で、７層は一定の期間湿地状の様相を呈し、弥生土器、中近世の土師器･須恵器を含む。８層～17層も７層と同様であると思われ、黒灰色・黒褐色粘土・シルトによる堆積である。13､18～22層は青灰色細砂・シルトによる堆積で13層直上から古墳時代の土師器､奈良時代の須恵器が出土している。 調査地の北西側では､13層の淡黒灰褐色砂質シルト層から古墳時代後期～飛鳥時代の須恵器が、15層の黒灰色シルト質細砂層から弥生時代前期後半の壺、中期初頭の甕等が出土しているがいずれも遺構の存在を確認することはできなかった。

以上の様な状況から、調査地付近は弥生時代～古墳時代には自然流路で、以後中～近世期にかけては湿地であった可能性が考えられる。これらに含まれる遺物も流れ込みによるものと考えられるが、調査地の近隣では遺構の存在が確認されていることや、今回出土した弥生時代前期後半の壺は底部を穿孔しており、供献土器であると考えられることから、付近に遺構が存在する可能性は高いものと思われる。

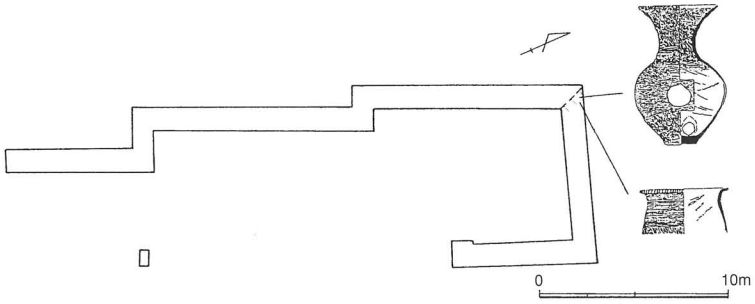


fig. 565　調査区平面図

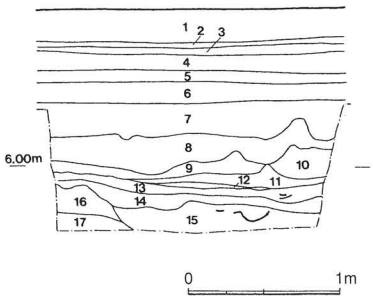


fig. 566　調査区断面図

3．まとめ

今回の調査では遺構の確認はできなかったが、弥生時代前期後半～中期初頭、古墳時代後期～飛鳥時代、中近世の遺物を確認できた。特に弥生時代前期の資料はこれまでの調査でも例の少ないものであり、新方遺跡の成立を考える上でも貴重な資料である。また、底部を穿孔しており、墓址に伴う供献土器と考えられる。このことは、近隣の村中地区から昭和59年度の調査で弥生時代中期前半頃の円形周溝墓が確認されていることから、付近一帯に墓域が存在する可能性も考えられる。

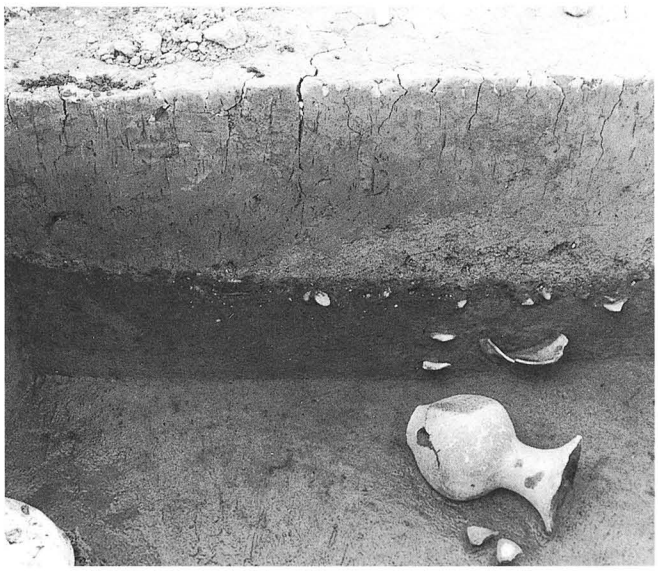


fig. 567　第15層出土遺物と調査区堆積状況

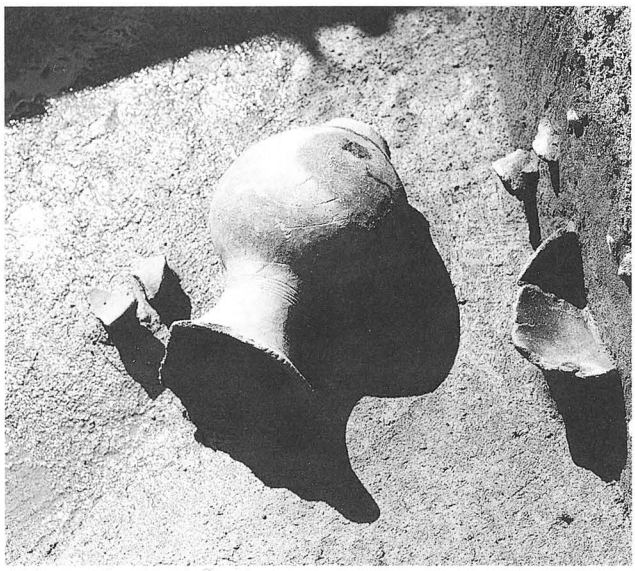


fig. 568　第15層出土遺物

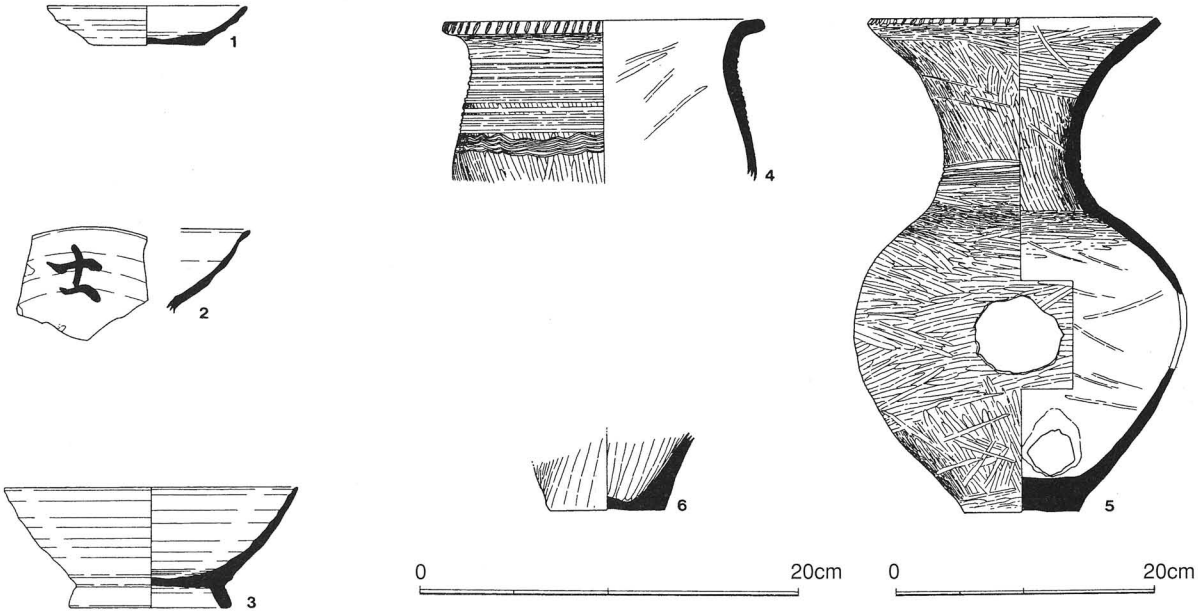


fig. 569　出土遺物実測図

（1・2．第7層　3．第4～6層　4・5．第15層　6．第13層
1．土師器　2～3．須恵器　4～6．弥生土器）

66. 新方遺跡（しんぽう）　西方地点（せいほう）　第２次調査

１．はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線建設に伴う調査によって明らかになった遺跡で、昭和45年度の調査では弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し注目された。この後、数次にわたり発掘調査が実施され、その度ごとに新方遺跡が大規模で重要な遺跡であることが確認されている。

西方地点は、新方遺跡の南西端に位置しており現在の明石川に近く、当地点のすぐ西側においては、同川の氾濫原が存在する。平成５年度の試掘調査により、遺跡の広がりが確認され、平成７年度に第１次調査が実施された。調査の結果、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物が検出され、当時の流路の一端が確認された。 今回の調査は上池土地区画整理事業に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施することになった。なお、便宜上調査区を１区から６区まで分け、本年度分は３区～６区である。

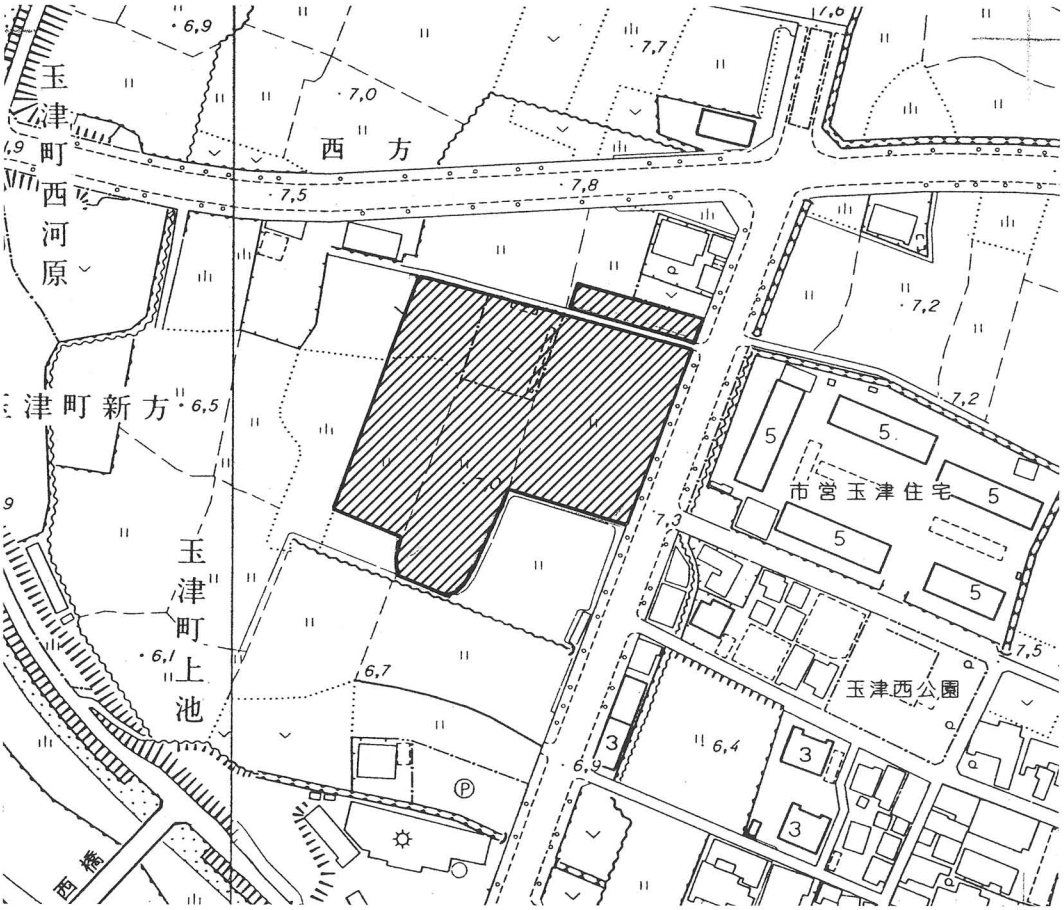


fig. 570
調査地位置図
1:2,500

２．調査の概要

調査地は，明石川の左岸の氾濫原に位置し，標高は約６ｍである。

基本土層

調査地の基本土層は、１層耕土、２層床土、３層黄灰色砂質土(旧耕土)、４層黄灰色砂質土(旧耕土)、５層暗灰色砂質シルト、６灰茶色シルトである。

このうち４層の旧耕土層に遺物が含まれており、５層上面で第１遺構面を、６層上面で第２遺構面を検出した。

第１遺構面　第１遺構面では掘立柱建物６棟の他、溝、土坑、ピットを多数検出した。

掘立柱建物ＳＢ01　桁行５間、梁間３間の東西に長い総柱建物で、柱間の距離は2.3mである。北側２間分と東側１間分は、柱間距離が半分になっており、この部分は縁束であると考えられる。柱穴底には、礎板が敷かれているものが多く、柱根が遺存しているものもあった。建物の西側を除く三方向には雨落溝が巡っている。

掘立柱建物ＳＢ02　桁行７間、梁間２間の東西に長い総柱建物で、各柱間に浅い柱穴があり束柱を持つ構造と考えられる。柱間距離は2.3mで、建物本体の柱穴の規模では径40～60cm、深さは50～60cm、束柱は径30～40cmの規模で、深さは20～30cmである。根石や礎板、柱根が遺存するものがある。雨落溝もしくは敷地を区画するためと考えられる溝が建物の周囲に巡っている。

掘立柱建物ＳＢ03　４区西端で検出した総柱の建物で、桁行３間、梁間３間のほぼ正方形の建物になる。柱穴は径60～70cmの規模で、深さは50～70cmある。柱間の距離は約2.3mである。

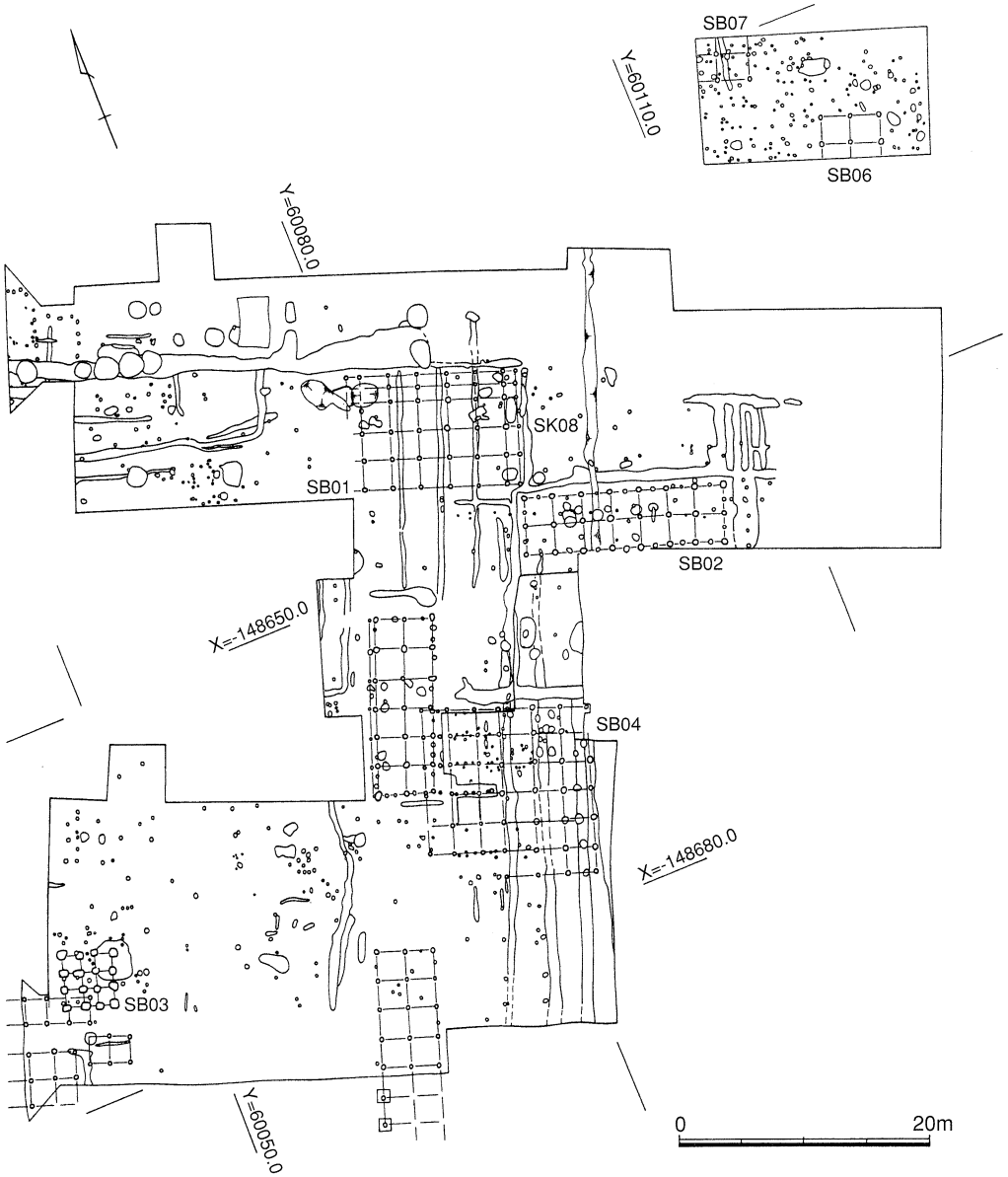


fig. 571　第１遺構面　平面図（平成７年度調査地と合成）

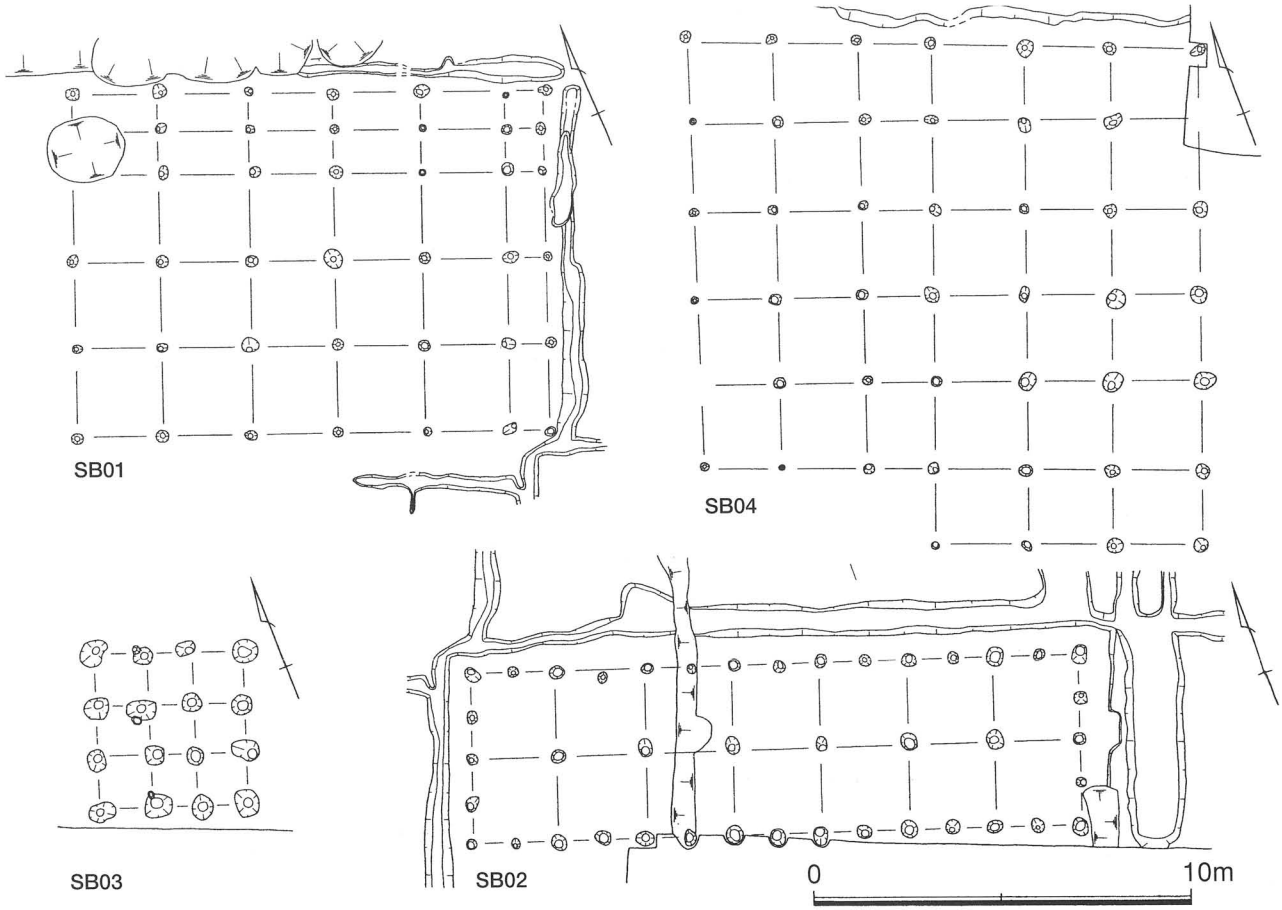


fig. 572　SB01・02・03・04 平面図

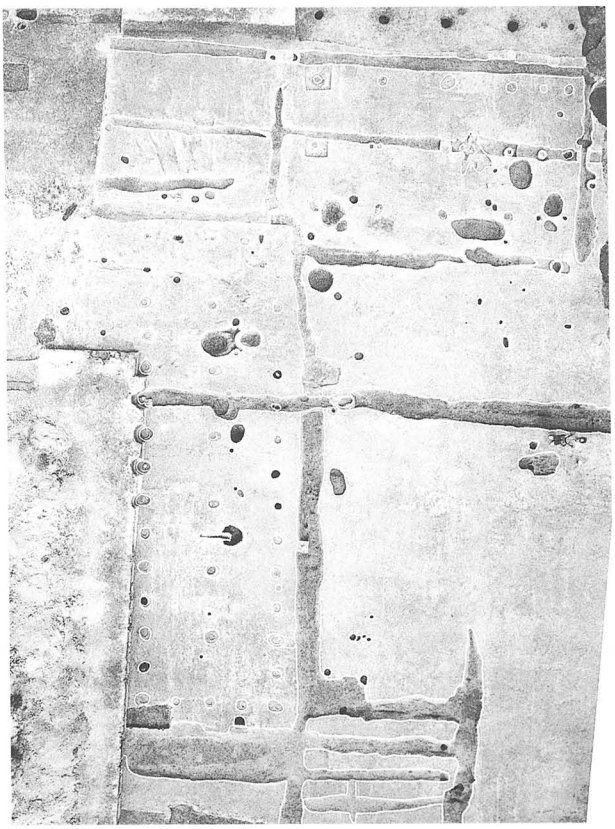


fig. 573　掘立柱建物 SB01・02

fig. 574　掘立柱建物 SB02

掘立柱建物（ＳＢ04）　桁行６間、梁間５間の総柱建物で、南東隅に１間分の張出しが付く。柱間距離は約2.3mである。柱穴は径30～60の規模で、深さは30～60cmある。柱穴の底には根石や礎板が遺存しているものもあり，柱根が遺存しているものもあった。

掘立柱建物（ＳＢ06）　東西２間、南北２間以上の総柱建物で、調査区外に延びる。柱間の距離は、東西2.4m、南北２mである。柱穴は径30～40cmの規模で，深さは30～40cmである。

掘立柱建物（ＳＢ07）　東西２間以上，南北２間以上の総柱建物で、調査区外に延びる。柱間の距離は東西2.5m、南北２mである。柱穴は径30～40cmの規模で、深さは30～40cmである。

土　坑（ＳＫ07）　東西1.1m、南北0.8m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。須恵器、土師器の他青磁合子が１点出土している。墓の可能性が考えられが、断定できるようなものはなかった。

土　坑（ＳＫ08）　東西0.8m、南北1.8m、深さ0.2mの隅丸長方形の土坑で、埋土中から須恵器、土師器の完形の皿，小皿がまとまって出土している。

ピット　建物としてまとまらないピットが多数ある。この中には根石や、礎板が遺存しているものや、小皿を取り囲むように須恵器の鉢の破片を立てかけて配置している状態のピットが検出されている。おそらく地鎮遺構であろうと推測される。

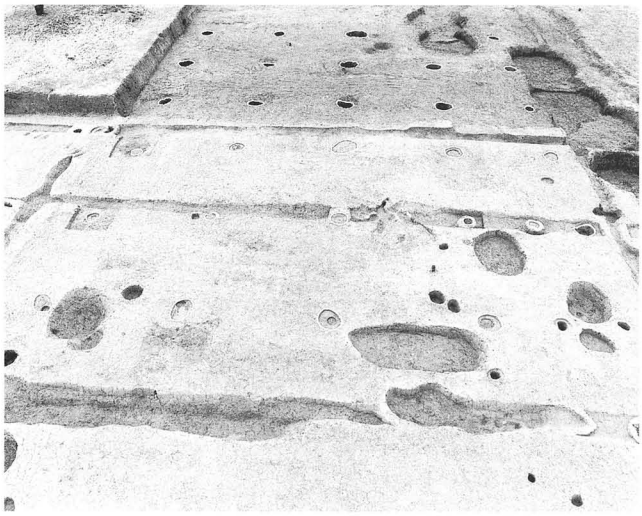


fig. 575　掘立柱建物 SB01

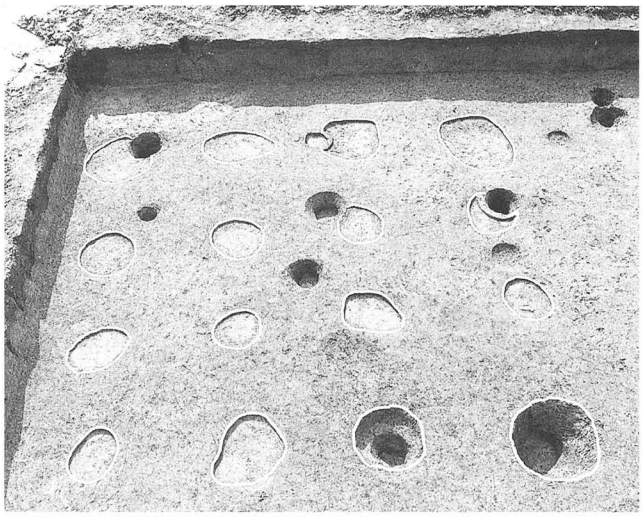


fig. 576　掘立柱建物 SB03

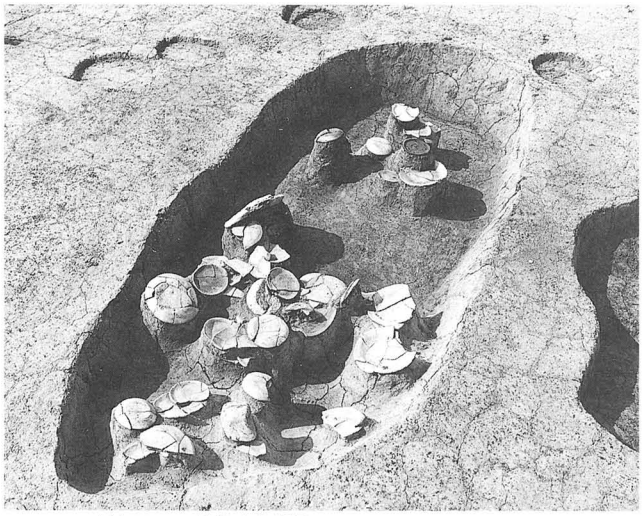


fig. 577　土坑 SK08　遺物出土状況

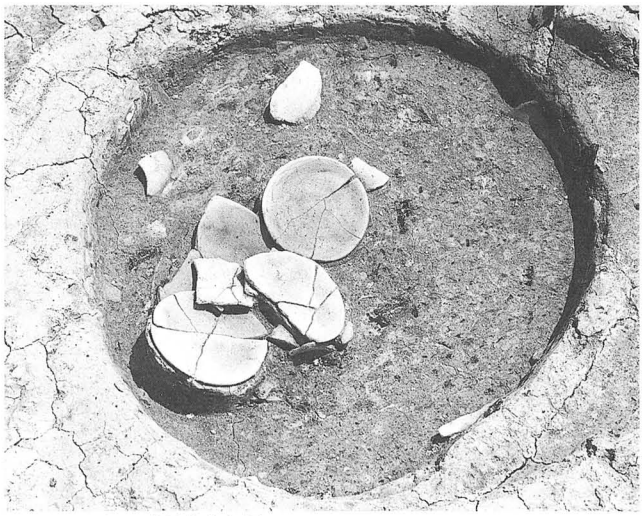


fig. 577　ピット内遺物出土状況

第２遺構面　第２遺構面では掘立柱建物２棟の他、耕作に伴う鋤溝を多数検出した。

掘立柱建物（ＳＢ201）　４区南端で検出した総柱の建物で、桁行３間、梁間３間のほぼ正方形の建物になる。柱穴は60～70cmの方形で、深さは50～70cmある。柱間の距離は1.3～1.4mである。

掘立柱建物　４区北端で検出した建物である。調査区外に延びているため規模は不明であるが、東西３間、南北２間以上の建物である。柱穴は短辺60cm、長辺１m程度の長方形で、深さは50～70cmである。柱間の距離は東西1.9m、南北2.5mである。柱根が良好に遺存しているものもあった。

鋤　溝　幅30～50cm、深さ10～20cmの溝で、調査区の各所から検出した。溝の方向は調査区周辺の条里地割りの方向と概ね一致している。

出土遺物　遺物は、殆ど出土していないので、遺構の時期を決定することは困難であるが、第１次調査で同一面から平安時代の遺物が出土しているのでおそらく平安時代であろう。

fig. 579　第２遺構面平面図

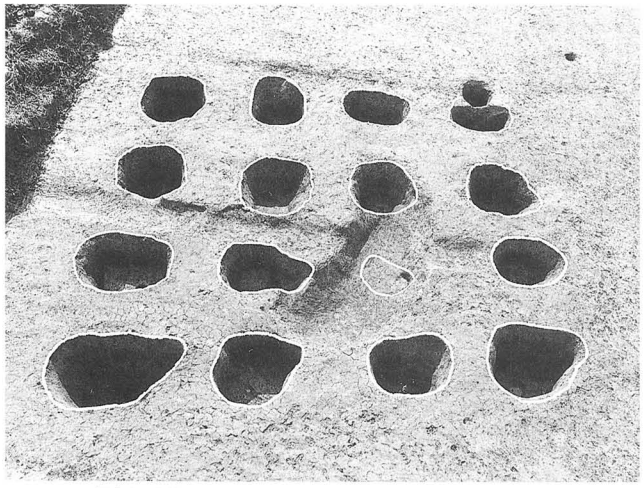


fig. 580　掘立柱建物 SB201

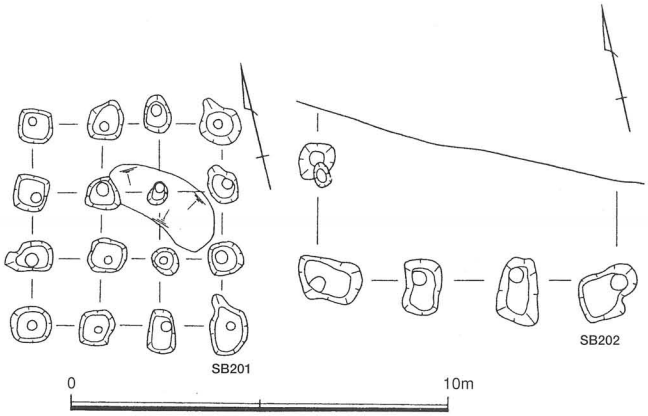


fig. 581　SB201・202　平面図

3．まとめ

当該地は、新方遺跡の中では南端部に位置しており、遺構の存在が希薄な場所であると考えられていた。しかしながら調査の結果、鎌倉時代の掘立柱建物が6棟検出され、1次調査と合わせると13棟の掘立柱建物が確認されたことになる。中でも今回検出した掘立柱建物（ＳＢ01･04）は、規模が大きく屋敷の母屋的な建物であると推定される。また、ＳＢ02は細長い建物で、厩の可能性が考えられる。ＳＢ03は倉庫と考えられる。ＳＢ06･07は一部しか検出していないので建物の性格は不明である。

第2遺構面でも掘立柱建物を2棟検出したが、ＳＢ201は倉庫と考えられる。ＳＢ202は一部しか検出していないので建物の性格は不明である。これらのことからこの場所の土地利用の変遷を追っていくと、平安時代には、一部分に集落を構成する建物が建ち始めたものの、大部分は耕作地として利用されていた。しかし鎌倉時代になると耕作地は宅地となり大規模な掘立柱建物が建てられるようになる。集落が拡大したのか、それとも他の場所から移動してきたのかは、今後の周辺の調査によって明らかになるであろう。

fig. 582
調査地全景（北上空から）

67. 出合（であい）遺跡　第35次調査

1．はじめに

出合遺跡は、明石川の下流域の右岸、標高12～15mの沖積地と西側の台地縁辺に位置している。これまでに34次にわたり調査が実施され、台地上では帆立貝式古墳や奈良時代の井戸が検出され、沖積地では、弥生時代から中世までの遺構・遺物が検出されている。

今回の調査は、古墳時代中期の河道が検出され、須恵器が多量に投棄された状態で出土した第31次調査地の北側、道路の下水道管敷設予定地内で実施した。

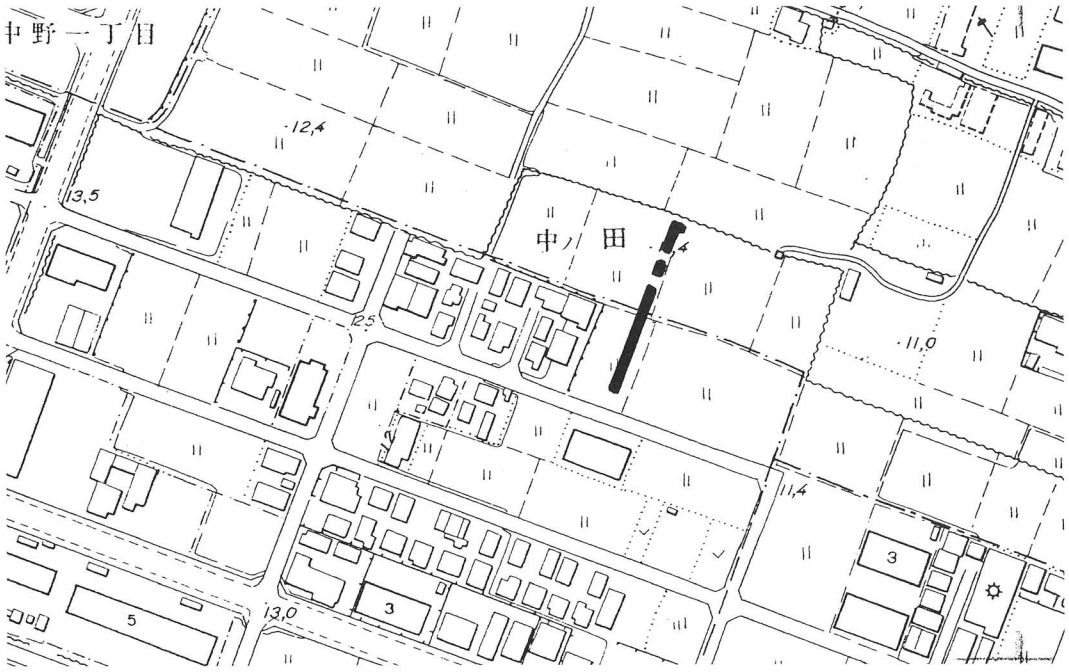


fig. 583
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

盛土直下に中近世の遺物を含む暗灰茶褐色砂質土が堆積している。A・B区の暗灰茶褐色砂質土下では水田畦畔を検出した。C区では、暗灰茶褐色砂質土が、南東部で比較的薄く堆積し、北西部では分厚く堆積していた。このC区北西部で柱列1条を検出した。

第1遺構面

水田畦畔

A・B区の第1遺構面を南北に斜めに横切る水田畦畔である。幅1.2m前後、高さ20～30cm前後で断面の形は台形である。この水田畦畔と平行して、東側に幅60cm前後、深さ5cm前後の砂を覆土とする溝を検出した。畦畔の方位は北24°東を採っている。

柱　列

C区の第1遺構面北西端で検出した。暗灰茶褐色砂質土が凹地に落ち込み、この落ち込みの下面で6ヵ所の柱穴を検出した。柱穴の間隔は1.5m等間隔で南北に並ぶ。柱穴の規模は、径60cm前後の円形で、掘形の深さは15cm前後と浅い。掘形内の埋土内からは陶器片・土師器片・須恵器片が出土した。

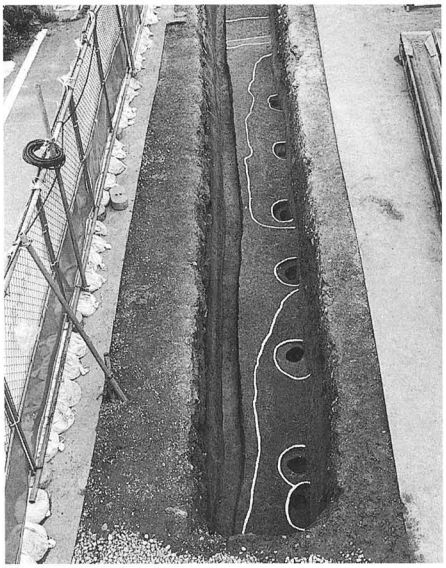


fig. 584　第1遺構面　柱列

第２遺構面　Ａ・Ｂ区では、水田に伴う整地層、Ｃ区では、掘立柱建物を伴う整地層の下に弥生時代～鎌倉時代の遺物を含む暗灰色粘質土が検出された。暗灰色粘質土の下層は堅い緑灰色砂質土の地山となる。この地山を穿って、Ａ区では、上層と平行する溝を検出した。Ｃ区では、調査区南部で河道１ヵ所を検出した。

溝　Ａ区の第２遺構面で検出した上層の水田畦畔に平行する溝は、幅70cm前後、深さ２～５cmの断面Ｕ字状である。溝の覆土からは、古墳時代～鎌倉時代の須恵器片・土師器片が出土している。

河　道　Ｃ区の第２遺構面の南部で検出した。幅12m、深さ70cmを計測する自然河道である河道の北岸は急激に落ち込み、南岸は緩やかに落ち込んでいる。河道内の堆積層上層で弥生土器が出土した。

３．ま　と　め

調査地は、台地と沖積地の縁辺にあたり、明石川に近い北東部は鎌倉時代以降農地として利用されたと推定される。

調査区の南西部では比較的遺物包含層が残り、柱列が検出され、居住区域として利用されたと考えられる。しかしながら、鎌倉時代以前の遺構面である第２遺構面では生活痕跡は残存せず、弥生時代に埋没した河道や遺物が散在するにすぎない。

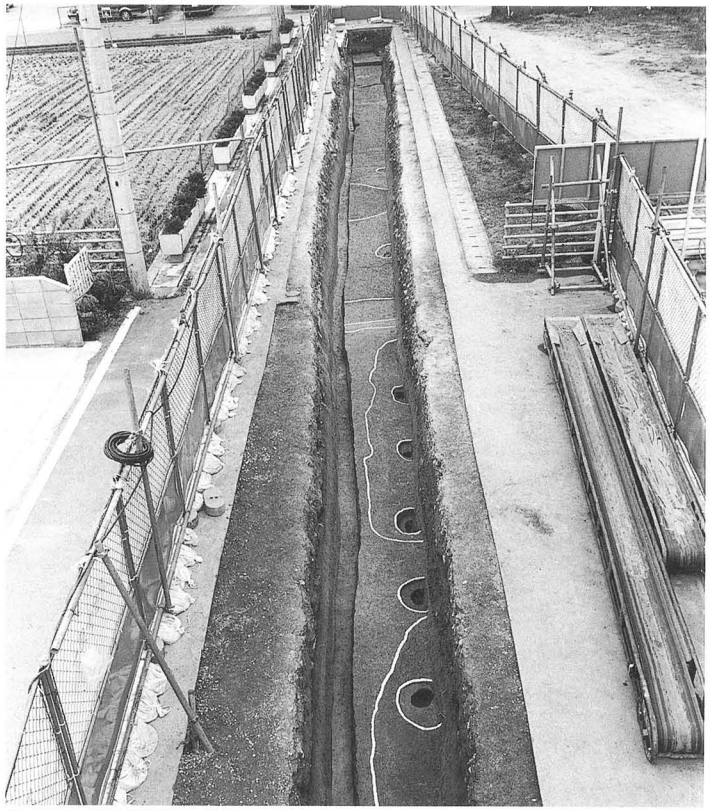


fig. 585　第１遺構面　全景

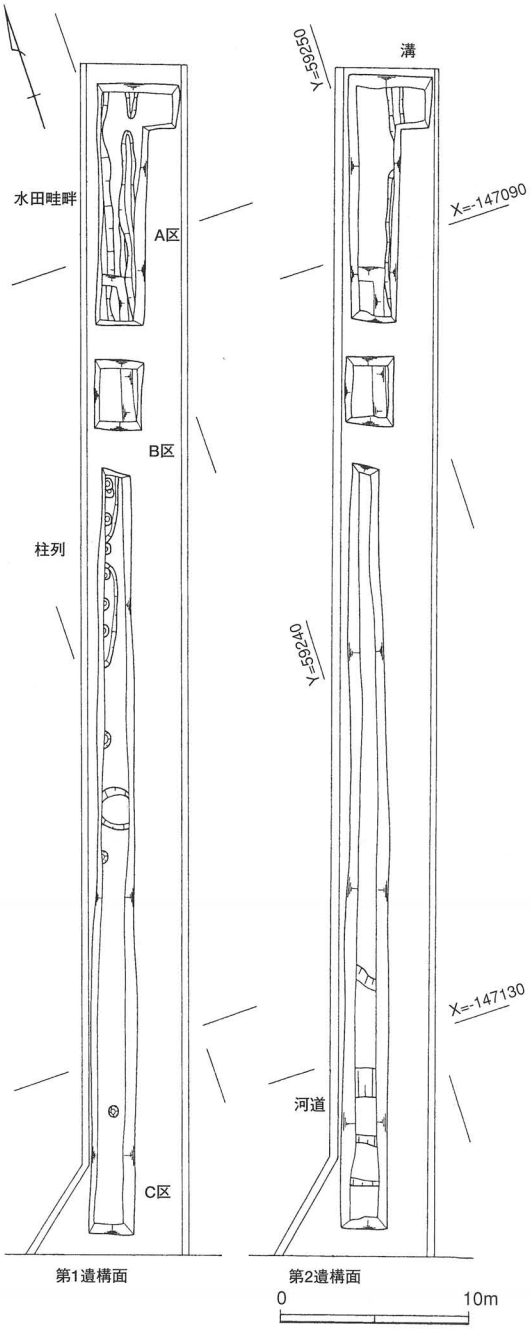


fig. 586　遺構平面図

Ⅲ．平成８年度の通常事業に伴う発掘調査

１．本庄町遺跡（ほんじょうちょう）　第５次調査

１．はじめに

本庄町遺跡でのこれまでの調査は、昭和59年（1984）に財團法人古代学協会・平安博物館が調査した第１次調査で、弥生時代前期の水田、古墳時代後期の獣足跡等が検出されている。その後昭和61年（1986）の第２次調査では兵庫県教育委員会の調査で縄文から近世にかけての５面の遺構面が確認された。主な遺構は縄文時代の貯蔵穴、弥生時代後期以降の水田、中世の水田である。平成４年（1992）の第３次調査は神戸市教育委員会が実施したもので、中世の水田、木製品が出土している。また同じ年に高山歴史学研究所によって第４次調査が実施され、その時の調査では平安時代の建物、古墳時代の溝、縄文時代後期の用途不明遺構が検出されている。

今回の調査は、神戸市立東灘のぞみ幼稚園（旧深江幼稚園）の園舎増築に伴う調査で、平成４年に実施した第３次調査地に隣接している。

fig. 587
調査地位置図
1:2,500

２．調査の概要

調査区の基本層序は、大きく分類すると上層から順に盛土・攪乱層、近世以降の畑、洪水砂となり、地表下約1.3mで中世水田面（第1遺構面）、さらに厚さ40cm～1.4mの湿地状堆積層の木製品等を含む遺物包含層があり、地表下約1.7m～2.5mで基盤層（第2遺構面）となる。

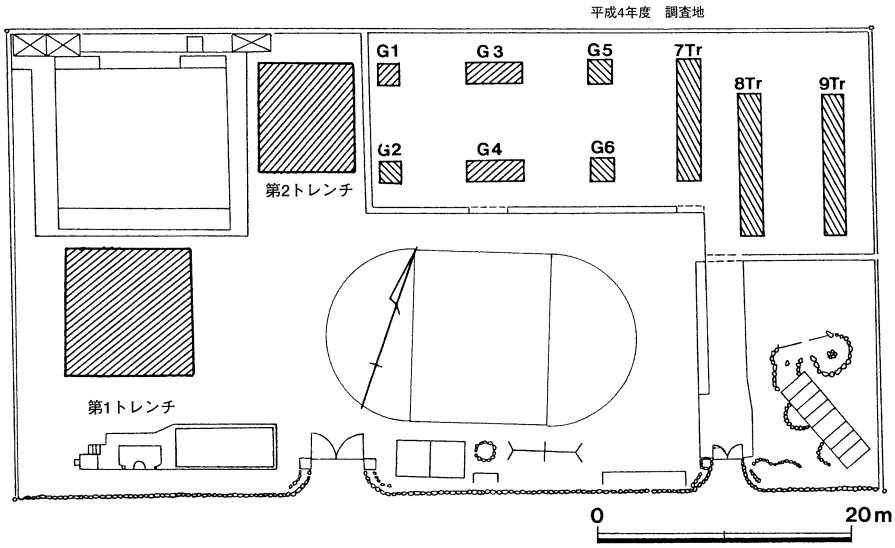


fig. 588　調査区平面図

第１トレンチ　調査は遺物の混入する洪水砂下層までをバックホーで掘削し、その後人力によって中世

第１遺構面　水田面と思われる遺構面を検出した。水田畦畔は無かったが獣足跡を検出した。積極的に水田遺構として認められるものは無いが、これまでの周辺の調査成果と合わせて考えるならば、水田として利用されていたと考えられる。

第２遺構面　中世水田土壌を掘削すると、淡黒色シルト～砂質シルト層の堆積から板状の割材や角材、丸材、部材などの木製品が出土した。これらの木製品はその多くが、全面あるいは一部が炭化している。木製品は34点出土した。

木製品以外の遺物は須恵器、土師器、弥生土器が極わずか出土している。この遺物包含層や下層の黒色シルト層は湿地の堆積物と考えられるが、調査区の南側から北西側にかけて、地形が低くなっていく分、堆積は厚みを増している。

基盤層となる灰褐色～灰白色の極細砂～中砂層は調査区の北西部で下がっている。遺構精査を試みたが遺構は存在しなかった。

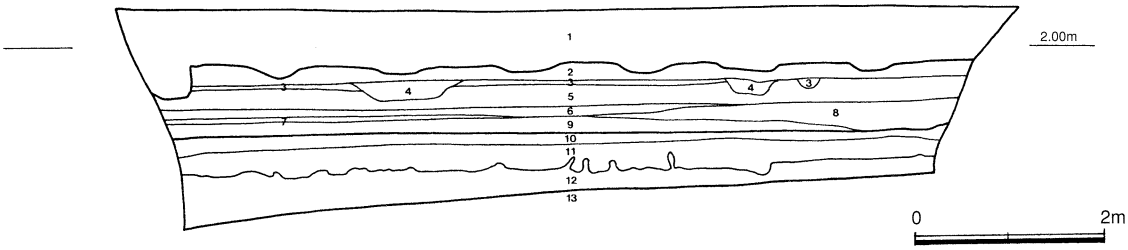


fig. 589　第１トレンチ北壁　断面図

1．盛土・撹乱
2．暗灰色砂質シルト
3．淡灰色砂質シルト
4．暗灰色砂質シルト　極細砂混入
5．淡橙褐色極細砂
6．淡灰色砂質シルト
7．明黄灰色極細砂
8．灰褐色極細砂
9．淡青灰色砂質シルト
10．暗灰褐色砂質シルト～極細砂　粗砂混入（中世水田土壌）
11．淡黒色シルト～砂質シルト
12．黒色シルト（木製品を含む）
13．灰褐色～灰白色　極細砂～中砂

fig. 590　第２トレンチ　全景

fig. 591　第２トレンチ　木製品出土状況

第２トレンチ　第２トレンチは第１トレンチの北東側に位置する調査区で、幼稚園の園舎と園舎の間隙での調査であった。調査区をガス管が横断している為に、その部分の調査は出来なかった。便宜上調査区の東側を１区、西側を２区と呼称した。

第１遺構面　調査は第１トレンチ同様に、遺物が混入している灰褐色砂質シルト層までをバックホーで掘削した後、人力で中世水田層までを掘削していった。この調査区でも水田畦畔は検出されなかったが、１区で多くの獣足跡を検出した。中世に水田として利用されていたと考えて良いであろう。

第２遺構面　中世水田土壌を掘削すると、黒色シルト層の厚い堆積となり、木簡状板材、両端をえぐってある板材、杭、曲物底板、板状割材などの木製品が出土している。この内、木簡状板材は墨書は確認出来ないが、その形状が木簡に類似しているものである。木製品は40点出土した。この下層には植物遺体が大量に堆積していた。

遺物包含層を掘削すると、灰白色の極細砂層の基盤層となるが遺構は存在しなかった。

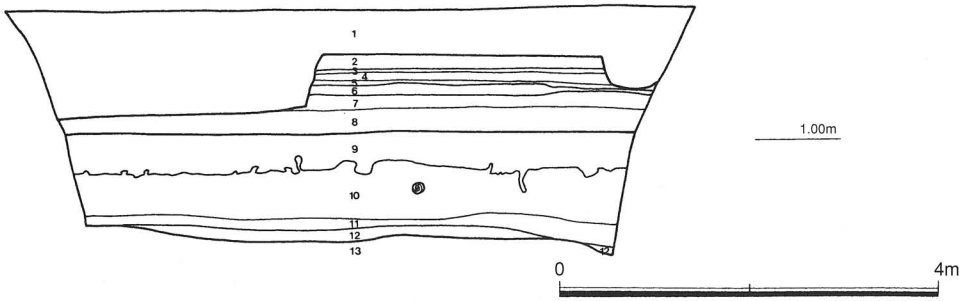


fig. 592　第２トレンチ北壁１区東壁　断面図

1．盛土・撹乱
2．暗灰色砂質シルト（旧耕作土）
3．黄橙褐色極細砂
4．淡黄褐色極細砂　細礫混入
5．淡茶褐色極細砂
6．淡灰褐色極細砂　細礫　鉄分含む
7．暗灰色砂質シルト　極細砂・細礫混入
8．灰褐色砂質シルト　極細砂・細礫混入
9．暗灰色シルト（中世水田土壌）
　上面に獣足痕跡あり
10．黒色シルト（木製品を含む）
11．黒色シルト（植物遺体を多く含む）
12．黒色シルト～灰白色極細砂
13．灰白色極細砂（淘汰良い）

3．まとめ

今回の調査は、第３次調査の成果と同じ結果となったが、第１トレンチで基盤層が北西側から南側に向かって高くなる傾斜変換点が確認できたことは、当時の地形を復原する上で貴重な資料となるであろう。

兵庫県教育委員会が、今回の調査地点の南側で行った深江北町遺跡の調査地では、レベル的に高位になり、弥生時代や古墳時代の遺構が検出されている。この集落の存在する砂堆が北側に低くなった低地が今回の調査地にあたり、古代から中世にかけて植物の群生する湿地が拡がっていたと考えられる。黒色シルト層から出土する木製品は、この湿地に何らかの状況から埋没していったものと思われる。木製品の時期は出土土器がわずかで、細片のため時期を特定することは困難であるが、木簡の形状からも考えて古代のものと考えられる。

その後、洪水砂によって水平となった部分に中世において、水田が拓かれていったと思われる。これが今回の調査での第１遺構面である。

今後、周辺の調査が進めば、さら詳細な地形復原が可能であり、生産遺構以外に木製品を作った人々の集落も発見され得るであろう。

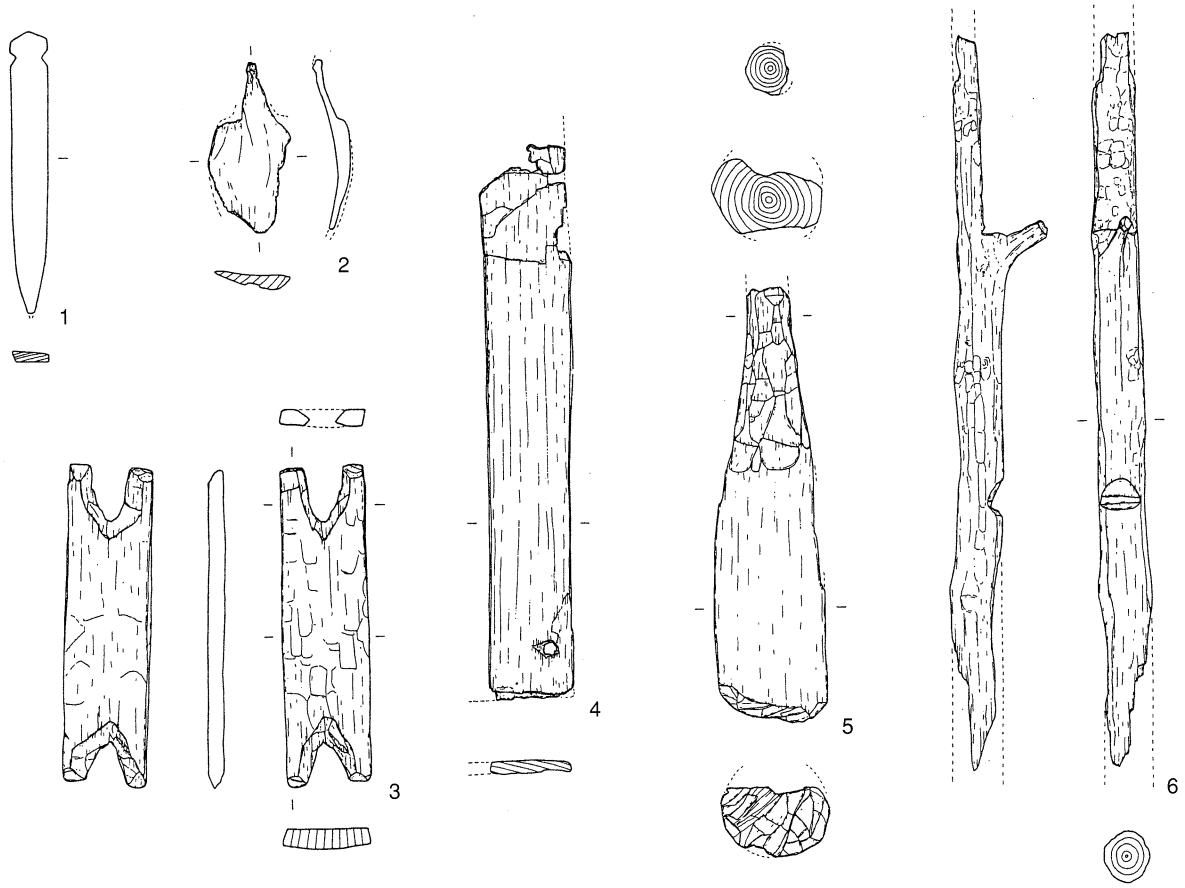


fig. 593　出土木製品実測図
縮尺　1・2＝1／2　　3・4・5＝1／4　　6＝1／8

2．吉尾遺跡・附物遺跡

1．はじめに　吉尾遺跡、附物遺跡は、八多川上流に形成された河岸段丘上に位置する平安時代から近世に至る遺跡である。今回の報告は、圃場整備事業に伴う発掘調査の記録であり、吉尾遺跡から順に報告する。なお、吉尾遺跡は平成７年度からの継続事業である。

吉尾遺跡　吉尾遺跡は吉尾川が八多川に合流する付近に位置する遺跡で、八多川はここから北流した後、道場町で有野川、有馬川、長尾川と合流し、武庫川に流れ込み、大阪湾へと注いでいる。この遺跡は八多川左岸に形成された河岸段丘上に拡がる遺跡と考えられ、これまでに平安時代～江戸時代の集落跡が発見されている。

今回の調査は県営圃場整備事業に伴う調査で、河川の付け替え部分について調査を行った。今回の調査は第３次調査である。

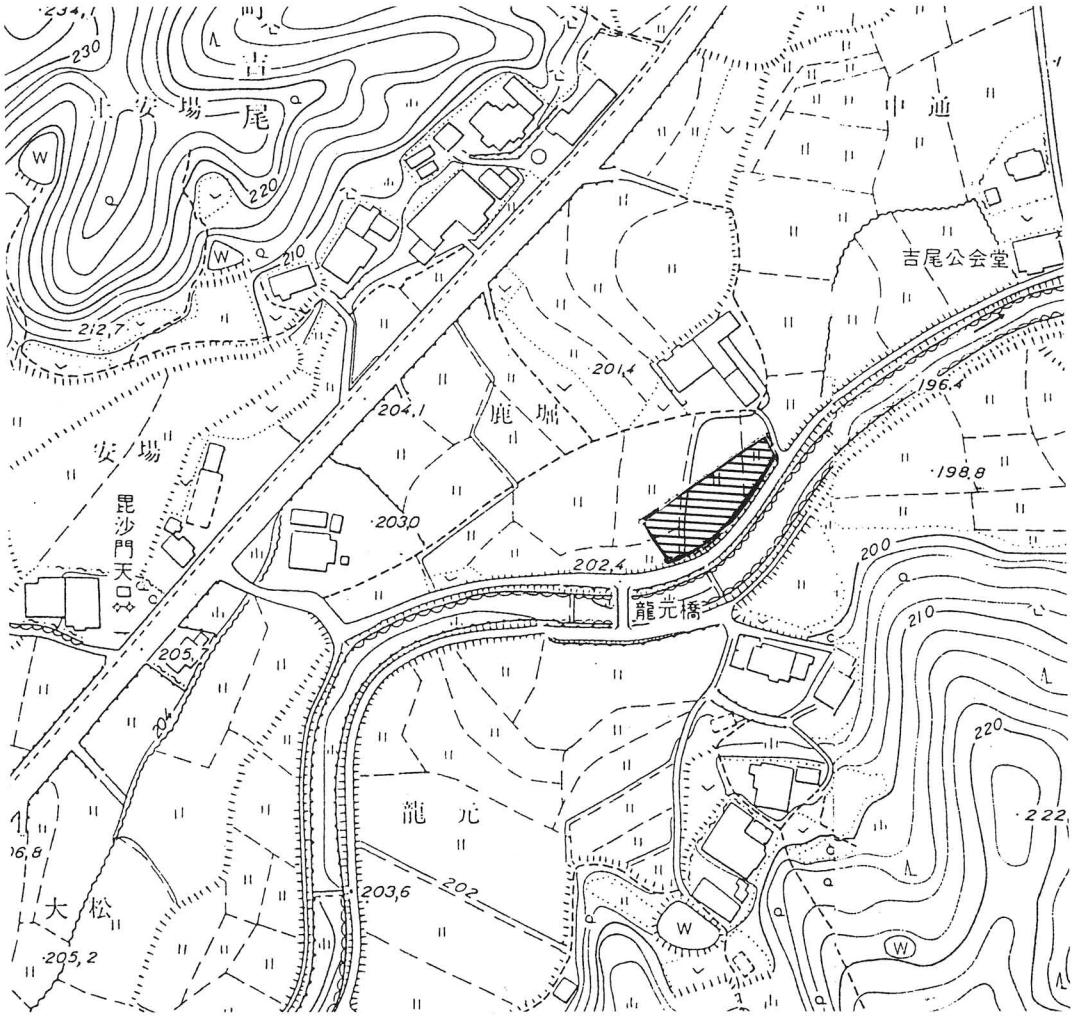


fig. 594
吉尾遺跡
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要　吉尾遺跡の調査は、平成７年度からの継続調査である。調査地の基本層序は、耕作土、床土、淡灰褐色砂質シルトの旧耕土の下層に中世の遺物包含層をベースとする第１遺構面（標高199.5m前後）が検出された。第１遺構面の基盤層の下層には、黄褐色シルト質極細砂の第２遺構面検出面となる。この遺構面は、東側へ緩やかに下がり、調査区中央やや西寄りで検出された溝ＳＤ02を境に中礫、大礫を含む砂礫層となる。

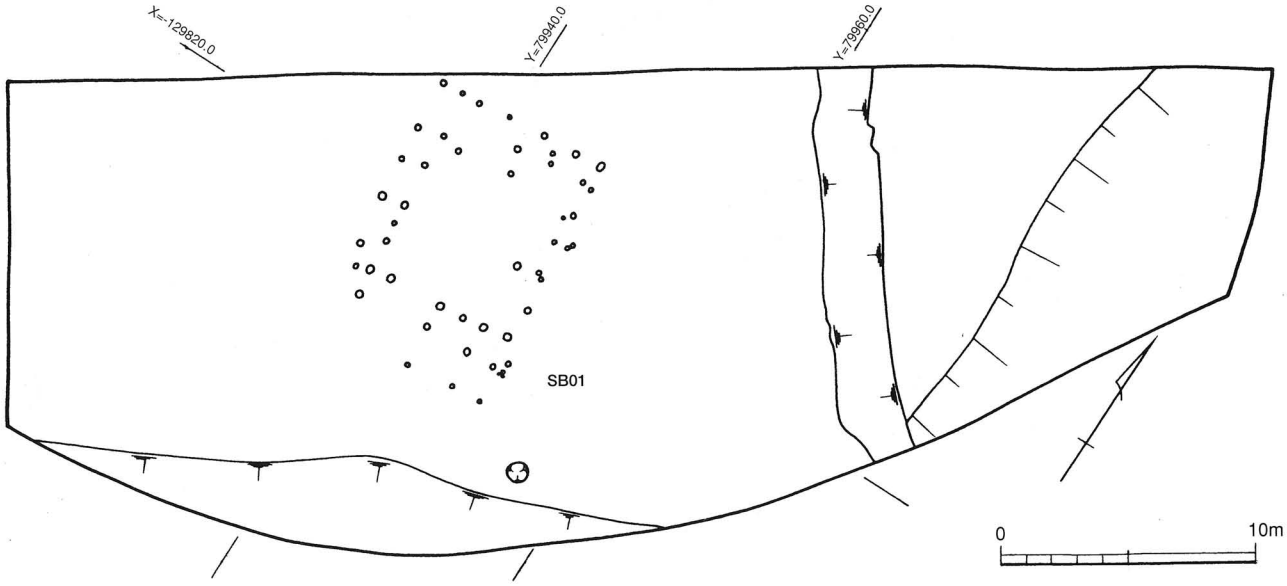


fig. 595　第１遺構面　遺構平面図

第１遺構面
掘立柱建物
ＳＢ01

中世の遺物包含層を基盤層として、掘立柱建物が１棟とピットを数基検出した。南北５間（7.6m）、東西５間（6.2m）南北棟の掘立柱建物である。南北の柱間は、1.3～2.1mで、東西の柱間は0.9～1.6mとばらつきがある。西側には、半間分の庇が付くと思われ、南側には1間半分の小屋を設けていると思われる。南側の柱間の広い部分が出入口であったのではなかろうか。

柱穴ＳＰ34からは須恵器の坏片、柱穴ＳＰ07からは須恵器の壺片、柱穴ＳＰ10では須恵質の平瓦が出土している。柱穴ＳＰ15には柱根が残っていたが遺存度は悪かった。また、ＳＢ01に付随する柱穴かどうか不明であるが、ＳＰ12･13からは礎石が出土している。

掘立柱建物ＳＢ01の時期は、柱穴からの出土遺物が細片であるため、時期を判定するのは困難であるが、14世紀に属するであろうと思われる。

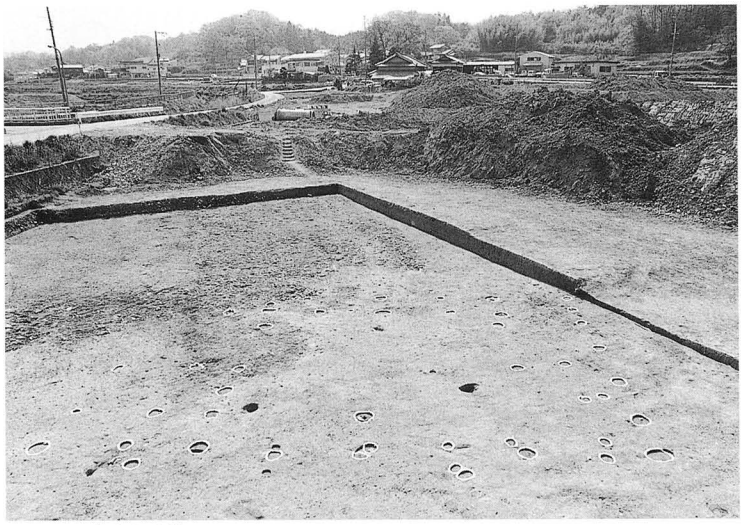


fig. 596　掘立柱建物 SB01

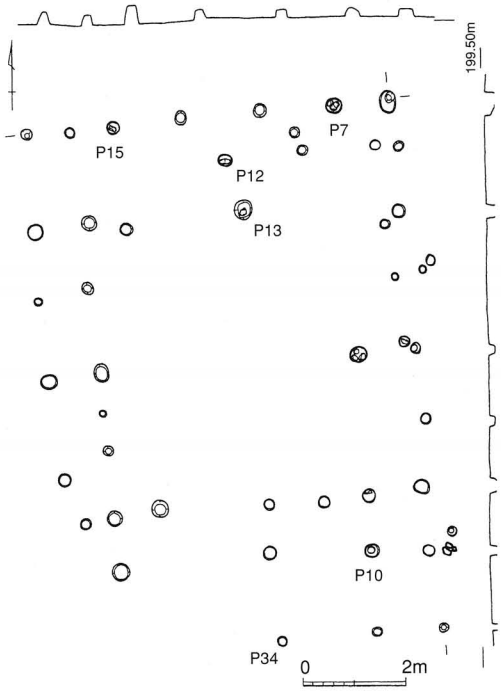


fig. 597　掘立柱建物 SB01　平・断面図

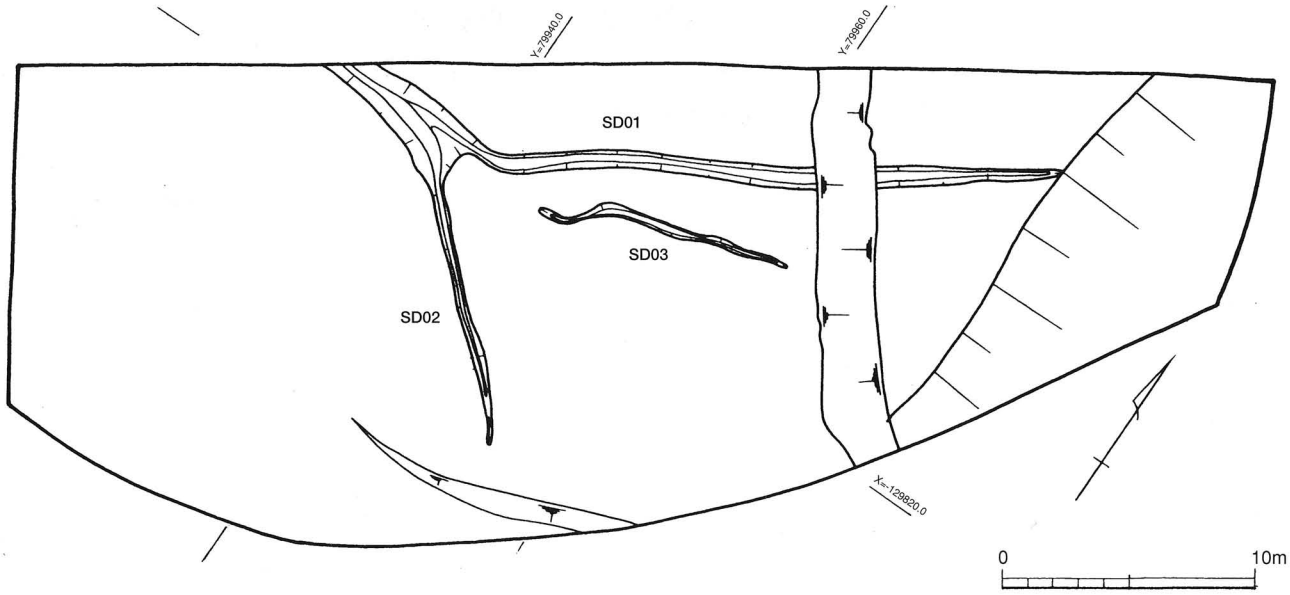


fig. 598　第２遺構面　遺構平面図

第２遺構面　第１遺構面のベースとなる明灰褐色砂質シルトの包含層を掘削すると、黄褐色シルト質極細砂の遺構面となる。精査の結果、溝３条を検出した。調査区の東側は緩やかに下がって行き、西側はＳＤ02を境に中礫、大礫を含む砂礫層となる。

ＳＤ01　ＳＤ01とＳＤ02は調査区の西から流れている溝で、途中でＳＤ01とＳＤ02の2本に分かれている。ＳＤ01は幅80cm内外で深さ15cm～20cmの溝で、埋土は灰褐色砂質シルトである。ＳＤ02との合流点より東側に向かい、地形が下がって行くに従い、溝は消滅する。

ＳＤ02　ＳＤ02はＳＤ01との合流点より南側に向かう溝で、幅40cm内外で深さ10cm～15cmである。埋土は灰褐色砂質シルトでＳＤ01と同様である。

ＳＤ01とＳＤ02の時期は出土遺物より13世紀と考えられる。

ＳＤ03　ＳＤ03はＳＤ01の南側に並行する溝で、幅40cm内外で深さ15cm～20cmである。埋土は茶褐色シルトで、底面は凹凸である。出土遺物が無いため時期は不明である。

fig. 599　第２遺構面　全景

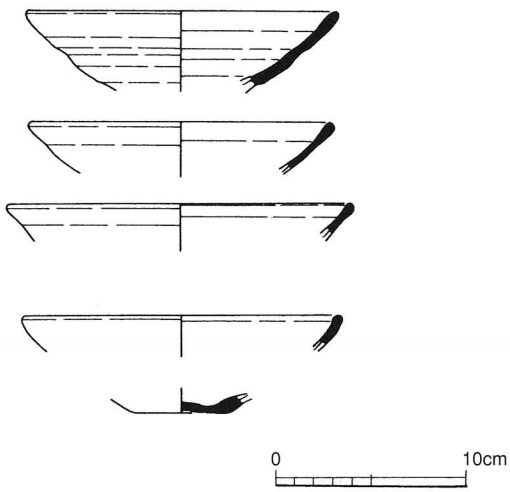


fig. 600　SD02 出土土器実測図

附物遺跡　吉尾遺跡の南西１kmに位置する附物遺跡は、附物川が八多川に合流する付近の河岸段丘上に立地する遺跡で、平成２年に八多中学校の管理棟建設に伴い初めて発掘調査され、近世土坑、中世掘立柱建物等が発見されている。今回の調査は第３次調査に当たる。

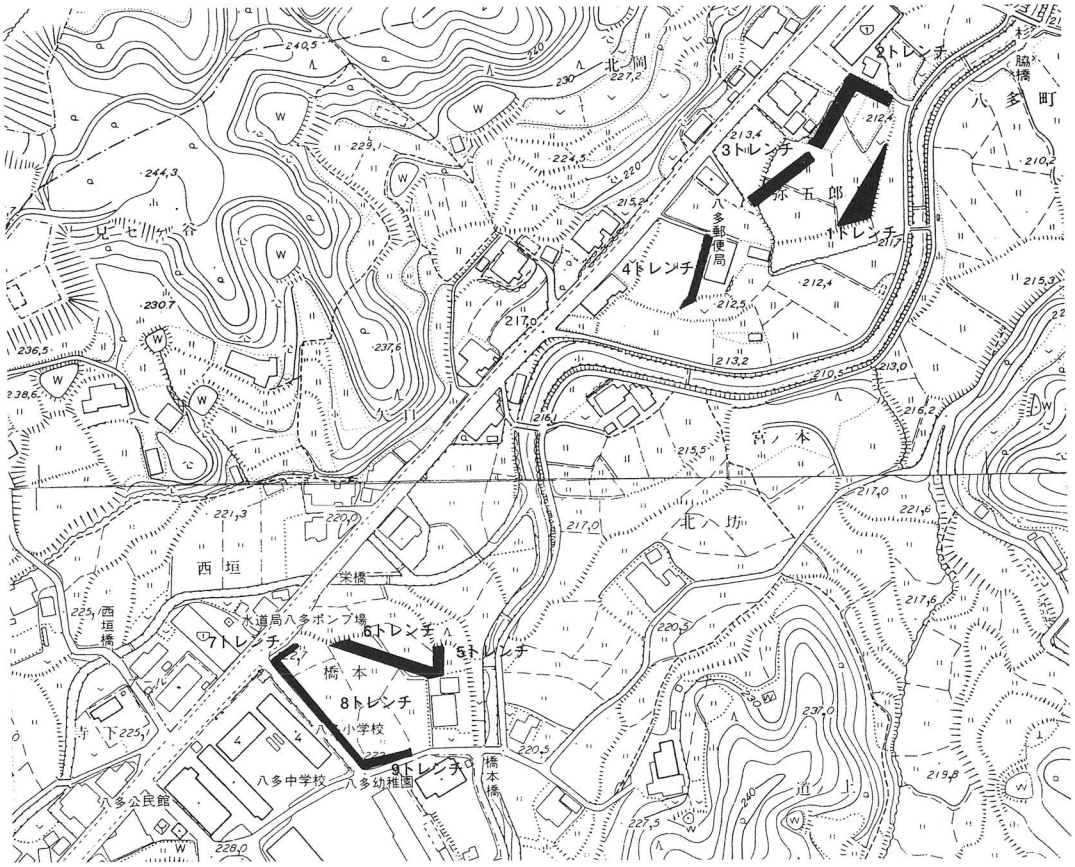


fig. 601
附物遺跡
調査地位置図
1:4,000

附物遺跡の調査は広範囲に渡るため、便宜上北から順にトレンチ番号を付した。各調査トレンチの調査状況の概要は、下記の表のとおりである。

調査区のなかで第３トレンチについては、遺構の密度は高く、３棟の掘立柱建物が検出された。第４・５・６トレンチからもピットが出土したがいずれも散在的で、掘立柱建物としてはまとまらなかった。

トレンチ名	遺構検出状況
第１トレンチ	調査区東側が旧河道で削平され、遺構は存在しなかった。
第２トレンチ	調査区北西端で短径78cm、深さ14cmの土坑を1基検出。
第３トレンチ	Ａ区：掘立柱建物３棟、土坑２基、溝３条、ピット数十基。Ｂ区：ピット３基検出。 土坑ＳＫ01は長径80cm、短径68cm、深さ12cmの楕円形、ＳＫ02は長径 104cm、短径66cm 、深さ34cmの楕円形（13世紀頃）。
第４トレンチ	調査区北端で直径20cm内外、深さ10cm内外のピットを５基検出。
第５トレンチ	土坑２基（14世紀頃）、溝１条（14世紀頃）、ピット２基を検出。
第６トレンチ	ピット１基と幅6m、深さ20cmの落ち込み１基検出。
第７トレンチ	南側から北側に緩やかに落ち込む自然地形を検出。最深部には植物遺体が堆積していた。
第８トレンチ	標高222.70mの調査地内最高部に位置するが、後世の削平か遺構は検出されなかった。
第９トレンチ	直径15～36cm、深さ３～43cmのピット17基を検出。東端の緩やかに落ち込む自然地形の埋土からサヌカイト製の石鏃が１点出土している。

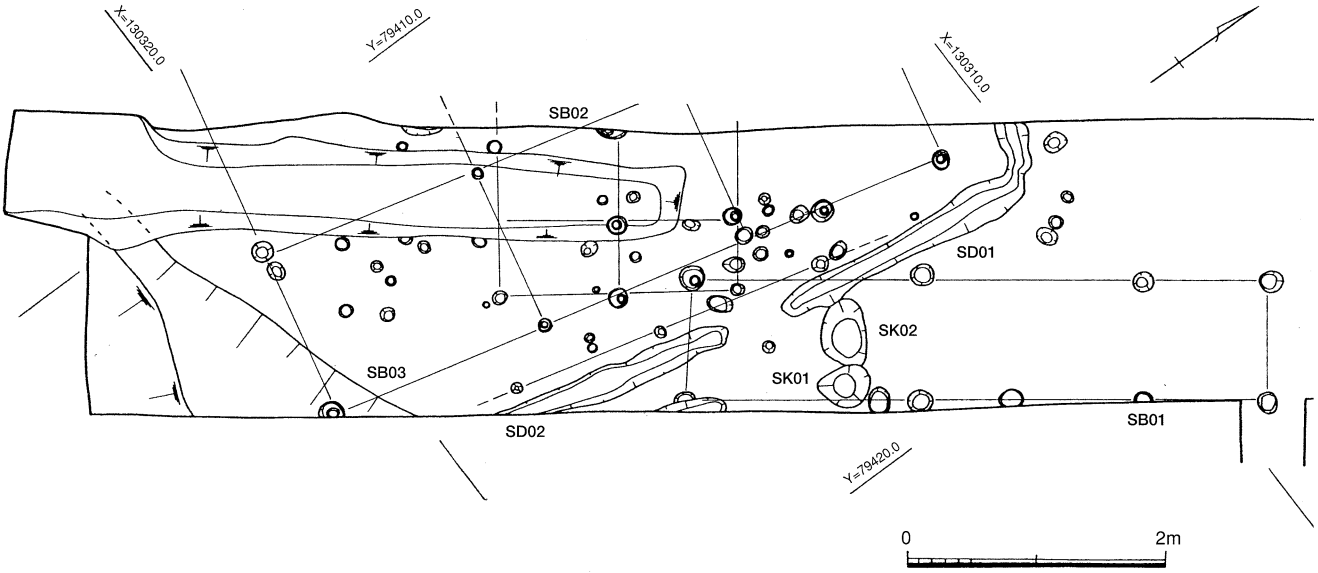


fig. 602　第３トレンチＡ区　遺構平面図

第３トレンチ　第３トレンチＡ区では南半で遺構が集中し、掘立柱建物３棟、土坑２基、溝３条、ピット数十基を検出した。

ＳＢ01　ＳＢ01は１間（２ｍ）以上×２間（７ｍ）の総柱の掘立柱建物で、東側に半間の庇が付くと思われる。柱穴の直径は40cm内外で深さは35cm～40cmである。時期は不明である。

ＳＢ02　ＳＢ02は２間（2.8m）×２間（3.7m）以上の総柱の掘立柱建物と思われる。建物の方向はＳＢ01と同様である。柱穴の直径は22cm～30cm、深さは9.9cm～48cmであった。柱穴のうち、ＳＰ04には柱根が残っていた。ＳＰ05からは片口鉢が出土した。出土遺物から13世紀頃の建物と考えられる。

ＳＢ03　ＳＢ03は１間（2.7m）以上×３間（10.2m）の総柱の掘立柱建物と思われる。柱穴の直径は22cm～40cm、深さは28.9cm～55cmであった。柱穴のうち、ＳＰ02･03には柱根が残っていた。ＳＰ02からは壺の口縁が、ＳＰ22からは片口鉢が出土している。これらの出土遺物より、14世紀頃の建物と考えられる。

ＳＤ01
ＳＤ02　ＳＤ01とＳＤ02はＳＢ03の周囲を巡るように検出された溝で、ＳＢ03に属する雨落溝であると思われる。溝の幅は35cm～65cmで深さは10cm。このＳＤ01、ＳＤ02とＳＢ03との間にピット列が検出されたが、柵状のものが存在していたと思われる。

ＳＢ01～03の先後関係判断しがたいが、ＳＢ02、03の出土遺物から考えて、ＳＢ02が先行するものと思われ、ＳＢ03の雨落溝と思われるＳＤ02と方向を同じくするＳＤ03が、ＳＢ01のピットを切っていることから、ＳＢ01はＳＢ03に先行するものと考えられる。さらにＳＢ01とＳＢ03の柱間がほぼ同一であることから、時期差は無いと考えられる。以上のことから推測して、掘立柱建物はＳＢ02→ＳＢ01→ＳＢ03の順に建てられたと思われる。

ピットは数十基検出されたが、建物を構成しないものの中で、ＳＰ01からは片口鉢がほぼ半個体出土している。13世紀のものであろう。また、ＳＰ08は残りの良い柱根が出土している。ＳＰ20からは瓦器が出土している。ＳＢ03の南側は緩やかに下がって行き、削平を受けているため、遺構は検出されなかった。

fig. 603　第３トレンチＡ区　全景

fig. 604　第３トレンチＡ区　掘立柱建物・柵

第５トレンチ　第５トレンチから第９トレンチは八多川をさらに300m逆上った地点に位置する。

ＳＫ01　隅丸方形の平面形をし、一部が溝状に延びている。長辺２m以上、短辺105cm、深さ10cmで、長辺の一部に長さ75cmにわたり溝状に飛び出す。時期は14世紀頃と思われる。

ＳＫ02　円形の土坑であると思われるが、調査区外に延びる。土坑の直径は1.7m、深さ40cmで、20cm程の珪化木が出土している。時期不明であるが、ＳＫ01と同時期のものであろう。

ＳＤ01　幅70cm内外、深さ20cm内外であった。溝の時期は出土遺物から14世紀頃と思われる。

３．まとめ

今回の調査で注目すべきは、附物遺跡の第３トレンチで掘立柱建物が３棟発見されたことであろう。第３トレンチについては、遺構の密度は高く、それが地形的要因なのかどうかは不明であるが、少なくとも、意識的に同一地区に居住し続けていたことは明らかである。13～14世紀の集落構造を知る上でも、今回の調査は貴重な発見であった。

吉尾遺跡の調査区においては、掘立柱建物が１基のみ検出されたが、地形から見るがぎり、調査区の北側にさらに幾つかの掘立柱建物の存在が想定され、昨年度の第２次調査ともあわせ、当該期の集落址を考える上で貴重な発見であった。

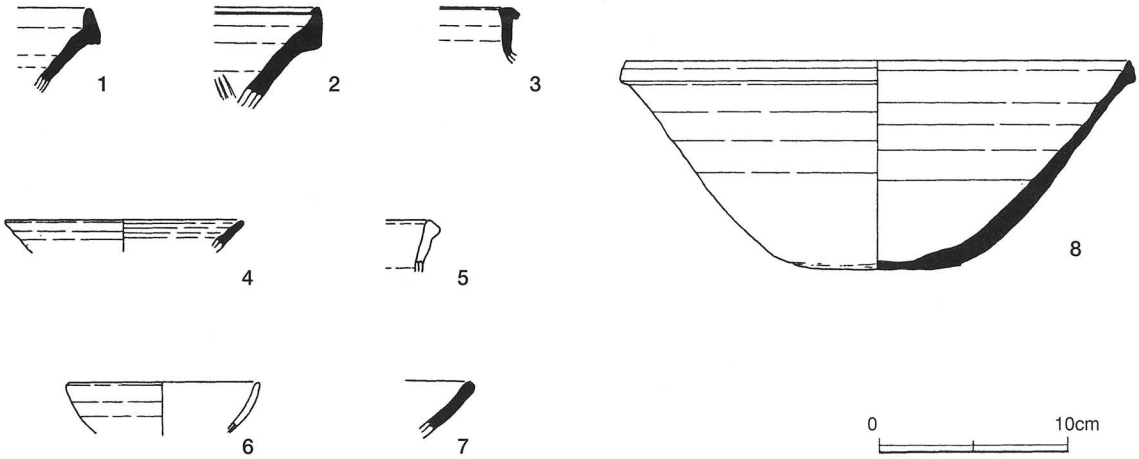


fig. 605　第３トレンチＡ区　出土土器実測図　　1・6：SB01　2・3：SB03　4：SP08　5：SP23　7：SK02　8：SP01

3．屏風（びょうぶ）遺跡　第10次調査

1．はじめに

屏風遺跡は、六甲山系の北側を西流する屏風川付近に分布する。川の両岸は未発達の河岸段丘と丘陵からなり、平野は全く見られない。屏風地区は摂津国有馬郡に属するが、西北側は播磨国美囊郡に属する淡河町野瀬地区であり、まさに摂津・播磨国境の村である。

当遺跡は過去の調査結果から、中世～近世にかけての集落遺跡であることが判っている。

今回は、屏風川左岸の丘陵部とその末端が調査の対象地となった。

平成３年４月の圃場整備事業に伴う試掘調査で今回の調査地を含む部分で遺構・遺物が確認された（東地区）。また、平成８年１月の試掘調査では、石組みを持つ近世墓地が確認された(西地区)。今年度は両地区の圃場整備工事によって破壊される部分について発掘調査を実施した。また、試掘調査の段階で調査必要と回答した部分に再度、試掘坑およびトレンチを設定し、発掘調査面積の絞り込みを計った。

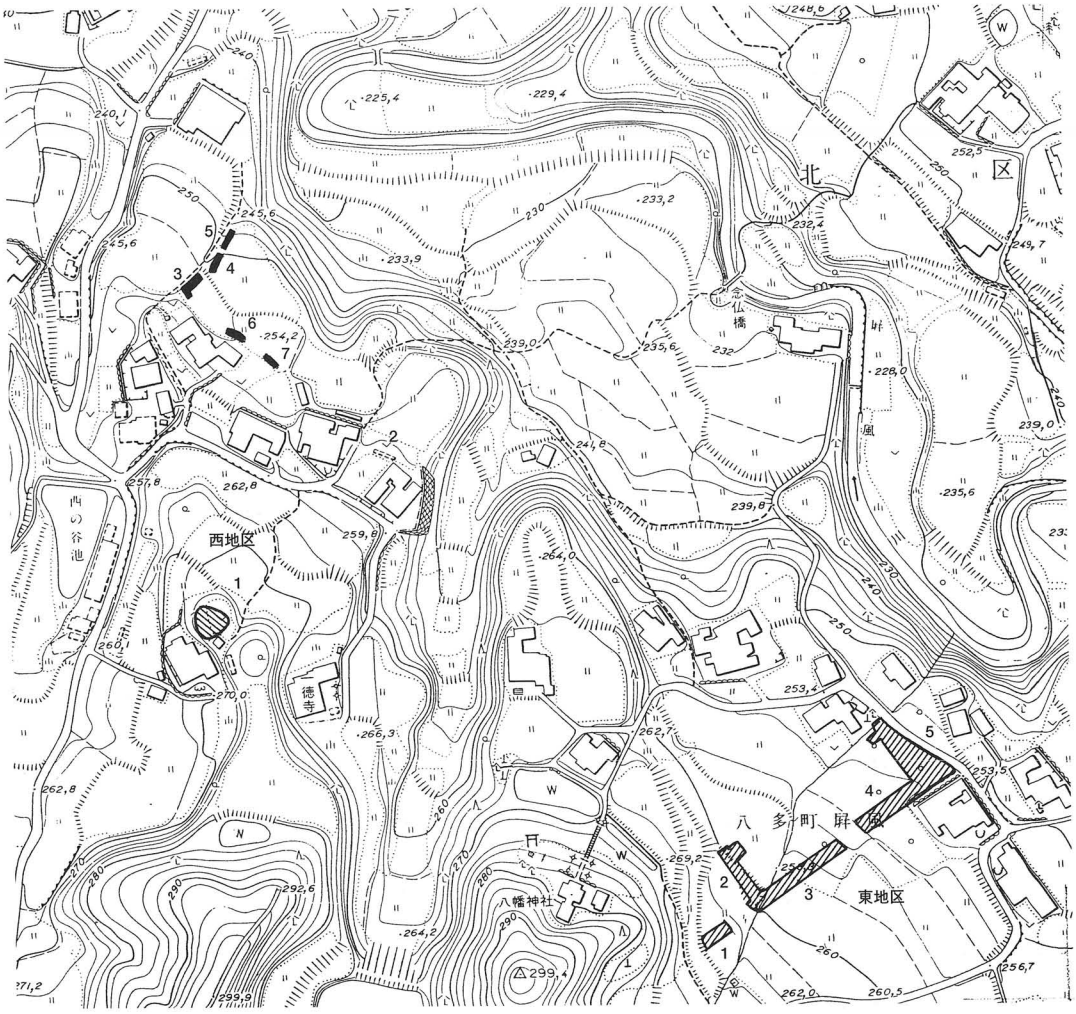


fig. 606
調査地位置図
1:4,000

2．調査の概要

工事が予定されている排水路とその末端の切土部分の調査を行った。斜面の高い方（南東地区の調査　西側）から低い方（北東側）に順番に１～５トレンチの番号を付した。

東－１トレンチ　長さ10m、幅４ｍの調査トレンチで、南西側は削平を受け、北東側は分厚い盛土で整地が行われていた。盛土より若干の土器が出土したが、遺構は検出できなかった。

東－２トレンチ　北半部で土坑２基、ピット１基、浅い小流路１ヵ所を確認した。また、北東側の一部を拡張した結果、掘立柱建物１棟、土坑２基、溝２条、ピット１基を確認した。

土坑ＳＫ01　北端部で確認された直径65×75cm、深さ35cm、楕円形の遺構で、底面に長さ50cm、幅10cm、厚さ４mmの板材が入れられ、10～40cm大の角礫と土器がその上に投げ込まれていた。時期は13世紀である。

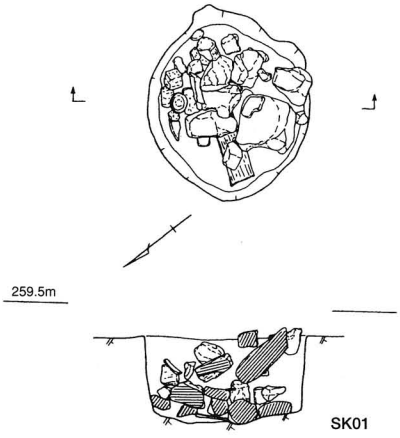
小流路　北端部の上段で検出したが、下段では削平され確認できなかった。浅い小流路または落ち込み状の自然地形と判断される。この堆積土中から、13世紀の土器が集中して出土した。

掘立柱建物　東西３間以上、南北１間以上の総柱建物で、柱間の距離は、東西２～2.2m、南北2.6mである。なお、掘立柱建物は土坑ＳＫ02，溝ＳＤ01,02を切り込んで造られている。

土坑ＳＫ03　直径1.1×1.3m、深さ18cmの楕円形の土坑で、底には木灰であったと思われる暗灰色シルトと炭が溜まっており、その上に10～40cm大の角礫と土器を投入している。角礫には、焼けたものがある。出土土器からみて、13世紀の遺構である。

ＳＫ04　ＳＫ03の北側に接し、直径1.6×1.8m、深さ25cmの不整円形の土坑で、角礫と土器片が投棄されているが、03ほど多くはない。13世紀の土器が出土している。

溝ＳＤ01,02　幅30～40cmのＵ字形の浅い溝である。いずれの溝も13世紀の土器が出土している。



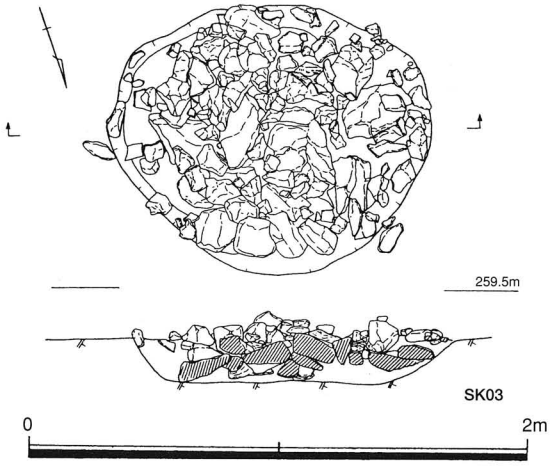


fig. 607　東－２トレンチ　SK01・03　平面図・断面図

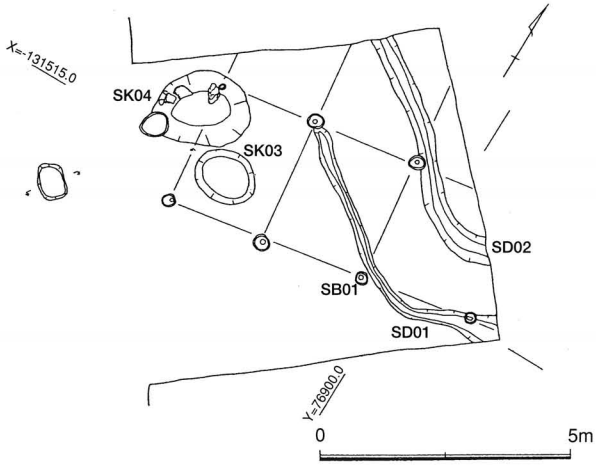


fig. 608　東－２トレンチ　SB01　平面図

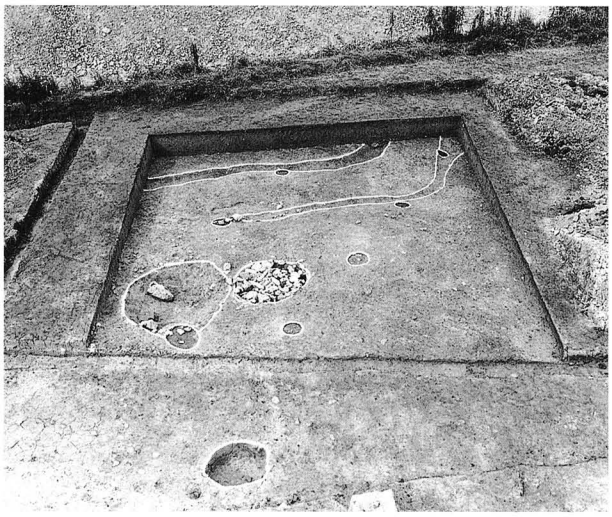


fig. 609　東－２トレンチ　拡張部　全景

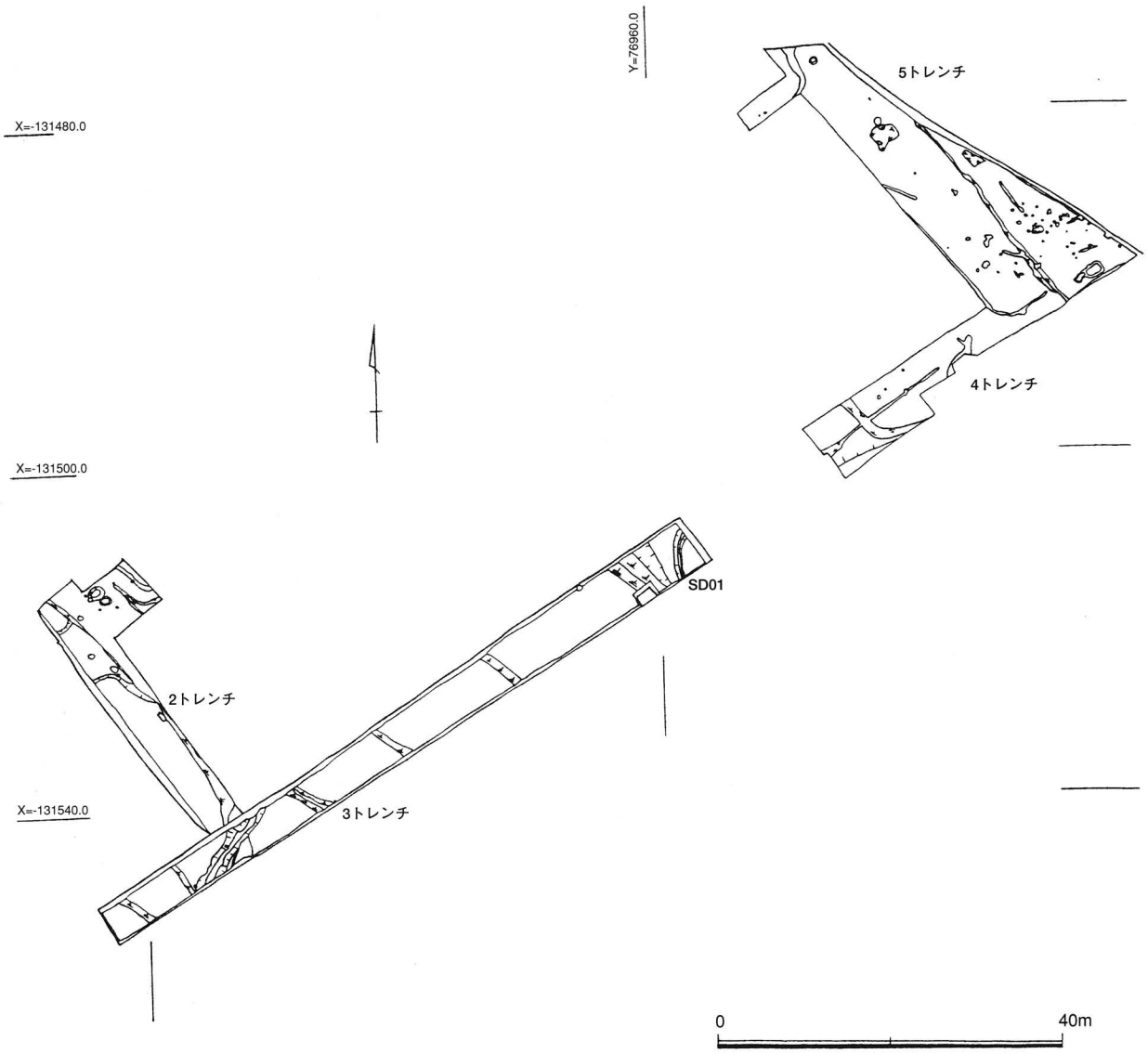


fig. 610　東地区　2～5トレンチ　平面図

fig. 611　東ー2トレンチ　拡張部 SK03

fig. 612　東ー5トレンチ　遺構検出状況

東－３トレンチ　西半部で近世～現代の水路１条と、東端部で中世の水路１条を確認した。

溝ＳＤ01　東端部で検出した長さ３ｍ、幅50㎝、深さ10～20㎝の溝で、部分的に杭を打ち込んでいる。南から北へ流れたと判断される。堆積土は灰色細砂で14世紀の土器を含んでいる。

東－４トレンチ　近世～近代の溝と時期不明のピット３基が検出されただけであった。

東－５トレンチ　北半部は遺構の密度は疎であり、南半部下段に遺構が集中していた。また、ここでは、13～14世紀の土器を含む遺物包含層が確認された。

南半部下段　ここでは、ピット30基以上、溝２条、土坑２基が発見された。

土坑　ＳＫ01　1.5×2.2m、深さ30～40㎝、長方形の土坑で、埋土内から14世紀の土器が出土した。

東－５トレンチ拡張部　北端部で50×70㎝ぐらいの四角い礎石が１基検出された。さらに周溝とも考えられる溝が１条確認され、礎石柱の建物が存在する可能性があると想定した。この場所から５～６ｍ北西に南北朝～室町時代ぐらいの五輪塔が祀られており、寺があったという伝承もあることから、３×７ｍの範囲で拡張を行ったが、ピットを1基発見したのみであった。

西地区の調査　試掘で発見された墓地址の調査を実施した。〔排水路、道路、パイプライン予定部分〕

西－1トレンチ　標高278m前後の丘陵頂部に位置し、眺望は良好な場所である。調査は、表土、盛土除去後、墓地の石塔の基底石と判断される石組みを検出した。

近世の墓地址　墓地は、丘陵頂部を７×８ｍの範囲でコの字形に削り、土手状の高まりを残している。その高まりの両側に北東方向を正面とし、ハの字形に開く石列を当初は各２列平行に６ｍ程並べていたようである。

石塔の基底石は、正面向かって左側で50×80㎝の一部が欠けた一枚石が出土し（ＳＴ01）、また右には、100×80㎝の石組み（ＳＴ02）が造られている。ＳＴ01,02の正面には、50㎝程度の平たい石が一対置かれ、供物台となっている。右側には100×100㎝（ＳＴ03）、70×80㎝（ＳＴ04）、70×90㎝（ＳＴ05）の石組みが造られている。また、ＳＴ02の右側に、小礫が集中するところが認められ、墓石が置かれていた可能性はあるが明らかではない。

左側奥は、地山が削り残されて土手状になっているが、墓石が建てられていた痕跡は残っていなかった。左側手前部分（南西側）に石を並べて３段の階段を設けており、北西側の墓参道とつながる。また、階段の３段目は320×80㎝にわたって石を敷き詰めている。

fig. 613　西－１トレンチ　近世墓地全景

fig. 614　西－１トレンチ　近世墓地

火葬関連遺構　墓地址の南西部分は整地による盛土層となっており、炭やかわらけを多く含む層があることを試掘調査で確認していた。

調査の結果、墓地を造成する以前の斜面地が確認され、その面に掘り込まれた土坑が発見された。土坑とその周辺からは大量の炭、かわらけ、陶磁器、金属製品（鉄・銅釘、火打金、刀子、鋏、金具、煙管、銅銭、絵銭）、火葬人骨が出土した。また、間層を挟んで地山面でさらに１基の土坑を検出した。土坑内とその周辺からは、かわらけ、陶磁器（丹波、肥前系陶磁器）、鉄鎌、若干の火葬人骨が出土した。いずれの遺構も壁面、底面は焼けていない。また遺物の出土状況はまとまりがなく、斜面上方から投げ込まれた様相を呈している。これらの状況から土坑は火葬址ではなく、火葬後の灰を捨てる穴であったと判断される。因みに金属製品は納棺時に納められたらしく、焼けているものが多い。また、出土したかわらけ、陶磁器はすべて割れており、完形品は皆無である。

西－２～７トレンチ　排水路、道路、パイプライン予定部分に、長さ６～20m、幅１～２mのトレンチを設定し、調査を行ったが、遺構は確認されなかった。土層断面を観察すると、傾斜が急な地山斜面上に褐色の土壌化した土層が堆積し（炭片、中世の土器を若干含む）、その上に盛土層が厚く積まれて、水田土壌が水平に堆積しているのがいくつか発見された。この一帯が水田化するのはそれほど古い時代ではなく（おそらく江戸時代のある時期）、それ以前は一部が畠地として利用されていたと想定される。

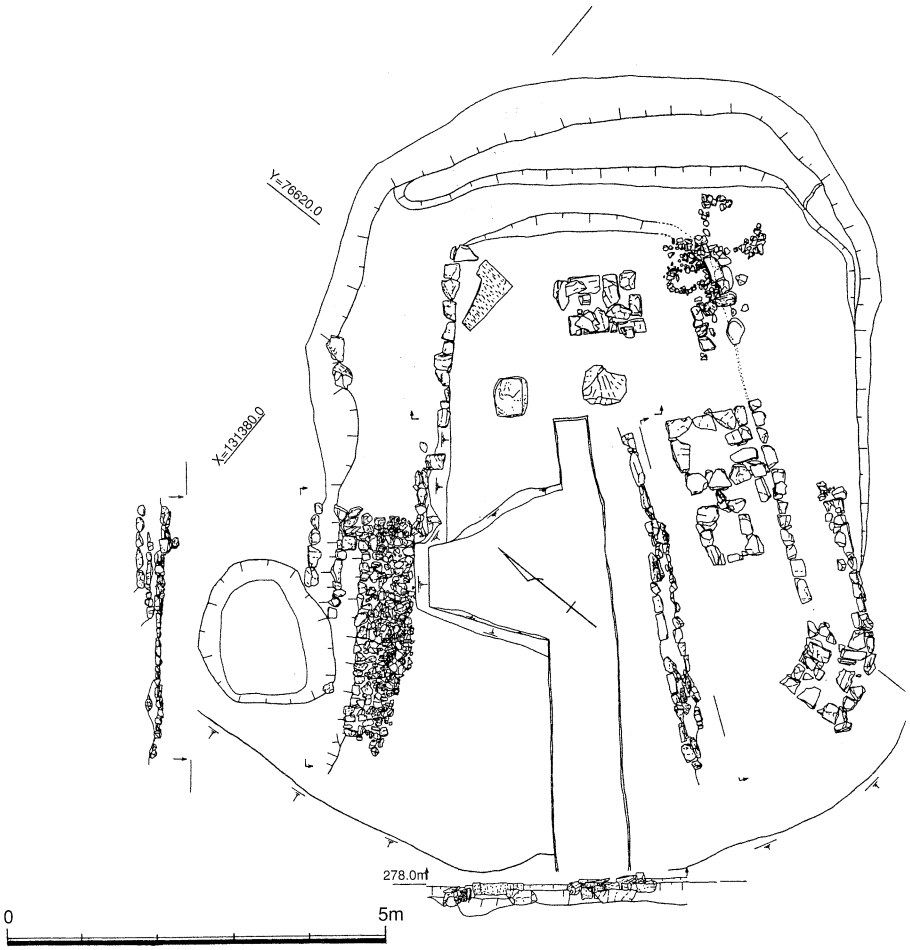


fig. 615　西－１トレンチ　近世墓　平面図・断面図

3．まとめ

東地区

東地区では、鎌倉～室町時代の遺構、遺物が確認された。トレンチや試掘坑による調査の結果、遺構の分布の密な部分と疎な部分が明確であり、その間は、耕作地、水路が何層も重なった状況を呈している。つまり、水田や畠地の間に屋敷が点在する散村形態であったようである。これは現在の風景とあまり異なっておらず、鎌倉～室町時代からこの地区の景観はさほど変化していないといえよう。

また、何枚か重なる水田層の下には、土壌化した層が、地山斜面の傾きに沿って堆積している状態が数カ所確認されており、丘陵の緩傾斜をまず畠地として開墾し、徐々に水田化していった過程が窺われる。上層の水田層や水路からの出土遺物と付近から検出された遺構からみて、鎌倉時代の中期～後期にかけて開発の手（畠地化の開始）が入りはじめ、室町時代には水田化が進み、江戸時代には水田の安定化が完了したものと判断される。

西地区

西地区では、江戸時代中期の火葬関連遺構、中期～後期の墓地址が確認された。火葬関連遺構は、火葬した骨・灰を捨てる穴であり、大量の炭やかわらけ、金属製品、火葬人骨が出土した。これらの遺物から、当時の葬送儀礼の一端が窺われる。また、煙管や鋏の出土は火葬された人物が男性、女性両方であったことが想定される。

やがて、それらを整地して墓地が造られる。石塔の基底石の石組みが出土した。5基の石組みが確認できたが、実際はもっと建っていた可能性が高い。いずれも、墓塔のみが建ち埋葬主体がない詣り墓である。正確な時期は判らないが、江戸時代中期～後期に造られたのは間違いない。

土層の堆積状況や遺物の出土の様子からみて、火葬関連遺構と墓地址については次のような造成・利用・放棄の過程が窺える。

①丘陵頂部が火葬場に選定され、南西の斜面に穴が掘られる。穴の中に火葬後の灰・骨、金属製品、葬送儀礼に用いたかわらけ、陶磁器が捨てられる。

②丘陵頂部が整形され、平坦面を造り出したらしく、その土砂が斜面に捨てられる。それが斜面の穴を埋める。さらにその土砂で斜面を若干整形し、かなり大きな二重の窪みを造りだす。その窪みに炭、灰・骨、金属製品、かわらけ、陶磁器を大量に捨てる。

③斜面の窪みが捨てられたもので相当埋まった後、丘陵頂部がさらに整形される。斜面が埋められて平坦面が拡張され、墓地が造られる。この段階で、火葬した痕跡は完全に削平されている。

④並べられていた墓塔が明治時代以降の墓地整理によって移転し、基底石の石組みだけが残され、今日に至る。

現在の屏風地区は、土葬が行われており、埋め墓と詣り墓を持つ両墓制が受け継がれている。今回確認された火葬関連遺構は現在の葬法と隔たりがあることが判り、注目される。江戸時代の中期～後期にこの遺構が埋め立て、整地され、詣り墓が造られることから、この段階に葬法の変化が起こったことが指摘できる。その理由は今のところ不明である。ただし、この地での火葬が当時において普遍的な葬り方であったかは判らず、極めて特殊な葬法であった可能性もある。今後の類例の増加を待つしかない。

4．屏風（びょうぶ）遺跡　第11次調査

1．はじめに

北区八多町屏風は三田から三木に抜ける街道筋に所在し、旧摂津国と旧播磨国との境界に位置している。

屏風遺跡ではこれまでに10次にわたる調査が実施されており、縄文時代の石器や中世後半から末にかけての掘立柱建物や墓址のほか、最近の調査では近世の墓址なども発見されている。

fig. 616
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

今回の調査は新設のゴルフ場の進入路部分について実施した。この進入路に関する調査については、平成４年度に実施した調査で中世の掘立柱建物２棟や土坑などを検出しているほか、昨年度に実施した９次調査でも中世の掘立柱建物１棟などを検出している。調査は残土置場の都合により、まず北半部について実施した。最北端の田圃部分については、現況水路の擁壁保護等のため調査対象地から除外した。その南側の調査区について調査を実施した。重機により耕土以下の土層を掘削したが、耕土・床土の下層には全面に盛土が70cm程度堆積しているほか、北側については流土を挟んですぐに地山面を検出した。地山面の上面は人為的な改変を受けており、凹凸が激しい。

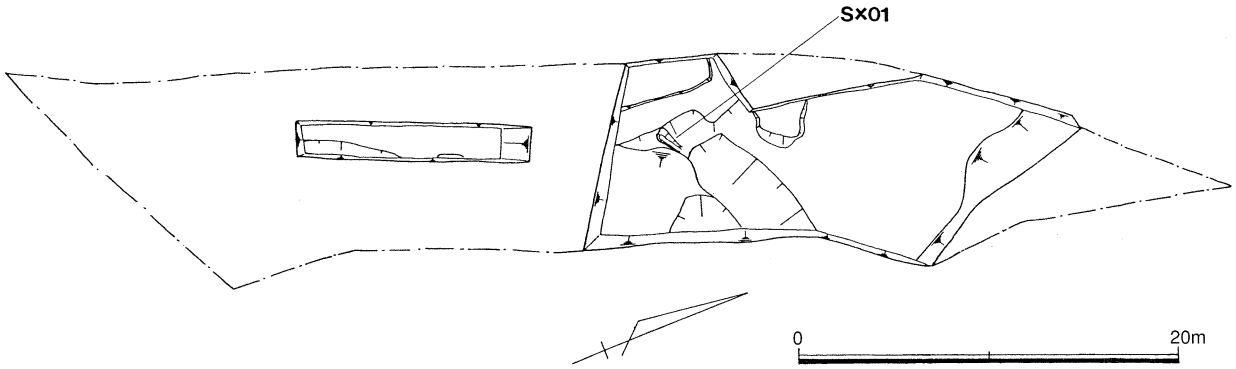


fig. 617　調査区平面図

ＳＸ01　　調査区の南部で溝状の落ち込み１ケ所（ＳＸ01）を検出し、内部より中世の須恵器埦や土師器鍋などが出土した。

幅50cm、長さ1.5m、深さ25cmを測る溝状の落ち込みである。中世の須恵器椀や土師器鍋などが出土している。土師器鍋から判断すれば、13世紀代の遺構と考えられるが、後世の削平を著しく受けており、遺構の性格等は不明である。

北半部の調査において当初予想された程に埋蔵文化財の存在が確認されなかったことから、南半部についてはトレンチ調査に切り換えて調査を実施した。その結果、埋蔵文化財は確認されなかった。また、現地形も既に一部改変されて盛土が行われており、埋蔵文化財が存在する可能性は低いと考えられ、調査を終了した。

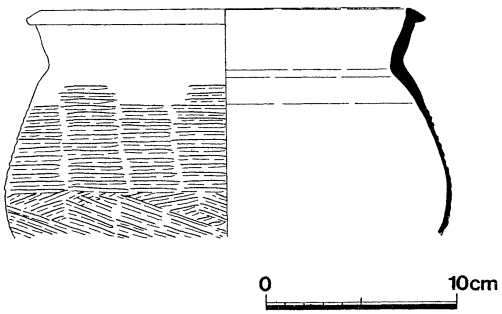


fig. 618　SX01 出土遺物　実測図

３．まとめ

今回の調査では溝状の落ち込み１ケ所を検出したが、そのほかには埋蔵文化財の存在は確認されなかった。地形的にも谷地形の谷底付近に位置していることに加えて、時期不明ながら地山まで造成が及んだあと盛土を行い田圃として利用されており、埋蔵文化財の拡がりは確認されなかった。従来の調査成果と考え合わせると、当遺跡の中心は北及び南の高位の場所に位置するものと考えられる。

5．宅原遺跡（えいばら）　西豊浦（にしとようら）地区・宮之元（みやのもと）地区

1．はじめに

宅原遺跡は、これまで北神ニュータウン関連事業、圃場整備事業、道路建設事業に伴う近年の調査で縄紋時代から近世に至るまでの複合遺跡として周知されている。

今回の調査は、汚水管布設工事により破損を受ける内法幅110cmの部分について調査を実施した。

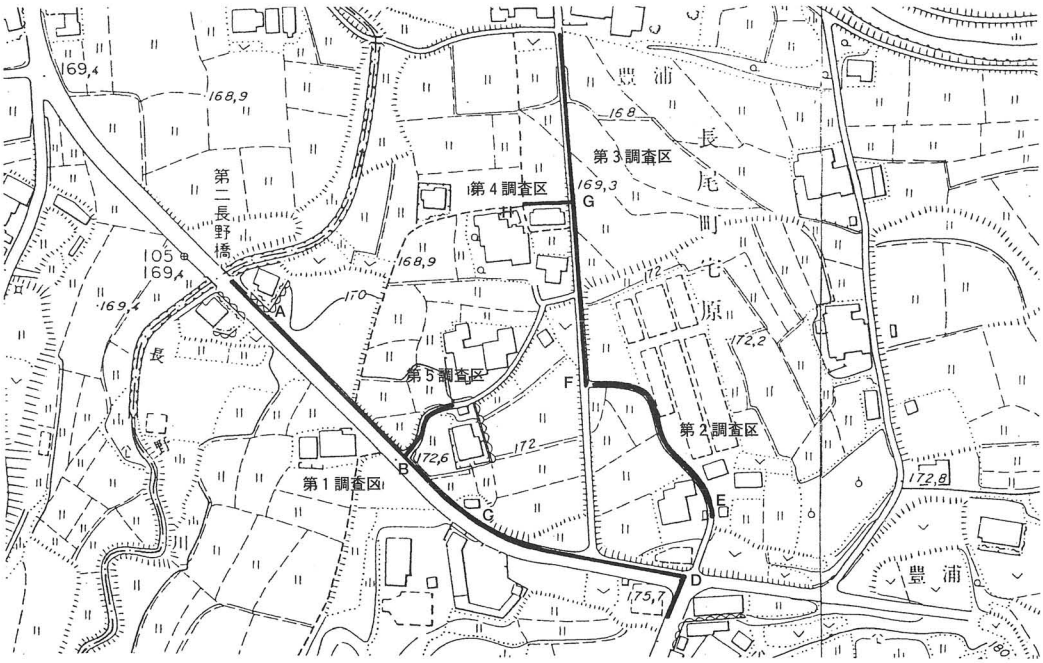


fig. 619
西豊浦地区
調査地位置図
1:3,000

2．調査の概要

調査区は大別して、西豊浦地区と宮之元地区に二分される。西豊浦地区は、第１～５調査区に分かれ、宮之元地区は第１・２調査区に分かれる。

長野川右岸の低段丘上の北端部に位置する西豊浦地区は当遺跡の最西端にあたり、平安時代末期の橋梁状遺構などが見つかっている。また、長尾川右岸の丘陵から延びた低段丘上に位置する。調査区は、５区に分かれ、各調査区の状況の概要は、表１にまとめたとおりである。

調査区	検　出　状　況
第１調査区	（A）：中世遺物包含層下で、溝４条、土坑２基、ピット３基を検出。
	（B）（C）：溝３条、ピット多数検出。
	（D）：溝２条、土坑２基、ピット２基を検出。以南では遺構、遺物は存在しない。
第２調査区	（E）：土坑２基（ＳＫ01は鎌倉時代後半）、近世の落ち込み検出。
第３調査区	（F）：中世の落ち込み
	（G）：水田畦畔、土坑１基、溝１条検出。（水田埋土から中世の須恵器出土）
第４調査区	（H）：幅60～70cm、深さ40cmの東西方向の溝。（古墳時代後期の須恵器・土師器出土）
第５調査区	（I）：径1.1m、深さ0.3mの焼土坑１基（中世の土師器出土） 以南は谷状地形となり、古墳時代の須恵器、中世の須恵器・陶器が出土

表１　西豊浦地区　遺構検出状況の概要（Ａ～Ｉは、地点を表す）

宮之元地区　調査区の中央部（Ｊ）で、第１調査区　黄灰色シルト層の遺構面で井戸、溝１条、土坑１基を検出した。

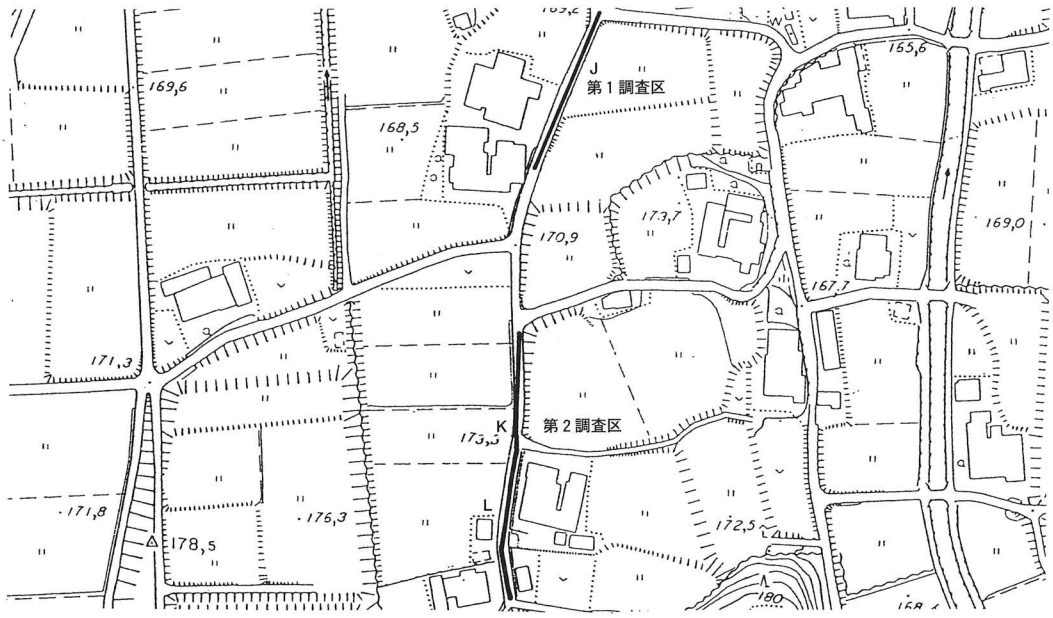


fig. 620
宮之元地区
調査地位置図
1:2,500

井戸ＳＥ01　井戸の掘方の形状は、一辺3.5mの隅丸方形で深さ2.3mを測る。井側は一辺約3.5mの方形で、一辺に３枚の縦板を置き、上下２段の横桟を渡して組み合わせた横桟縦板形の井戸である。井戸の上層からは、須恵器椀、土師器皿、青磁等が多量に出土した。井戸の底部には、曲物が一段据え置かれていた。これらの遺物からして井戸は鎌倉時代前半頃と思われる。井戸の北側で検出した溝からは、鎌倉時代頃の須恵器が少量出土した。

第２調査区　調査区の中央部（Ｊ）で、平安時代前半の須恵器、土師器を多量に含む遺物包含層下で黄灰色シルト層の遺構面で溝８条、土坑２基、不明遺構３基、ピット多数を検出した。

fig. 621　宮之元地区　井戸 SE01 検出状況

fig. 622　同左の井戸枠構造の状況

3．まとめ

今回の調査は、西豊浦地区と宮之元地区の二地区に分けての広範囲に及ぶもので、宅原遺跡の一端が窺えた。西豊浦地区の過去の調査では、古墳時代の溝で、杭列、護岸、井堰が見つかっている。第4調査区で検出した東西方向の溝も位置的には近接し、出土遺物も時期的には同じである。またこの調査区の近くでは、この時期の水田も確認されている。宮之元地区においても、過去の調査で、7世紀代の竪穴住居、掘立柱建物、8世紀代の掘立柱建物、12世紀代後半から13世紀代の掘立柱建物が見つかっていて、飛鳥時代・奈良時代前期・鎌倉時代の集落がこの地に形成されていたものと考えられる。また、奈良時代前期の遺構から出土した木彫面、墨書土器からして官衙的な特徴をもつ遺跡といえる。今回の調査で見つかった井戸は13世紀代頃のもので、この時期の集落の一端を窺わせる資料となった。検出された井戸枠部材については、樹種同定を行った。その結果、井戸枠材の各部位によって、用材の樹種を選択的に採用していることが明らかとなった。また、隣接する豊浦地区で見つかっている井戸も13世紀代に相当し、部材構造も類似している。

以上のように、限られた調査範囲の中で過去の調査を追従する形の成果ではあったが、宅原遺跡の集落の一端を確認することができた。

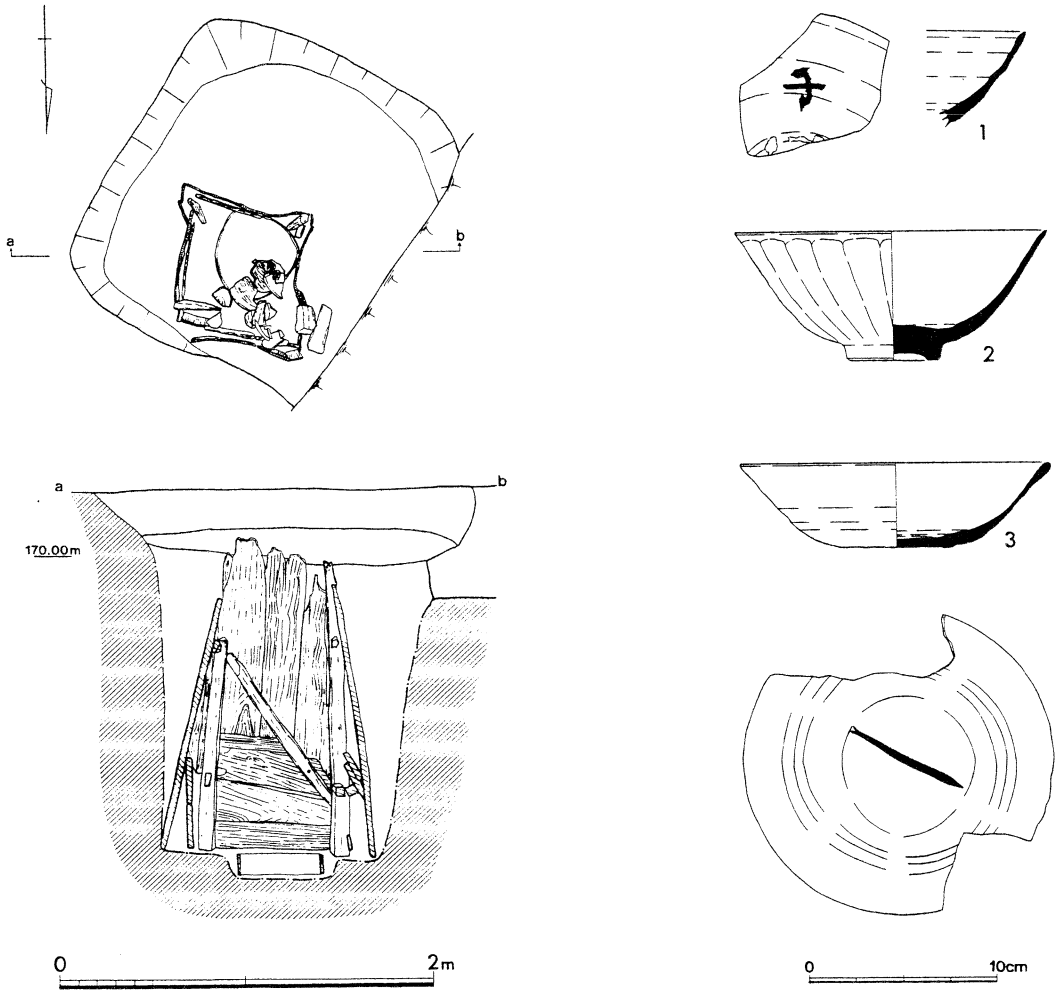


fig. 623　宮之元地区　井戸 SE01 平面図・断面図及び出土土器実測図　（1・3：須恵器　2：青磁）

宅原遺跡宮之元地区（宅原下水）出土木材の樹種同定

1．はじめに　神戸市北区長尾町にある宅原遺跡（宮之元地区）出土木製品について調査した。これらの木製品は12世紀の掘立柱建物に付随する井戸の横桟、横板、縦板、角柱、曲物、桟木計31点である。井戸の形状は一辺3.5mの隅丸方形で、深さ2.3mである。井戸の一辺に3枚の縦板と上下2段の横板が組み合わされている。これらの木材の樹種を調べることにより、宅原遺跡の木材利用を明らかにすることを目的として、樹種を調べた。

2．方法と記載　同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表1宅原遺跡（宮之元地区）出土木製品の樹種同定結果に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、㈱パレオ・ラボで保管されている。

同定根拠

モミ属 *Abies* sp.　PINACEAE　写真図版1a ～1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり単列。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1～4個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。いずれも常緑高木の針葉樹である。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb.et Zucc.　PINACEAE　写真図版2a ～2c

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1～2個。

以上の形質から，マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯～暖帯にかけて分布する。

ツガ属 *Tsuga* sp.　PINACEAE　写真図版3a ～3c

垂直・水平両樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部の量は多く、年輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり単列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の水平壁には単穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で1分野に1～4個存在する。

以上の形質により、マツ科のツガ属の材と同定した。ツガ属にはツガとコメツガ2種が含まれるが、いずれも常緑高木の針葉樹である。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. SCIADOPITYACEAE　写真図版4a ～4c

水平・垂直両樹脂道と樹脂細胞を持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行はやや緩やか。放射組織は、単列ですべて放射柔組織から構成される。分野壁孔は小型の窓状。

以上の形質により、コウヤマキ科のコウヤマキの材と同定した。コウヤマキは、本州（福島県隔離分布）～九州（宮崎）まで分布する常緑針葉樹である。

クリ　*Castanea creneta* Sieb. et Zucc.　FAGACEAE　　写真図版5a ～5c

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道～九州までの温帯～暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木である 。

シキミ　*Illicium anisatum* L.;*I.religiosum* Sieb. et Zucc. ILLICIACEAE　　写真図版6a ～6c

極めて小型の角張った道管が均一に散在する散孔材。年輪のはじめに道管が一列に並ぶ傾向がある。道管の大きさは、年輪内で変化がなく、年輪界は不明瞭である。道管の穿孔は、横棒が非常に多い階段穿孔で、内壁に不明瞭な螺旋肥厚を持つ。放射組織は1～2列で異性。

以上の形質から、シキミ科のシキミの材と同定した。シキミは、本州（宮城県以南）～琉球の暖帯～亜熱帯に分布する。

3．考察

今回調べた製品はＳＥ01遺構（12世紀）の横桟縦板形の井戸枠の構成材である。樹種同定結果を木製品毎に分けて集計すると、部位毎に樹種が集中している事が分かる（集計結果：表２）。

これらの木製品は部位毎に樹種も異なる。四方の隅の角柱にはクリ材を（コウヤマキは東辺の出土である。）、横桟にはアカマツ、横板・縦板にはモミ属が選択されている。縦板のツガ属や、横桟のコウヤマキは、補足的に使用されたのか、それとも、後年の補修等の影響であるかどうかは現地での所見を含めた考察が必要である。

材質的には、クリ・アカマツは水湿に強く、井戸枠の様な水湿が絶えないような箇所には適している。モミ属は材質が軽軟であるが、8世紀の山王遺跡、弥生後期の岡山県の上東遺跡など、井戸枠材での確認事例は多い（松葉・鈴木 1997，島地他 1988）。桟木は、検出点数が１点のみであるので、意識的選択かどうかは不明である。

今回の結果から、井戸枠の部位毎に木材選択があることが分かった。横桟・角柱・縦板の様に、1点だけ異なる樹種が使用されている部位は、この部位が他の部材と同時期に使用された製品であるのか、それとも後世の補修等による製品であるのか等を踏まえた上で、性格を決定する必要がある。

部位名	モミ属	ツガ属	アカマツ	コウヤマキ	ヒノキ属	クリ	シキミ	総計
横　桟			6	1				7
横　板	7							7
角　柱				1		4		5
曲　物					1			1
桟　木							1	1
縦　板	9	1						10
総　計	16	1	6	2	1	4	1	31

表１　SE01 の部位樹種別集計

表２　宅原遺跡出土木製品の樹種同定結果

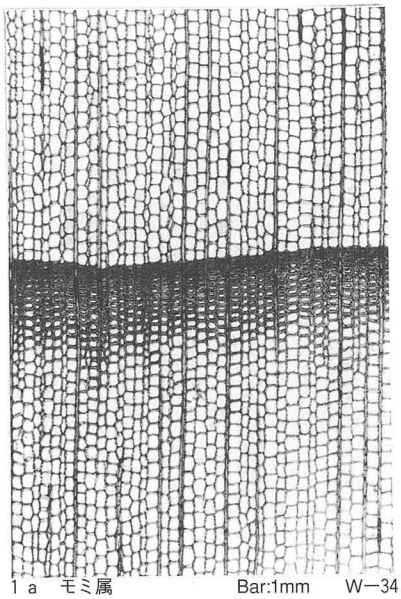
樹　種	遺物番号	遺物名	層　位	備　　考
クリ	W－22	角柱	ＳＥ01	北東隅
モミ属	W－23	縦板	ＳＥ01	東辺－北端
モミ属	W－6	縦板	ＳＥ01	東辺－真中
アカマツ	W－38	横桟	ＳＥ01	東辺－一段目
アカマツ	W－26	横桟	ＳＥ01	東辺－一段目
モミ属	W－29	横板	ＳＥ01	東辺－二段目
モミ属	W－30	横板	ＳＥ01	東辺－三段目
クリ	W－４	角柱	ＳＥ01	南東隅
モミ属	W－１	縦板	ＳＥ01	南辺－東端
モミ属	W－２	縦板	ＳＥ01	南辺－裏側
モミ属	W－３	縦板	ＳＥ01	南辺－裏側
アカマツ	W－８	横桟	ＳＥ01	南辺－二段目
モミ属	W－48	横板	ＳＥ01	南辺－一段目
モミ属	W－42	横板	ＳＥ01	南辺－二段目
クリ	W－40	角柱	ＳＥ01	南西隅
モミ属	W－45	縦板	ＳＥ01	西辺－北端
モミ属	W－43	縦板	ＳＥ01	西辺－真中
コウヤマキ	W－35	横桟	ＳＥ01	西辺－一段目
アカマツ	W－７	横桟	ＳＥ01	西辺－二段目
モミ属	W－46	横板	ＳＥ01	西辺－三段目
クリ	W－10	角柱	ＳＥ01	北西隅
ツガ属	W－19	縦板	ＳＥ01	北辺－西端
モミ属	W－20	縦板	ＳＥ01	北辺－真中（二分割）
アカマツ	W－９	横桟	ＳＥ01	北辺－二段目
モミ属	W－32	横板	ＳＥ01	北辺－一段目
モミ属	W－34	横板	ＳＥ01	北辺－三段目
シキミ	W－47	桟木	ＳＥ01	北辺
アカマツ	W－39	横桟	ＳＥ01	南辺－一段目
ヒノキ属	W－51	曲物	ＳＥ01	最下層
モミ属	W－12	縦板	ＳＥ01	東辺－南端
コウヤマキ	W－25	角柱	ＳＥ01	東辺

引用文献　松葉礼子・鈴木三男.1997. 多賀城市山王遺跡八幡地区出土木質遺物の樹種同定. 山王遺跡Ⅰ. 多賀城市教育委員会. 建設省東北地方建設局.180-191pp.

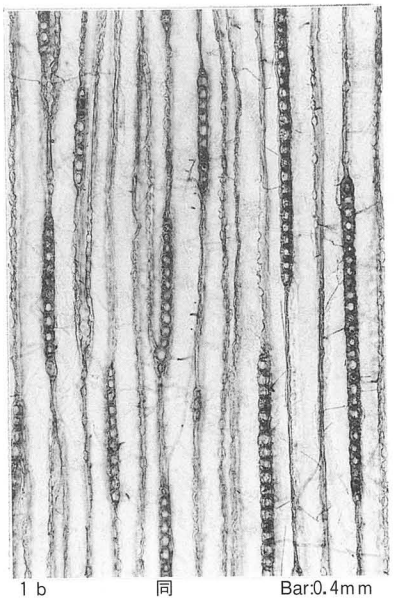
島地 謙・伊東 隆夫・林 昭三・鈴木 三男・光谷 拓実・布谷 知夫・能城 修一. 1988. 日本の遺跡出土木製品総覧,296pp, 雄山閣. 東京.

写真図版１

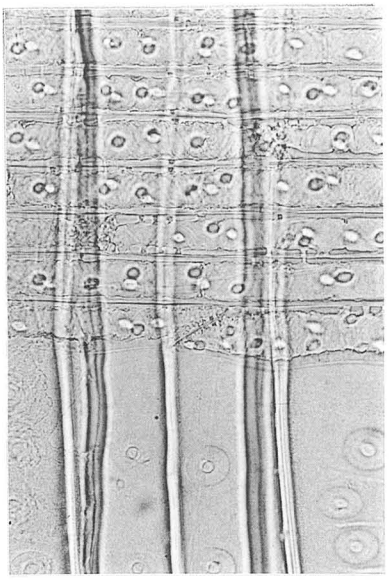
Bar：



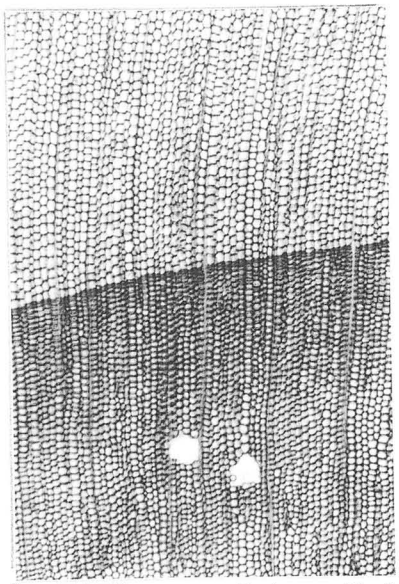
１ａ　モミ属　Bar:1mm　W−34



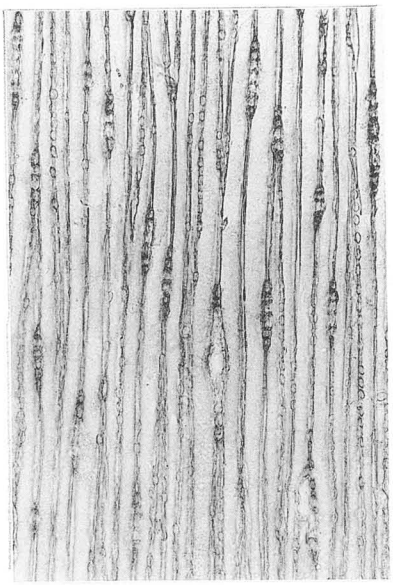
１ｂ　同　Bar:0.4mm



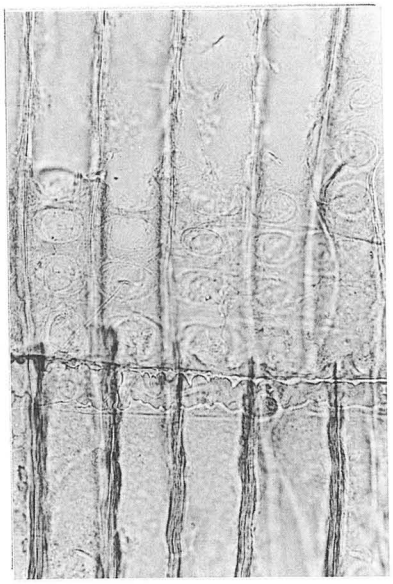
１ｃ　同　bar:0.1 mm



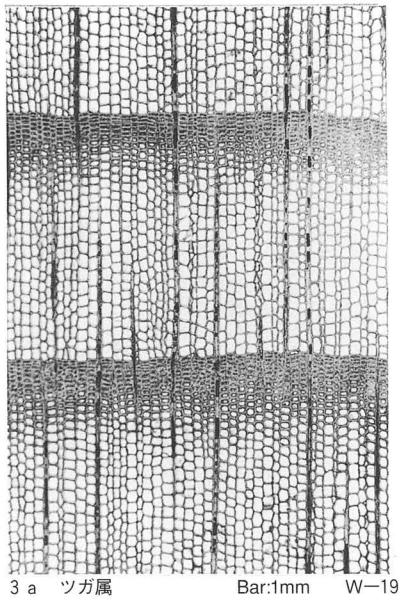
２ａ　アカマツ　Bar:1mm　W−９



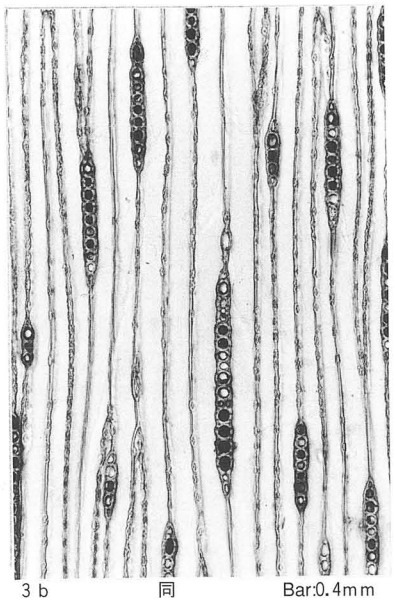
２ｂ　同　Bar:0.4mm



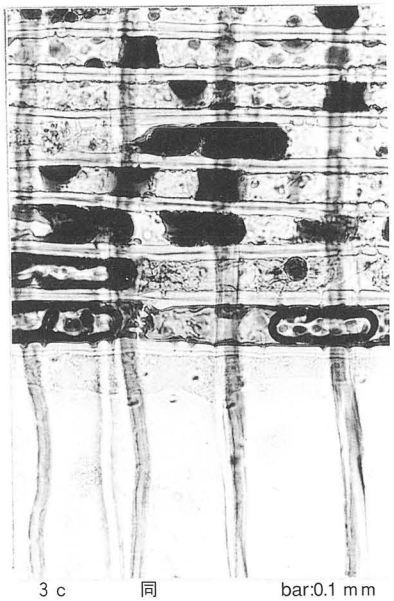
２ｃ　同　bar:0.1 mm



３ａ　ツガ属　Bar:1mm　W−19



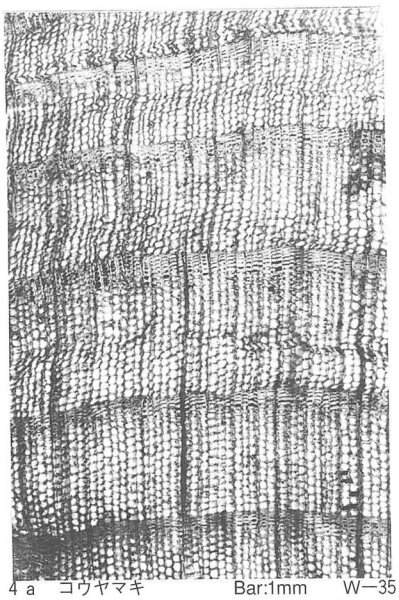
３ｂ　同　Bar:0.4mm



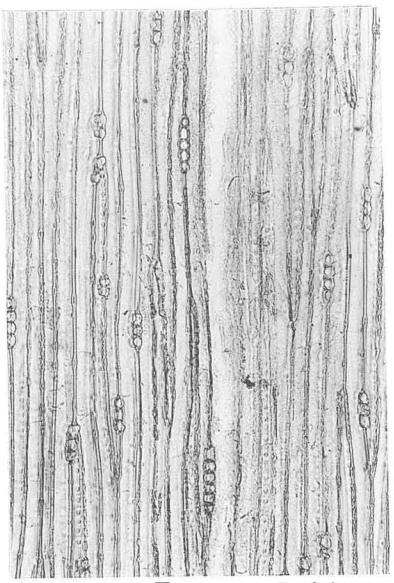
３ｃ　同　bar:0.1 mm

fig. 624　宅原遺跡（宮之元地区）の木材組織顕微鏡写真（１）

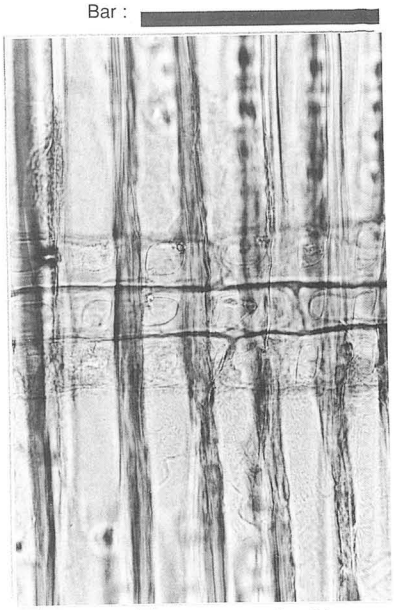
Bar：



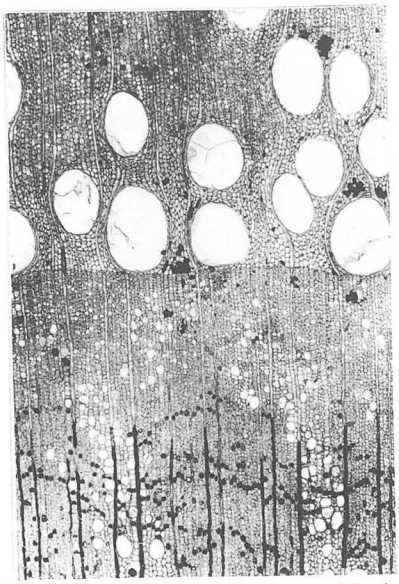
4 a　コウヤマキ　Bar:1mm　W—35



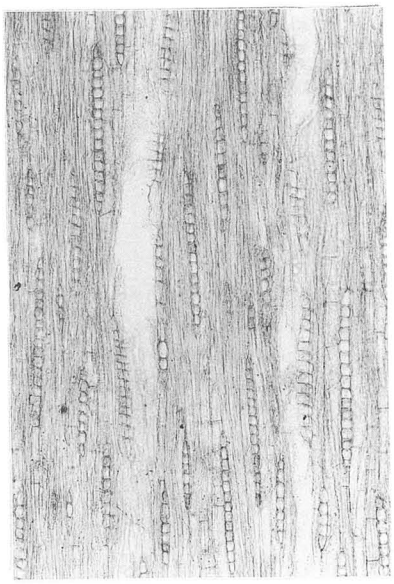
4 b　同　Bar:0.4mm



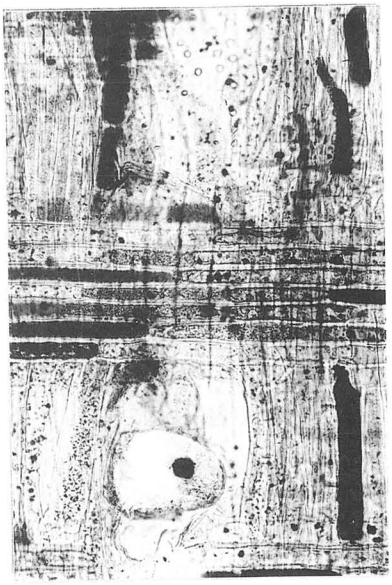
4 c　同　bar:0.1 mm



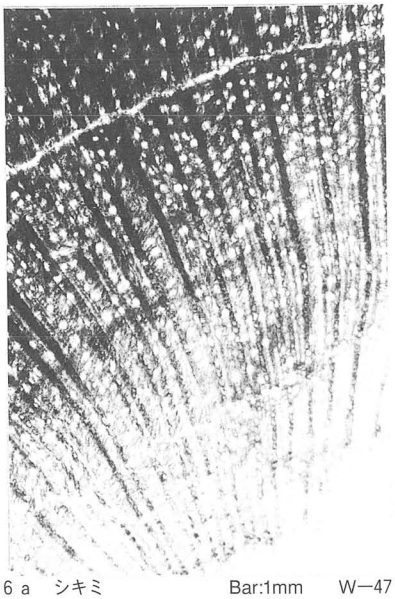
5 a　クリ　Bar:1mm　W—4



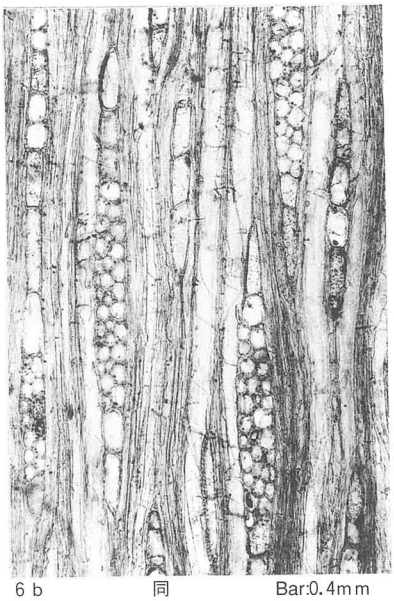
5 b　同　Bar:0.4mm



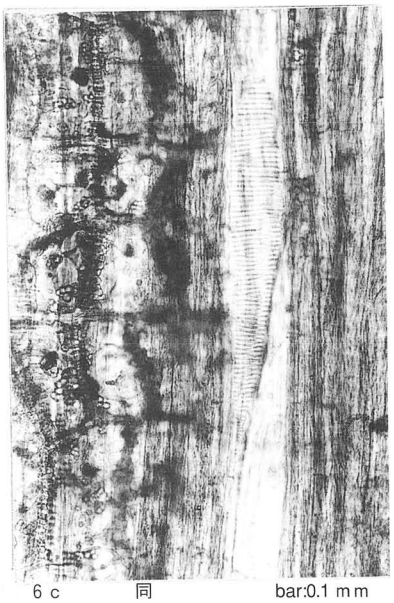
5 c　同　bar:0.1 mm



6 a　シキミ　Bar:1mm　W—47



6 b　同　Bar:0.4mm



6 c　同　bar:0.1 mm

fig. 625　宅原遺跡（宮之元地区）の木材組織顕微鏡写真（２）

6．勝雄（かつお）遺跡　第１次調査

1．はじめに

淡河町勝雄地区は、淡河町の西端に位置し、西は三木市志染町、北は美嚢群吉川町に接する地域である。加古川の一支流淡河川は八多町屏風付近を源として西に流れ、淡河町の谷平野を形成し、勝雄地区南西部にあたる谷の狭隘部で北流して志染川に合流する。勝雄遺跡は、この淡河川の中流域の右岸に位置し、淡河川の流域のなかで最も谷平野が発達した地域に占地している。今回の調査地は、比較的広い谷平野の北側、発達した河岸段丘の突端に位置し、後背湿地との比高差はおよそ8.0mを測る。

今回の調査地南東部の自然堤防上には、鎌倉時代に勧請されたとされる淡河八幡神社が鎮座し、現在の社域となっている杜からは、室町時代の土師器皿・瓦片・須恵器片などが出土している。また、淡河川の対岸には鎌倉時代～戦国時代の淡河氏の居城である淡河城を望むことができる。

調査地付近は、昭和40年代から淡河天満宮を中心として、須恵器・土師器などの遺物の散布地として知られ、平成６年度土地改良事業に伴って実施された試掘調査においても、天満宮と淡河八幡神社の周辺に設定した試掘坑から遺構・遺物が検出された。試掘調査の結果をうけて、土地改良事業の実施設計がなされた結果、天満宮の北側排水路（第１トレンチ）、天神池西側の水田切土部（第２トレンチ）、第２トレンチ西側の南北排水路の一部（第３トレンチ）について調査を実施することとなった。

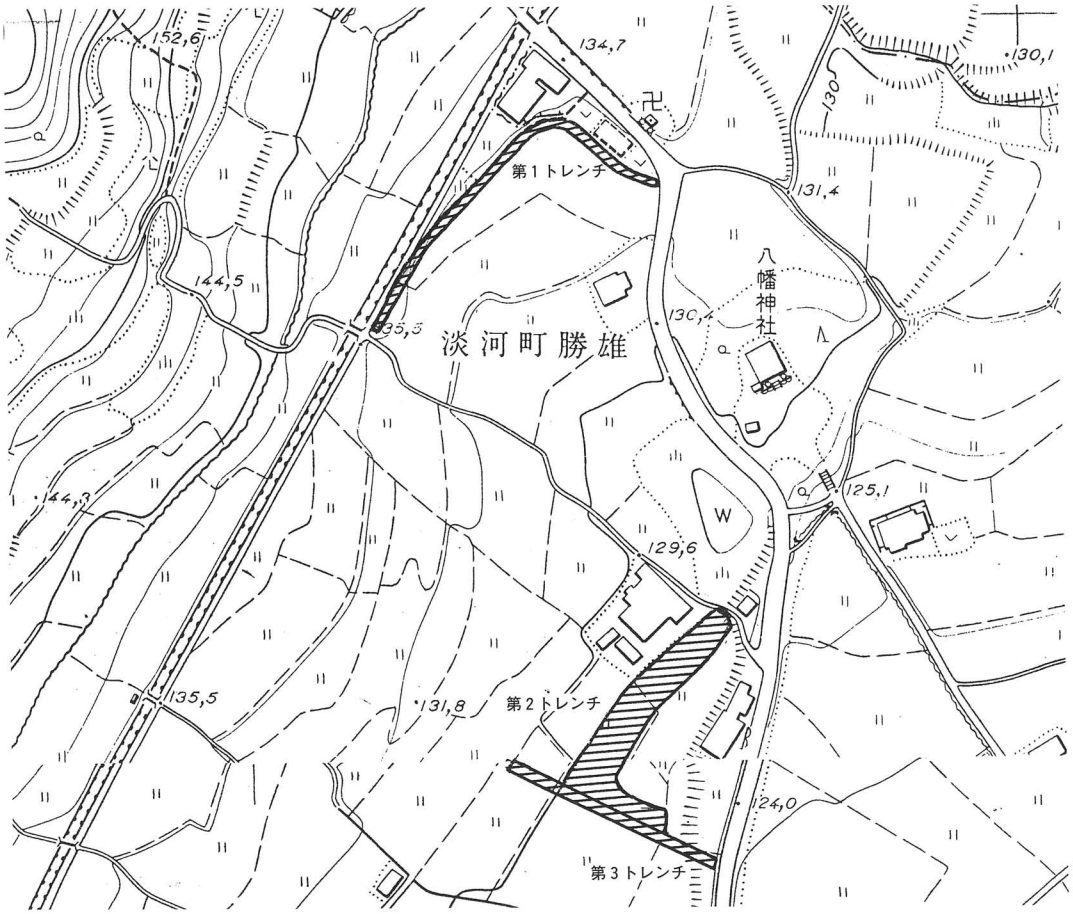


fig. 626
調査地位置図
1:2,500

2．調査の概要

第１トレンチ

全長 136m、幅３～４ｍの水路部分の調査区であるが、現況の側溝の保護のため、調査不能の部分があり、実際に調査を実施した幅は2.1～3.8mである。便宜的に北東側より１～４区の小地区を設定して調査を行った。

ピット

１区でピットを18基検出した。直径20cm前後のもので、深さは深いもので20cm程度である。掘立柱建物としてのまとまりを確認することはできなかったが、なかには礎板と思われる人頭大の石が３個充填されていたもの（ＳＰ08）あり、掘立柱建物の柱穴も含まれていると考えられる。ピット内からは少量の土器しか出土しておらず、不明であるが、中世のものと考えられる。

ＳＸ01

４区で検出した落ち込みで、全体の形状は不明だが、長方形状に15×３ｍの範囲にわたって緩やかに削り込んだ内部の5.7×1.0mの範囲を10～17cmの深さで一段掘り窪めている。埋土からは、奈良時代後半～平安時代前半、中世の土器が出土している。

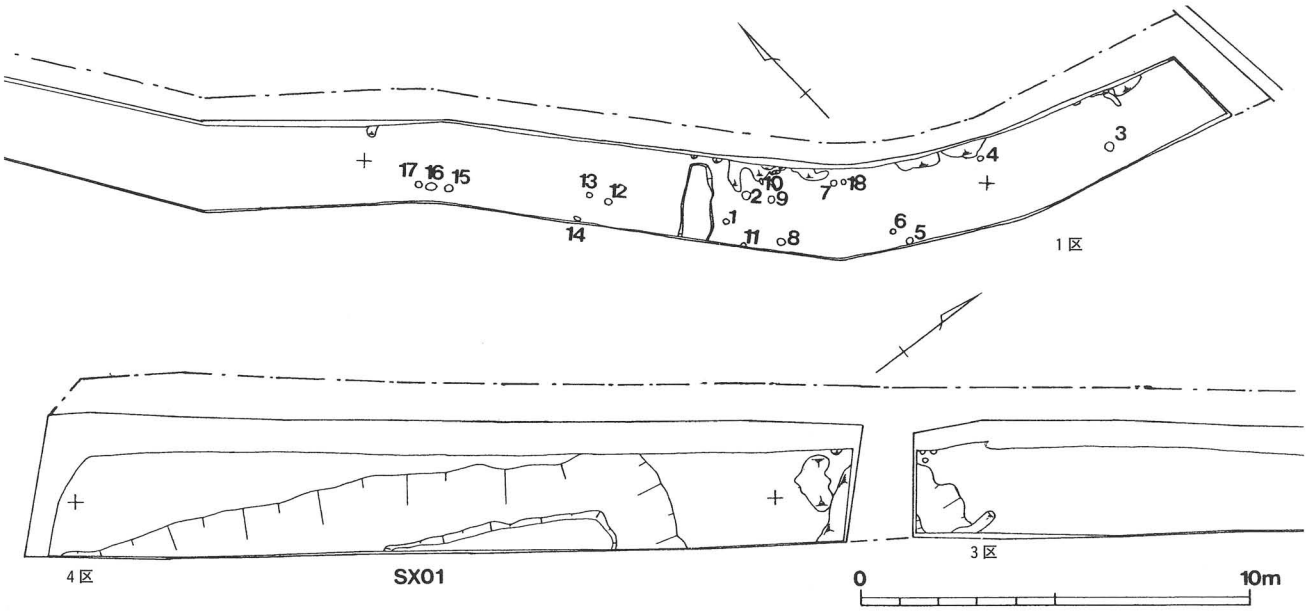


fig. 627　第１トレンチ　遺構平面図

fig. 628　第１トレンチ－１区　全景

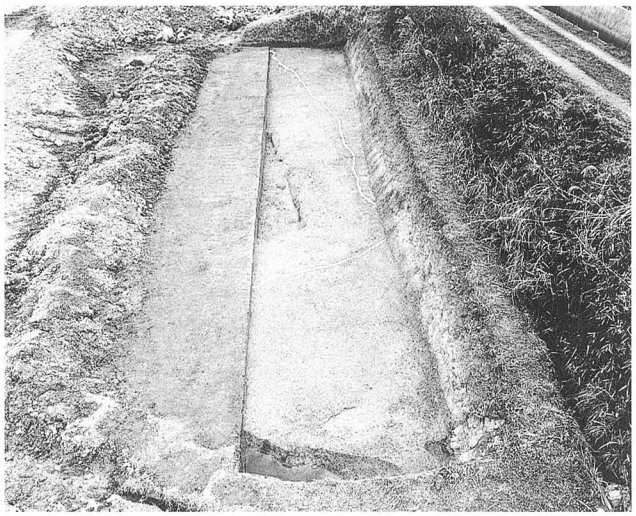


fig. 629　第１トレンチ－４区　SX01

第2トレンチ　基本層序は、耕作土・床土・旧耕作、その下層に室町時代・奈良時代の遺物包含層である明灰色粘性砂質土が調査区全域に堆積していた。全体の傾向として、北西～南東に傾斜して、所々に旧地形と考えられる落ち込みを検出した。この落ち込み内からは、室町時代の須恵器などが出土していて、調査区全域を平坦に造る作業が行われたと推定される。調査区南西部で検出した畦状遺構は、室町時代以降は水田化への痕跡と考えられる。

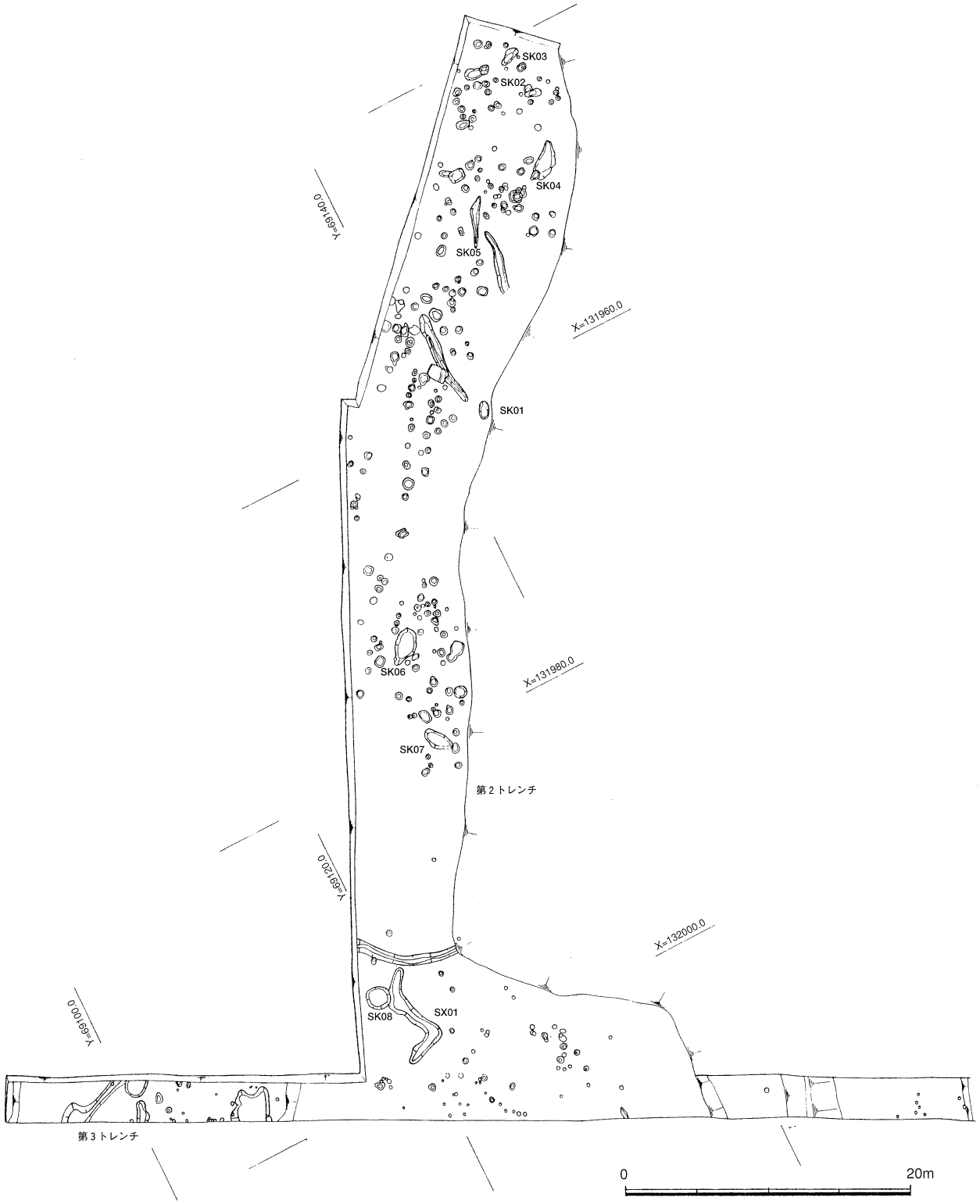


fig. 630　第2・3トレンチ　遺構平面図

fig. 631　第２トレンチ　全景

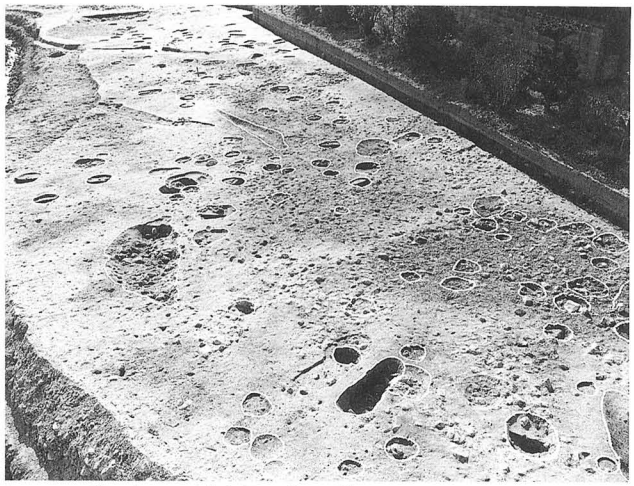


fig. 632　第２トレンチ中央部　ピット群

柱　穴　群　調査区の南部でも検出されたが、特に調査区中央部から北部で高い密度で検出された。柱穴の多くが、直径25cm前後、深さ20cm前後の円形の掘形であるが、中央北よりに検出した柱穴群は、一辺50cm前後、柱痕跡径20cm前後の方形の掘形で、柱の抜き取り痕跡の明瞭なものも一部にある。柱穴群の上層からは、奈良時代後期後半の須恵器が比較的多く出土しているが、建物としてはまとまらなかった。

土　　坑　検出された土坑の規模等は、以下の表にまとめたとおりである。

遺構名	規　　模（m）	平面形	出土状況
ＳＫ01	長径1.2・短径0.7・深さ0.25	楕　円	断面形舟底状。人頭大～拳大の河原石、須恵器出土
ＳＫ02	長径1.2・短径0.4・深さ0.21	長楕円	中央部が深くなる。出土遺物なし。
ＳＫ03	長径1.5・短径0.7・深さ0.10	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
ＳＫ04	長径3.0・短径1.2・深さ0.20	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
ＳＫ05	長さ3.6・幅　0.6・深さ0.10	溝　状	断面形Ｕ字状。出土遺物なし。
ＳＫ06	長径2.8・短径1.5・深さ0.20	不定形	断面形皿状。出土遺物なし。
ＳＫ07	長径1.7・短径1.1・深さ0.20	不定形	断面形舟底状。埋土から須恵器・土師器が出土。
ＳＫ08	長径1.7・短径1.1・深さ0.21	円　形	断面形皿状。出土遺物なし。

性格不明遺構　調査区南部で鍵形の溝状遺構を検出した。幅80cm、深さ10cm前後で断面Ｕ字形である。

ＳＸ01　南側コーナー部で土師質土器が出土した。

第３トレンチ　東よりＡ～Ｄ区の小地区を設定した。Ｃ区は第２トレンチと接している。

Ａ　　区　３面の遺構面を検出した。第１遺構面は、ピット８基を検出した。ＳＰ08は深さ28cmで、柱抜き取り後に拳大の礫を数個投げ込んでいる。第２遺構面は、溝状の落ち込みなどを検出した。第３遺構面は、ピット２基を検出した。

Ｂ～Ｄ区　Ｂ区では、ピット１基を検出した。Ｃ区では、ピット、落ち込みなどを検出した。Ｄ区では、２面の遺構面を検出した。第１遺構面は、鋤溝状の遺構を確認し、第２遺構面では落ち込み３ヵ所、畦１条、ピット多数を検出したが、建物としてはまとまらなかった。

３．まとめ　これまで北区淡河町地域における最も古い集落例は、土地改良事業に伴う淡河城の調査で発見された弥生時代後期末の頃と推定される竪穴住居址の例があるが、その実態は明確でない。今回の調査では、建物の形態は明らかでないが、多数の柱穴を検出し、一部で奈良時代の土器が検出された。この結果、淡河川右岸勝雄地区では遅くとも奈良時代後期には開拓が開始され、中世段階には文献などにみられる寺領経営に組みこまれたと考えられる。その一部が、今回の調査で検出された柱穴群であると推定される。